

2001北海道

# 大会集録

# 風よ 大地よ 雪よ

北からはじまる造形の未来

2001. 9. 6(木)7(金)8(土)



第54回 全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌  
第51回 全道造形教育研究大会

# 目次

○ あいさつ	北海道造形教育連盟委員長	芝木秀昭	3
○ 大会風景			4
○ 大会宣言			6
○ 全国代議員会等報告			7
○ 大会記念講演	文部科学省初等中等教育局視学官	遠藤友麗	11
○ パネルディスカッション			20
○ 分科会報告			
	なかのしま幼稚園会場	「遊びと造形」「もの・材料（環境）と造形」	32
	幌南小学校会場	「遊びと造形」	36
		「もの・材料（環境）と造形」	40
		「暮らしと造形」	44
		「個性と造形」	48
	三角山小学校会場	「遊びと造形」	52
		「コミュニケーションと造形①」	56
		「コミュニケーションと造形②」	60
		「個性と造形①」	64
		「個性と造形②」	68
○ 研究のまとめ			72
○ ワークショップ			76
○ 実践バザール			78
○ 参加者からの声			79
○ 大会運営組織			82
○ 編集後記			84

第54回 全国造形教育研究大会 北海道大会 in 札幌  
第51回 全道造形教育研究大会

大会テーマ

# 風よ大地よ夢よ 北からはじまる造形の未来

## 北海道大会 大会集録



◇会 期 平成13年 9月6日(木)・7日(金)・8日(土)

◇会 場 ホテル・ライフオーブ札幌  
札幌なかのしま幼稚園  
札幌市立幌南小学校  
札幌市立三角山小学校  
道新ホール  
札幌芸術の森  
札幌彫刻の森美術館

◇主 催 全国造形教育連盟  
北海道造形教育連盟

◇後 援 文部科学省・北海道教育委員会・札幌市教育委員会  
札幌市教育研究協議会・全国連合小学校長会・全日本中学校長会  
全国高等学校長協会・全国特殊学校長会・日本PTA全国協議会  
北海道国公立幼稚園長会・北海道私立幼稚園協会・北海道小学校長会  
北海道中学校長会・北海道高等学校長協会・札幌市立幼稚園長会  
札幌市私立幼稚園連合会・札幌市小学校長会・札幌市中学校長会  
札幌市立高等学校長会

# 第54回全国造形教育研究大会 北海道大会 in 札幌

## 第51回全道造形教育研究大会 を終えて

北海道大会大会長 芝 木 秀 昭

9月の北海道はさわやかです。このさわやかな、緑あふれる、ためされる大地・北海道において、第54回全国造形教育研究大会北海道大会、第51回全道造形教育研究大会を迎えることができました。

遠藤友麗文部科学省初等中等教育局視学官、三浦秀夫北海道教育委員会教育長代理、並びに、本間英昭札幌市教育委員会教育長代理はじめ、多数の御来賓の御臨席のもと、全国各地から1,000余名の造形教育に携わる先生方のご参集を得ました。

なかのしま幼稚園はじめ3つの授業会場を中心に、ホテル・ライフォート、道新ホール、札幌芸術の森、札幌彫刻美術館等において、2001年9月6日、7日、8日の3日間にわたり開催され、成功裏に終了できましたことを心より感謝し、お礼を申し上げます。

本大会は、21世紀の幕開けの記念すべき年に当たり、新しいフロンティア精神を結集し、未来を紡ぐ子供たちと共に新しい文化を築くことを目指すという願いがこめられております。

時あたかも教育界は、2002年の新しい教育課程の完全実施を目前に控え、第一の教育改革と言われる明治初期の学制発布、そして北海道造形教育連盟が発足した頃の戦後の新教育への転換時期でありました第二の教育改革に次ぐ、第三の教育改革の中にあります。今、学校におきましては基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るとともに、学ぶことの愉しさや成就感を味わうことのできる教育活動の展開が求められております。

特に造形教育におきましては、21世紀に生きる子供たちに、生涯にわたり美術・図工を愛好する心情を育てるとともに、「みずみずしい感性」、「豊かな人間性」や「生きる力」の育成、「心の教育」を推進していくことが期待されております。

これらのことをふまえ、本大会は「<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る」を大会研究主題に設定しました。

これは、未来を創る子供たちのために、<いま>を大切にし、未来に生きる夢を育み、<ここ>を大切にし、表現する喜びを分かち合える文化を築き、<わたし>を大切にし、心豊かに未来に生きる自分をつくる、という願いが込められています。

11の分科会では、実践に基づく貴重な発表と研究協議・情報交換等により、多くのことを学び合うことができました。

さらに「夢と感性を育む図工・美術教育」という演題のもと、新しい21世紀の造形教育のあり方について遠藤友麗視学官より貴重な御示唆をいただきましたし、《未来に向けて、自分を『ひらく』子供の姿とは？》をテーマとしたパネルディスカッションでは、村瀬千樫先生、水島尚喜先生、岩崎由起夫先生、金井秀男先生の和やかな中にも熱のこもった御提言により、新たな造形の教育実践に向けて貴重な御示唆をいただきました。また、歓迎演奏会での「アイヌのしらべ」の鑑賞を通して、アイヌの人々の伝統文化に触れていただけたものと思います。3日間を通じ、多大な成果をあげて無事終了することができ、私共主催する者にとりまして喜びとするところであります。

北海道大会実行委員会は、ご参集いただきます皆様の御期待に応えるべく英知を集めてこの4年間、研究と準備を進めて参りました。

特に、本大会は北海道の造形教育に携わる者の「かかわる力」が発揮された大会であったと自負しています。歴史と伝統のあるこの全国大会に巡り会い、かわり、第36回旭川大会以来、17年ぶりに北海道大会として歴史に残すことができましたことを、この上ない誇りに感じております。

今後、本大会の貴重な成果が、この集録とともに全国に拡がり、造形教育の発展に寄与していくことを期待しております。そして、来年の第55回沖縄大会に引き継がれ、全国造形教育連盟のますますの隆盛と造形教育の前進を祈念し、全国より御参会の皆様にご心より感謝とお礼を申し上げます。

本大会の準備段階から、多大な御指導、御支援、御協力を賜りました文部科学省、北海道教育委員会、札幌市教育委員会をはじめ、関係諸機関及び関係各位、支えていただいた顧問の先生方に心から感謝申し上げます。

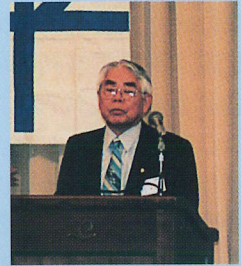
# 大会風景

【1日目】

## 開会式・全体会



受付風景



基調提案

【2日目】

## 歓迎演奏会



## 記念講演会





〈三角山小会場〉

# レセプション



〈幌南小会場〉



〈なかのしま幼稚園〉

# 【3日目】 パネルディスカッション



# 実践バザール



# ワークショップ



# 大会宣言

いよいよ21世紀が幕を開けました。私たちが子供の頃に思い描いていた21世紀は、科学万能主義に象徴されるように、便利でとても豊かなものであったように思われます。

2001年の「いま」の現状は、確かにものの豊かさに囲まれた便利で快適な生活が実現されました。また、個人がもちうる情報の量や幅も格段に大きくなり、一人一人の世界観に関する領域も広がりました。その一方で、一人一人を支えるものとして機能する地域共同体が力を失い、自分の内面における思考や感応を支える背景が不確かなものになっています。誰もが過剰に自分を信じるか、自分が信じることのできる仮定の絶対的存在をつくるか、あるいは、痛ましいまでに自分をあまいにして他者集団に順応するか、などというような自分の存在に確信をもちにくいという現状が、今日の危機的状況を生んでいるのではないのでしょうか。現代は、ものに対する豊かさから、一人一人の心の豊かさへの切望とそのベクトルの変更を確実に迫られているといえるでしょう。

このような時代だからこそ、私たちは造形活動の重要性を再認識する必要があります。それは、人と人・人とものが触発しあい、心の安らぎや安心感を味わうことのできる活動や、自分のやりたいことがわかり、自ら決定し、実現する喜びを味わうことのできる活動、健全な精神と自他や対象に対する誠実な心（愛）を育むことのできる活動こそが求められるのです。造形活動が力強くその存在価値を高めていくことで、まさに「文化発信社会の創造」が実現すると考えます。

私たちは、全国各地よりお集まりの方々と共に、フロンティアスピリットあふれるこの北海道の地で、「<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る」の主題のもと、現在の子供と教師の立脚点を明確にすることにより、自信を持って語る未来をつくっていくことの意味の大きさを共有したいと願っています。そして、子供の夢を、未来を、平和を、一緒に描くための一歩として、この2001年の全国大会を位置付けます。

第54回全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌、第51回全道造形教育研究大会の趣旨を踏まえ、ここに、造形美術教育に携わる者の総意により、下記の事項を宣言します。

具体的な活動を進めるに当たっては、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・障害児諸学校（学級）・短期大学・大学間の連携を密にし、造形美術教育の指導のあり方、一貫性を明らかにして、その充実を図ります。

1. これからの社会に向け、常に学び続けようとする意欲をもち、豊かな感性と知性が調和した人間形成と社会における豊かな文化の育成を目指す造形美術教育の一層の進化と充実を図ります。
2. 国際化する社会の中で、地域や諸機関との連携を図り、広い視野から造形美術教育をとらえ直すとともにその意義を広く社会にアピールし、造形活動を愛する青少年を育成します。
3. 保育園、幼稚園では、乳児・幼児がいきいきと生活できるように、豊かな心を育む環境・空間づくりにつとめ、また、自ら表現する喜びや楽しさを体験する造形活動の充実を図ることで、心豊かに未来に生きる力を育みます。
4. 小学校では、図画工作において、時数の削減にかかわらず、児童自らが選択し、自己決定し、自己の有能さを広げていくよう内容のより一層の充実を図り、生活の中で生きて働く造形活動を生むことで、つくりだす喜びを味わわせ、子供の未来につながる豊かな創造性や心情を育みます。
5. 中学校では、美術において、表現や鑑賞の幅広い活動を研究し、実践する中で、生徒一人ひとりに自分の可能性を生かした主体的な表現活動の楽しさや喜びを味わわせるとともに、美への感動、感性、情操、美意識など豊かな心の涵養を図り、未来に生きる調和のとれた人間性や創造的思考力を育みます。
6. 高等学校では、多様化する社会環境の中で柔軟にはたらき未来に生きる生徒の美的感性や美意識を深め、青年期における美術、工芸教育のより一層の充実を図ります。そのために、必修科目や学校設定科目の他、生徒の要望に応じた選択科目や学校設定科目の開設を推進します。また、時代に応えた諸条件の整備や専任教諭の配置を継続して推進します。
7. 短期大学並びに大学の教員養成課程では、造形教育の研究を一層深め、未来を担う子供たちに人間教育を押し進める人材の育成に努めます。
8. 障害児教育では、造形教育を通しての人間形成の重要性を深く認識し、ものとの出会い、人との触れ合いを大切にする実践や研究の充実を図り、未来に生きる温かな心情や感性、自立する態度を育みます。

平成13年9月6日

第54回 全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌  
第51回 全道造形教育研究大会

# 全国代議員会

日 時：2001. 9. 6

会 場：ホテル ライフォート札幌

参加者：57名

- 開会のことば ..... 北海道造形教育連盟 委員長 芝木 秀昭
- あいさつ ..... 全国造形教育連盟 委員長 矢木 武
- 議 事
  - 1) 2000年度事業報告・会計報告（承認） ..... 事務局長 伊藤 元一  
監査報告（承認） ..... 会計監査 三澤 文人  
決算書，会計簿，領収証等，監査の結果，相違なし
  - 2) 2001年度事業計画（承認） ..... 事務局長 伊藤 元一
  - 3) 2001年度本部役員・校種別役員（承認） ..... 事務局長 伊藤 元一
  - 4) 活動方針案等について ..... 事務局長 伊藤 元一
    - ① 研究大会
      - ・大会においては，開催地の運営方針を尊重し，代議員会，校種別部会等を通して，広く全国各地の意見を吸い上げ，運営に反映するよう努める。
      - ・同一地区での開催が続く事の無いよう，全国各地での開催に努める。
      - ・全造ニュース等を通して連盟，各地区，ブロック等での研究大会の情宣に努める。
    - ② 研究および研究交流
      - ・教科教育について一層の研究実践を深める。
      - ・InSEA大会の情宣（ニューヨーク大会）および国際的な見地での研究を図る。  
（ニューヨーク大会参加ツアーの規格）2002年8月19日～24日
      - ・日本教育美術連盟との共催事業の開催を通しての研究交流に努める。
    - ③ 総合的な学習の時間に対する取り組み
      - ・基本として，図工・美術・工芸教育が総合的な学習の時間のための方法や手段として位置づけられることのないようにする。
    - ④ その他
      - ・全造連や各地区のホームページを活用し，研究事業，活動を発信すると共に，研究，意見を受ける場とする。
      - ・本年度は，次年度に向けて，InSEAニューヨーク大会参加ツアーの企画，日本教育美術連盟との共催事業の開催に重点をおく。
  - 6) 次期大会開催地について ..... 事務局長 伊藤 元一
    - 2002年度 第55回 沖縄県 浦添市他 8月1日(木)～3日(土)
    - 2003年度 第56回 交渉中
    - 2004年度 第57回 交渉中
    - 2005年度 第58回 (未定)
    - 2006年度 第59回 長野県 長野市
    - ・2005年度および2007年度以降の大会につきましては，各都道府県からの積極的な開催希望の申し出をお待ちしています。
  - 7) 大会宣言について
    - ・大会宣言（承認）
  - 8) 各地区，各校種情報交換
    - ・長野県－2006年の大会に向けて，話し合いが始まっている段階。会員数が減ってきている状況で活動がなし崩しに消えていくのではないかという危惧を感じている。造形あそびと総合的な学習の活動のあいまいさも話題になっている。
- 閉会のことば ..... 沖縄県造形教育連盟 会長 神山 泰治



# 全国小学校図画工作教育連盟研究会の報告

日 時：2001・9・6

会 場：ホテル・ライフォート札幌

参加者：参加者40名

- 開会の言葉（本年度開催県より） ..... 全小図連副会長 芝木 秀昭（北海道）
- 会長あいさつ ..... 全小図連会長 矢木 武（東京）
- 議 事

1) 平成12年度会計報告…事務局 永井和貴

2) 平成13年度役員選出

会 長	.....	(東京)	矢木 武
副会長	.....	(静岡)	小林 孝 (前年度開催県)
副会長	.....	(北海道)	芝木 秀昭 (本年度開催県)
副会長	.....	(沖縄)	友寄 英利 (次年度開催県)
事務局	.....	(東京)	永井 和貴

以上承認

3) 大会宣言について  
大会宣言案採択承認

4) その他

- ・ (東京) 美術教育について厳しい状況の中、社会にどのように啓発していくか問題。芸術文化を振興する法案が国会に出されようとしているが、美術・図工教育を振興させようとするものではなく鑑賞教育や伝統芸術などに力をいれていこうとするもので、現場の声を反映させ、学校での美術・図工教育の充実を図るものになるよう、関心を持って頂きたい。
- ・ (東京) 東京都図画工作研究大会城北大会についての案内、概要説明。

5) 研究発表

①野切 卓 (北海道教育大学附属札幌小学校)

「いま」「ここ」「わたし」を軸に展開する造形遊びの実践発表。

- ・ 「ふくらむミュージアム」4年
- ・ 「びっくり! WAO! な場所プロジェクト」5年
- ・ 「イサム・ノグチにふれて」6年 他、実践発表

②佐藤ひろみ (東京都中野区立江原小学校)

「楽しく造形活動をすることは元気の素」をテーマにした実践発表。

- ・ 「秘密基地」5年
- ・ 「町をきれいにするクリーン怪獣○○をぼくらでつくろう」

③油井ゆかり (東京都中野区立上鷺小学校)

身の回りにあるものや梱包材などを使った実践事例の発表。

- ・ 「一匹くん」 他、作品例紹介

6) 閉会の言葉 (次年度開催県より) ..... 友寄 英利 (沖縄)

# 全造連大会中学部会（兼：第44回全中美連拡大理事総会）

日付 平成13年9月6日(木) 午後

会場 ホテルライフオーソ札幌

出席：北海道10・千葉1・東京4・新潟1・山梨1・長野2・  
静岡1・愛知1・名古屋1・京都市1・奈良3・沖縄5・  
大阪市本部事務局6 34名

委任状：青森・福島・栃木・茨城・神奈川・岐阜・名古屋市・  
阪神六市・滋賀・岡山・鳥取・広島・熊本

挨拶 理事長代行（案件1で理事長承認） 谷山 育  
札幌市立常盤中学校長 角力山旭

基調講演 「全国中美連の歴史と課題」 元理事長・大阪城南女子短大教授 西川徳蔵

## 討 議

案件1 新理事長 谷山 育の正式承認

案件2 前理事長 姫嶋健二氏の連盟顧問承認

案件3 平成12年8月2日～13年9月5日までの活動報告・決算 承認

案件4 平成13年度活動方針・予算案 承認

- ①次々期教育課程を展望した21世紀の美術教育のグランドデザインの作成
- ②学習内容の精選（基礎・基本の見直し）
- ③ひとりの教師が3学年の必修と複数学年の選択のカリキュラムを作成し、授業実践を行い、併せて総合の学習に関わる苦勞への支援
- ④1年45時間（+10時間）の確実な制作時間確保
- ⑤総合の時間への美術的活動の研究・調査・紹介
- ⑥教科枠にとらわれた発想からの転換
- ⑦ボーダレス時代への対応  
（他校種・学校教育外・美術教育外・美術館・大学・地域との交流）
- ⑧専任教諭の問題、新規採用（定数問題）、教師の世代交代の問題への対応
- ⑨芸術文化振興法制定運動への協力

案件5 平成14年度からの本部事務局を東京に置くことの 東京の了解および承認

案件6 全造連大会「大会宣言文」本部提案どおり 承認

## 報 告

基調提案 「美術することの今を考える」 紙上提案 理事長 谷山 育

経過報告 「芸術文化振興法案制定運動について」 事務局長 今村忠志

地区報告 参加全地区発言

美術教師の数の低下、専任教師の比率が低下してきている問題点等の報告ネットワークの確立、インターネットの利用、義務教育の中での美術教育の重要性の確認、美術でなければできないことを見つめ直す「熱意」が美術の必修としての存在を守ることができる。等の発言があった。

閉会の挨拶 東京都中美委員長 梅村 勝（次年度本部事務局担当地区）

## ◆全国大学造形美術教育養成協議会 総会

2001. 9. 6 AM. 10:00~12:00  
ホテルライフオー ト札幌  
参加者26名

- 開会の辞……………副会長 小杉教一（道都大学）
- 会長挨拶……………会 長 仲瀬律久（聖徳大学）
- 議長選出……………春日明夫（東京造形大学）
- 役員紹介……………会 長 仲瀬律久（聖徳大学）
- 議 事

### 1) 報告事項・平成12年度

- ・事業報告…前会長 芳賀文治（東京造形大学）
- ・会計報告…前事務局長 春日明夫（東京造形大学）
- ・監査報告…監事 中原喜郎（聖母女学院短期大学）

### 2) 協議・平成13年度

- ・事業計画…会長 仲瀬律久（聖徳大学）
  - ◇第54回全国造形教育研究大会in札幌に参加  
全美教総会・全造連大学部会・研究発表会・  
道都大学訪問（施設見学、協議会）
  - ◇名簿の作成…昨年に引き続き本年度もその重  
要性から作成する。
  - ◇研究実践報告書の発行…今回の発表者を含め  
原稿を依頼し作成する。
  - ◇会報の発行…年4回発行する。
- ・平成13年度  
予算計画…事務局長 小泉卓（聖徳大学）  
—以上承認—
- ・教員養成に関する諸問題と全美教の活性化に関  
する協議
  - ◇課程認定がとりやめになり専任が退職すると  
非常勤に変わるなど、美術教育の教員の削減  
が行われる大学があることが報告された。
  - ◇北海道では中学の美術の教員が専門以外の授  
業を持つことが求められたりすることがある  
ことなどが報告された。
  - ◇幼児教育の就職に関して、都市部は良いもの  
の地方では大変であること、北海道の歴史の  
ある大学でも100%は難しくなっていること  
が報告された。
  - ◇大学に入学してくる学生の美術嫌いが問題に  
なり、高校での美術の体験の少なさなど指摘  
された。
  - ◇全国のさまざまな情報を交流していくことが  
話された。

### 3) 議長解任

### 4) 連絡 等

- ・道都大学訪問について連絡が行われた…副会長  
小杉教一（道都大学）

### 5) 閉会の辞…副会長 村上暁郎（武蔵野美術大学）

## ◆全国造形教育連盟大学部会 総会

2001. 9. 6 総 会P.M13:00~14:00  
研究発表P.M14:00~15:00  
ホテルライフオー ト札幌  
参加者26名

- 開会の辞 ……………春日明夫（東京造形大学）
- 会長挨拶……………全造連大学部会会長 仲瀬律久
- 全造連委員長挨拶……………全造連委員長 矢木 武
- 議長選出 ……………水島尚喜（聖心女子大学）
- 大学部会役員紹介
- 議 事

- 1) 平成12年度事業報告……………教大協 阿部靖子  
（上越教育大学）
- 2) 平成12年度会計報告……………教大協 同 上
- 3) 平成13年度事業計画……………小泉卓（聖徳大学）
- 4) 平成13年度予算案…………… 同 上
- 5) 大会宣言文の検討……………全造連大学部会  
会長 仲瀬律久  
—以上承認—

### ○協 議

- 1) 教育大学協会全国美術部門の活動・動向  
……………教大協 西野範夫（上越教育大学）
- 2) 私立大学の教員養成に関する諸問題  
……………全美協 小泉卓（聖徳大学）
  - ・法人化の問題や、教科の枠の問題、子どもの多  
様な能力の追求などが話題となった。

### ○議長解任

### ○閉会の辞…教大協会長 西野範夫

### ○研究発表（14:00~15:00）

司会・進行：市川和子（共立女子大学）

- ・浅川正樹（小田原女子短期大学）

テーマ…「教員養成校における

情報教育の展望と実際」

- ・鳥越亜矢（山陽学園短期大学）

テーマ…「それぞれに違う『わからない』に  
耳を傾ける授業を目指して」

—学生の造形体験を踏まえた

授業支援のあり方—

- ・佐藤昌彦（北海道教育大学函館校）

テーマ「アイヌ文化と造形美術」

記念講演会

「夢と感性と創造性をはぐくむ図工・美術教育」

—心豊かに生きる美術教育の教科性—



遠藤 友麗 氏 —文部科学省視学官—

こんにちは、ご紹介いただいた遠藤でございます。

今日、「夢と感性と創造性をはぐくむ図工、美術教育」という題をいただいて講演ということですが、平成10年に新学習指導要領が示され、来年から新学習指導でやることになったわけですが、今度さらに時間数が少なくなりまして、小学校も図画工作の時間が減りました。と同時に中学も減りました。

みなさんご承知のように中学校の美術や音楽は、学習指導要領を改訂するに当たり、当時「美術・音楽に才能のある好きな子が部活動でやればいい、教科としてはいらない。」というようなことが新聞で出ました。それから、「芸術的な活動や体育の活動は地域の活動でやったらいい。」「土曜日・日曜日休みに学校開放して美術や音楽をやりたい子がそこで好きにやったらいいじゃないか。」「学校の教科がなくてもいいじゃないか。」ということも色々な方に言われました。「図工、美術は子どもが自由に表現すればいいんだから、先生がついて教科としてなくてもいいじゃないか。」「教えることがなければ専門の美術の先生はいらないじゃないか、非常勤でいいじゃないか、保護者を監督につけておけばいいじゃないか。」というようなことも言われました。でも、私ども美術、図工の仲間からすれば、「いや、とんでもない。美術教育は豊かな情操を育てているんだ。今の少年非行見てみなさい。美術、音楽を軽視してるからこういうふうになるんだ。」いうことをよく言います。私も、先生方から言われます。先生方の怒りは同じようにわかります。

でも、そうするとなんて言われたでしょうか。「じゃあ、アメリカは美術教育は必修ではないぞ。」アメリカは小学校から選択なんですよね。だから、小学校から美術を全然やってない人間もたくさんいるんです。「アメリカは美術は必修ではないぞ。学校教育で無いのに、どうなんだ。情操は育っていないか。」フランスも中学校では美術は必修ではないです。

日本国民は小学校1年生から高校生になるまで皆、10年間は必修として美術教育を受けてきてるわけです。美術教育不要論を唱える人たちは「10年間美術教育を受けてる。それなのに少年非行こんなに多いのか、豊かな情操が育っているのなら少年非行は起きないはずだろう。いじめは起きないはずだろう。」と言う。「いじめを防止するために情操教育が大事だ、美術や音楽の芸術教育が大事じゃないですか。」って言うと、「それじゃ、図工、美術の芸術教育をたくさんやったところは、少年非行が少ないのか。」「私立学校見てみなさい。音楽、美術をやっている学校あるぞ。やってない学校では少年非行は起きてないじゃないか。」「音楽、美術を学校教育でちゃんと高校までやってるのに、少年非行多いじゃないか。校内暴力多いじゃないか。」と言われます。このような考え方に、みなさんだったらどうやって答えますか。

私たちは、学校教育で美術の必要性というのは、そういう不要論を唱える人たちにも、一般の人たちにも理解されるように、もうちょっと論理的に説かなきゃいけない。

「絵を描いたり、造形遊びをやったりすると、心が豊かになるのだ。感性が豊かになるのだ。」って言うけど、本当になるのでしょうか。そこのところは、確かにそうだという責任を持てるのでしょうか。

一言でいえば「情操なんて育てないじゃないか。」そう言われてきた。だから、今、少年非行が増えても、「だから芸術的な教科を大事にすべきだ。」という声はどこからも出ないんです。保護者からも出ない。美術教育の人間は大事だって言うんですが、美術教育の当事者以外から出ない。

創造性が大事だって言った時、多くの親達、大人たちは、「だから科学教育を振興しろ。理数の勉強しっかりやらせろ。もっと時間数増やせ。」と言い、「図工、美術を増やせ。」と言わないんです。「図工、美術は創造性を育てるんだ。」って叫んでるけど、図工、美術の学習を10年間もやってきたはずの一般の人たちは全くそんなこと思ってないんだっていうことを、ちゃんと考えなきゃいけない。

学校教育、「週5日制になったら、どういう教科を大事にする必要があるか。」という意識調査を当時の文部省はしております。その時に、「音楽、図工、美術を大事にすべきだ」と、答えたのは2パーセント程度です。第1位は、国語。国語っていうのは、ほとんど100パーセントの人が大事だって答えている。算数も理科も社会も英語も全部大事だと、全部上位です。図工、美術、音楽は最下位です。その人たちは、図工、美術教育を知らないんじゃない、ちゃんと10年間受けてきてるんです。だけど、「図工、美術教育は才能のある人や芸術家になる人以外にはいらぬ。」「図工、美術で豊かな心なんて育てない。創造性なんて育てない。」という認識になってしまっているのが現実です。

図工、美術教育が本当に創造性を育ててきたのなら、今、日本は創造性が大事だ、産業の振興のために創造性が大事だって言ったときに、「だから図工の造形遊びが大事だぞ、美術教育が大事だぞ。」と、言ってくれるはずなのに、誰も言ってくれないというのはどういうことなんでしょうか。美術教育に携わる我々だけが「造形遊びをやると創造性が育つ、美術で絵を描くと表現力が育つ。」そんなふうに勝手に思っているだけじゃないでしょうか。

私どもがこれから大事にしなければならないのは、美術教育が大事だと言ってくれない人たちが「本当に創造性って育てるぞ、感性って育てるぞ。」「豊かな情操って、美しいって、美術で勉強したよ。図工で勉強したよ。」、そういう認識を持たれるような図工、美術教育をしなければいけない。自由に楽しく表現するのも大事だけど、教育というのは必ず目標があって、その目標を実現するために、教育するわけです。

これからの社会はビジュアル社会です。今までは、文字ですべてコミュニケーションをしてました。これからは文字だけじゃいけません。写真も使ったり、絵も使ったり、今はインターネット受け取ってる時代だけど、これからはインターネットに画像を作って発信する時代です。情報を自分で作って、発信してコミュニケーションする時代です。絵が描けない人はインターネットの画像は作れないんです。だから絵が描けるということは、大事なことなんです。

美術は学校で無くてもよいと言う人に、私は、「いいネクタイしてますね。センスがいいですね。これ、あなたが選んだんじゃないでしょう。奥さんに選んでもらったんでしょう。」とわざと言う。「いや、わしが選んだんだ。」「いやそんなことない。あなたがそんなの選べるわけがない。とってもいいセンスだ。」「いや、わしが選んだんだ。」「じゃ、どういう基準で選んだんですか。」「色が、色と形がデザインが自分に似合うかどうか。」「その色と形とデザインとおっしゃいますが、それどこで勉強しましたか。学校の勉強で色と形とデザインとどこに出てきますか。」「それ美術だなあ。」「そうすると、美術なんかいらんって言って、あなた美術の能力使ってますよね。色と形で選んでるんじゃないですか。それは、美術の中で“構成”っていうんです。色と形の構成、構成がいいかどうかっていうことなんです。国語で色と形やらないですよ。社会で色と形やらないですよ。数学で色と形やらないですよ。色と形は、美術で勉強してるんですよ。なのにどうして、美術はいらんと言うんですか。」そうやって論理的に相手を説得していくんです。「なるほど、それは大事だ。」そうやって14年間ずっと美術教育の必要性を説いてきました。

私の講演の前にアイヌの音楽がありましたね。良いですよ。何か心にしみるような、電気のギターと違う生の音のしかも柔らかい音色ですよ。非常に心が穏やかになる。あれはなんでしょう。伝統楽器ですよ。日本の伝統音楽です。音楽は、小・中学校とも日本の伝統音楽を経験させること、ということが今度の学習指導要領で義務づけられました。

美術も日本の伝統文化を尊重する、日本の美術を重視すると入れましたが、残念ながら美術教育の場合には、「なんだ伝統文化、あんな古いものいらない。」っていう人も結構多い。やはり、伝統文化は過去の人たちがどう生きたか、ということ。そして、過去の文化がどれだけ優れたものがあるか、ということなんだと思います。

私はよく申し上げるんですが、阪神大震災、神戸の大地震で巨大なビル、高速道路もたくさん倒れました。だけど、1400年も前の釘が1本も使われてない法隆寺の建物が、台風にも地震にも耐え倒れないじゃないですか。どんなに科学の粋を集めて、科学の創造性を集めて巨大な高速道路と巨大なビルを作っても、その多くが倒れてしまった。1400年も前、学校なんかない、知識を伝えるところもない、クレーン車もない、トラックもない、電動カンナもない、何にもないところで法隆寺の五重の塔を作って、それが大地震にも耐え、すごい台風にも耐え、1400年もまだ大丈夫だ。このことを考えても日本には素晴らしい創造性があった。

その法隆寺の建物は現在でいう北朝鮮・中国から伝わってきたものです。政治的にみれば、北朝鮮と日本は国交を回復してないから友好関係ではありません。しかし、日本の文化の一つの基礎を築いたのは、まちがいなく昔の高句麗、新羅、ああいう中国・北朝鮮の人たちが日本に来て文化を創ってくれたんです。そして、それを日本化して平安時代の和絵の文化から今の文化までの営々として日本らしいものを作ってきたんです。そういう点では、美術の世界では、北朝鮮も中国もどこも、感謝すべき大事な存在なんですよ。そういう文化という観点から、やっぱり美術を通して勉強させることが必要あるのではないのでしょうか。

歴史の教科書で見ると、古き時代の歴史を語るその6割以上は美術の文化遺産です。建築であったり、彫刻であったり、絵であったり。あと、書がありますよね。それなのに、美術教育はその歴史の学習を捨ててしまった。新しければいい。そういうことしてきたから、あまり価値がなくなりました。美術で学ぶことはないって言われてきてしまった。私はそこが残念でならないのです。

美術が文化を勉強する時にはですね、先人達は、どうしてこんなすごいもの造ったのか、こんな美しいものを造ったのか、過去の創造的な知恵、創知、創造的な知性、創知を勉強しながら、では自分達はこれから先どんなものをつくっていったらいいか、クリエイションをしていくわけです。新しいものをつくる、新しい考えというときに、では今までどんな考えだったのかって知らなければ、新しいっていう価値は出てこないわけですよ。そうですよ。自分の好きなようにやっただけでは創造ではないですよ。創造ってというのは新しい価値を作り出すことなんです。

私は創造というのは三つの創造があると思うのです。一つは「生きる」こと。創造って何だっていったら「生きる」こと。まずは、「生きる」こと。我々が生きてることは、まさに創造ですよ。1秒先のことは無い、存在しないんです。無い世界に自分が拓き足跡を示していくわけですから、生きてること自体が創造です、「自分が人生を生きている」こと自体が、まず、第一の創造なんです。

今度はこういうの創ったよね。今度は、これきっかけにしてヒントにして、もっといいものを創ろう、もっと面白いもの創ろう。今よりもっといい世界を創るのが創造でしょう。ですから、創造といったときに、まず、第一に大事にすべきは「創造的に生きる」ことだと思います。生きて学力がトップになるとか、学力が高いとか、金持ちになるとか、大きな家に住むとか、そんなことは関係ないんですよ。貧富の差もない、地位も何も関係ない、とにかく人間は、命を持って「生きてる」こと自体が日々クリエイションなんだ。

二つ目の創造は「変えること」です。今までと違うやり方をする。今までと違うように変えてみる。例えば家に絵が飾ってある、あるいは飾ってない。飾ってないところに絵をひとつ飾る。淋しいから絵があった方が

いいから、絵を飾ることによって環境が変わるわけです。環境がもたらす雰囲気が変わるわけです。環境と雰囲気というものを創造してるわけです。そうですね。「変える」ということは大事な創造性なんです。どこを変えたら、もっとおもしろくなるかねえ。どこを変えたら、もっとよくなるかねえ。「変える」という仕事は創造性の大事な原点なんです。「変える」ということ。今日の自分より、明日の自分のほうがよくなる。「変える」ためにはもとがあるんです。今日、今がこうだから、こう変えてみよう。ものを作るんでも、今日授業でやったように、錐みたいので穴をあける。穴を今度、こっちからあけたらもっとよくなるんじゃないかな。穴のあける場所を変えるわけです。「変えた」だけで、また世界が違う、できるものが違ってくるわけです。

三つ目の創造は「新しい価値を作り出すこと」、これが本当の創造であるわけですね。科学で言えば、今までの理論じゃなくて、新しい理論を生み出す。美術の世界でも、今までの表現じゃなくて、新しい表現の価値を創り出す。これがなかなか専門家でないと出来ません。現代アートの芸術家が石を削ったり、金属を溶接したりとかして置いてある。鑑賞するときに、「理解なんていないんだ。」「なんていう人は、「自由に見なさい。」っていうと、「変なの？」ってつい言っちゃう。「何だか、わかんない。」「ふーん。」で過ぎちゃう。それだったら、そのオブジェを作った人に失礼じゃないでしょうか。やっぱり、「どうして、これ創ったんだろう。」と考えさせたり説明してやったりすることによって、クリエーションというものがわかってくるし、作者の心情もわかってくる。

さて、学校教育でいらないと言われてきたところを、何とか残しました。小学校も時間数は減りました。中学校も減りました。でも、しょげてちゃいけないと思いますね。必修で1時間にされちゃったという考え方じゃなくて、なったものはしょうがない。私はいつもいんです。“0”になるところ、“1”に戻したんだ。相撲でいうところ、土俵を、俵を割るところ、もう一回、“1”まで戻したんだ。1時間であろうとなんだろうと、必修ということは、日本人である以上これは必要な学習なんだと位置づけたことなんです。好き嫌いかかわらず、日本人は必ずこの学習をしなければなりませんと、国も定めたものなんだ。必修なんだ。だから1時間だってとりあえずいいじゃないですか。道徳の時間、特別活動の時間だって1時間しかないですよ。だけど、道徳教育は大事にしています。特別活動も大事にしています。だから1時間でも卑屈になることはない。1時間、堂々と一生懸命やればいい。そして、中学2年生・3年生は選択2時間まで取れるんだから、子ども達の意識調査を取って、子ども達が選択の授業2時間やりたいてアンケートいっぱいって、学校で出せばいいじゃない。そうすると、必修と合わせると3時間取れるんです。

小学校は選択っていうものがないですけど総合的な学習の時間でも取れるんです。総合的な学習の時間で、例えば「動くおもちゃを作ろう」なんてやったらどうでしょう。「動くおもちゃ」で、その時「動く」というのは科学の仕掛けですよ。電池で動くか、電気で動くか、ゴムで動くか、ぜんまいで動くか、水力で動くか、風で動くか、人が引っ張って動くか、これみんな動く仕組みは科学ですよ。理科ですよ。そうでしょ。動く仕組みは理科で勉強する。「おもちゃ」は図工。だから、理科と図工、美術の教科の連携したものだから、「動くおもちゃ」というのは、総合的な学習でぴったりです。

また、美術の教科性ということで話をしますが、そういう点でお手元の資料、3つの教科性という中学校の解説書に書いてあることですが、教科性っていうことを是非意識して下さい。

3つの教科性をちょっと、読んでみましょう。まず最初に、わざわざ書いてある。「学力だけが教育ではない」。今、学力論争が強いですが、学力っていうのは大事なことですね。基礎学力も、創造的な学力も大事ですよ。これ否定しないし、やっぱり大事ですよ。だけど、学力だけが教育ではない。

次に、芸術、美術、図画工作の教育内容の2本柱。これ、私が必修を残すために訴えてきたことですよ。  
《\*知性と感性は人間の人間たる最高の資質であり、芸術と科学は人類が生み出した最高の創造である》。知性と感性というのは、他の動物は持ってないんだ。人間っていう動物しか持ってない。チンパンジーが美しいものを取るということはないんだ。チンパンジーがものを作って、創造性で自動車を作るとかということはないんだ。知性と感性は、人間の人間たるアイデンティティだ。そして、芸術と科学は同根の創造なんだ。科学は機能の創造、芸術は美の創造、美や形の創造が芸術である。科学は機能の創造だ。寒いからどうするか。暖房機を作る。機能を作るのが科学である。形や美しさを作り出す、これが芸術ですね。

そして、《①芸術を創り出す方法を経験し学び取り、新たな価値の創造を試みること。(表現創造)》これが、表現という勉強なんだ。表現って好きなように文字を並べて、表現してるわけじゃないんだ。何のために表現してるのかっていうと、芸術を創り出す方法を経験し学び取り、新たな価値の創造を試みること。わざわざ、新たな創造を試みる、と書いてあるのは、新たな価値を創ることじゃない。新たな作品を作ることじゃない。試みることなんだ。新しいことを創ろうとしてやることなんだ。プロは、新しい芸術を創り出す。子ども達はプロじゃないですから、新しいものを創り出そうとして、試行錯誤する。その学習経験が大事なんだ。そして、芸術を創り出す方法を経験して学び取る。常に、前にやった学習が次の学習に生きて、次の学習はもっと面白い学習に、もっと面白い取り組みにならなきゃいけないんです。そのためには、活動で終わってはいけません。

(そして)鑑賞っていうのは、こういうことです。《②過去につくり出し、守り伝えられてきた芸術を味わい、それにかかわった人間の生き方や文化、創造知や感性に学び、生きる上での芸術の価値を理解すること(鑑賞)》これが、鑑賞です。人間はなぜ芸術なるものを創り出したのか。その芸術の意味がわかるようにするのが、中学、高等学校の鑑賞です。小学校は、まだそこまでいけませんよ。あくまでも発達段階からすれば、幼児期だとか小学校の低学年だとかは、まだわかんないです。

例えば幼稚園の子どもに、「どういう絵を描きたいの?」、「何を作ろうとしてるの?」と問うても「わかんない。」としか答えない。つまり、作ることを楽しんでいる。これ造形の初歩ですよ。初歩として基礎、大事なんです。作ることが面白い。何か手を動かしたり、身体を動かしたり、道具使ったりすると、何かができるんだ。そういう経験をしながら、だんだん目標をもって作るようになる。目標を持って表現するようになる。その時には、目標を実現するための方法が必ず必要なる。だからそれは、絵の具でやろう、いや絵の具よりもこういうほうがいい。いや、粘土でやろう、ペットボトルがいい。方法は材料が伴いますから。

方法論を勉強するには、学年が上になるにつれて、中学校になれば、ちゃんとした日本の美術の絵巻で表現しようとか、今まで四角い画用紙でばかり表現していたものが、今度は絵巻になると表現する世界が違ってくるんです。今日、三角山小学校で見た、三角山小学校では、たぶん、いつもは四角い画用紙に描いてるんでしょう。ところが、三角形の画用紙に人物を描いてみる。人間を描いてみる。四角い画用紙だったものを三角形にすると、三角形の画用紙の中に描くようにすると、絵が変わるわけです。先ほど言った創造性のうちの二つ目「変える」。画用紙の形を変えると、そこに描かれる絵も変わるんです。絵巻になると絵が変わるんです。扇形になると絵が変わるんです。

中学校で1点透視図法を教えます。2点透視図法も教えます。線遠近法で教えています。しかし、日本の美術には線遠近法なんてありません。それなのに、なんで1点透視図法でばかり絵を描かせるのか。

日本の美術には、写真のような絵はありません。源氏絵巻を見てください。ヘリコプターも無かった。飛行機も無いですよ。高いビルも無かったのに、どうして上から見た絵が描けたのか。想像して描いたんです。だけど、日本の美術を教えてないから、絵というと「遠くは小さくなって、遠近法じゃないといけない。」と考えてしまう。そんなことないですよ。子ども達に日本の美術を学習させて、金の雲を配して、全然遠くの東京と大阪と一緒に描くとか、東京のビル街の向こうに大雪山があるとか、描いていいんじゃないですか。私は、



自分の日本画の中に薬師寺の池と薬師寺の絵を描いて、そこに富士山を描いています。「まほろば」という題です。「日本のまほろば」、日本の美しいところ。薬師寺を描いて、その前に池を描いて、そこに金の雲を配して、そこに富士山を描いています。絵というものは、そういうものです。

その次を読みますが、《\*美術教育はこれらの柱を基に児童生徒が夢や目標をもち、自ら課題（主題）を設定し、創意工夫しながら粘り強く課題解決を図り自分の答えを生み出していく生きる力を培う学習を旨とし、その過程を通して造形的表現・創造力の教育、芸術文化の教育、豊かな心の教育、たくましい自己実現を図る態度の形成をする教育を担っている。》（こんなふう）に）どんどん話をしていって、必修教科として位置付けを築いたわけですよ。「それじゃ、美術も大事だな。そういう勉強大事だな。」と認識されたわけです。

その資料の中で、点線で囲ってありますが。《美術は目に見えるものや、見えないものや想像や心、感情、イメージ、発想など、形、色、材、（料・質）で可視的、可触的（ビジュアル）なものに表現し実体化する能力を育てる、唯一の教科である。》…「材」と書いてある、材料だけじゃない、材質というもの、触覚というもの。材料、材料って言っていますが。ペットボトルやダンボールや石っていうのは、材料です。材質っていうのも大事ですよ。自分の表現にこの材質でないといけない。この材質をどう生かすか。だから、わざわざ「材」と、書いてあるんです。括弧して、「料と質」、材料、材質。可視的、可触的、つまり、目に見える、手で触れるものに実体感できる教科なんだ。国語は、文字と音声言語だから、実態はわからない。記号なんです。記号で書いたり話したりして、あとは頭の中に想像して理解する。美術は、逆に、描いてある物がズバリわかる。作ったものはズバリわかる。これ、作ってあるから、コップだって誰だってわかります。これを言葉で表現しようと思ったら出来ない。文字で何百字書いてもわかんない。それ読みながら、このコップってどんな形かなと想像を働かせなければならぬ。美術は、その点、ズバリある。だから、ビジュアルコミュニケーションに向いてるわけです。世界をインターネットで結んで、ズバリわかるわけです。美術の表現力は情報社会に向いてるわけです。

その次に、3つの教科性の考え方の第一のコンセプト、「造形的表現・創造としての教科性」。

表現というのはその人自身のメッセージの表れでなければならない。私なら私のメッセージでなければならない。と同時に、メッセージである以上伝わらなきゃならない。子どもだったら、自分が表現したこと、分かってほしいという気持ち、絶対ありますよ。そして、美術で身に付ける表現技能には、描く、つくる、飾る、という3つ技能がある。そのほか、技能を、「表し、つくる」行為の中から自分なりの技術を身に付けることに始まって、その後、しだいに他の方法や技術を学び取り、自らの感覚、感性を技能化して可能性を広げていく。自分の持っていない方法を経験する。人の描いたもの、人の作ったものから、「どうやってこれ作ったんだろう。」「あっそうか、こうやって描くといいのか。」だんだんそういう経験を勉強した中から自分はこれでやりたい、というので個性化していく。だから、いろんな経験をさせなければならない。

第一のコンセプトは、①～⑤まで書きました。①表現の技能の育成。違う方法でやるといろんなものが分かってきます。そうすると、選択が出来ます。こういうことやりたいから、この方法でやろう。それが学習なんです。それから、②豊かな表現力の育成。あるいは、③想像力・発想力の育成。④生活の美的創造感覚・能力の育成、⑤直観的・全体的把握力の育成。全体的にパッと分かる。全体的に木の特徴が捉えられる。全体的に友達顔がパッと捉えられる。全体的把握力、造形で把握しているんです。形と色で把握している。これすごく大事ことですよ。人間は生まれてから死ぬまで、必ず色と形に関わっている。しゃべらない、文字と言葉に関わらない人は、ほとんどいない。それと同じように色と形に関わらない人はいないですよ。全部自分のこと、ファッション自体、色と形ですよ、髪型も色と形。茶碗選ぶんだって色と形で選んでます。すべて、色と形で選んでるんですよ。だから、色と形が自分に似合ういいものが選べるように、美的センスを高めていくのも図工、美術教育の大事なことですよ。

第二のコンセプト、実はこれを一番強調したいんですが、「文化・人間理解としての教科性」。芸術文化は、その国、民族のアイデンティティーと誇りである。そのことの話。アイヌの人は今、少数です。純粋なアイヌの文化を受け継いでいる人は極めて少ない。だけど、その文化のよさを学習によって、日本国民がすべて、その文化のよさがわかるようになる。外国の人もわかるようになる。

30億いる民族がやった芸術だから、それはすごい、20人しかいない民族がやったから大したことない、そんなことないんです。20人しかいない民族が1万年の間築いてきた伝統文化の方が、30億いる新しい文化よりもずっと優れているものがあります。先程申し上げたように法隆寺の建物は釘1本もないのに1400年経っても倒れないのに、近代的科学のアメリカから入った科学の粋であるビルが倒れてるじゃないですか。文化という視点で見れば、数人しかいない民族だろうと、たくさんいる民族だろうと価値は同等なんです。だから、美術、芸術文化が本当の国際理解、国際協調ができるんだ。

アイヌのあの楽器は良いじゃないですか。南アフリカの楽器良いじゃないですか。沖縄の蛇三味線も良いですよ。よさの価値はみんな同じだ。それを理解する勉強って、大事じゃないですか。これが「文化人間の理解」。美術作品のよさや作者の心情の理解、地域・国・民族などの伝統文化および人類が生み出した美や知、遺産の理解、伝承、共感、共生の感得、それら文化の国際理解、コミュニケーション。この辺も、鑑賞が中心になりますが大事にしてほしい。

そして、第三のコンセプトが「心の教育としての教科性」。まさに、美術は情操を育てる。どういふようにすると、どんな情操が育つか。情操は、科学的情操とか、宗教的情操、いろんな情操があります。そのうち、美術は、やっぱり美的情操ですよ。美しさが分かる、これが1番ですよ。美しいってことは美術、音楽しか持ってないですよ。美しい色を作ろうとか、美しい形を作ろう、新しい美の世界を作ろうと、心がけさせることは大事なことだと思います。それから、美に感動することは大事なことだと思います。

この3つの教科性ということ、しっかり構築していくと「美術は、表現だ。」ということだけではなくなると思います。実はもう30年も前から、研究開発学校などで表現科にしようとか開発研究が行われています。小学校中心に。図画工作と音楽、ダンス、表現活動を合わせて表現科にしよう。表現科にした方が、図画工作、音楽、単独でやるよりもずっと効果がある、という答えが出ております。今度学力が落ちたなんていうことになると、理数の時間増やせ、英語も小学校で入れるんだなんてことになると、音楽と図工、美術を合わせて表現にして時間数を浮かせると、なりかねないですよ。あるいは、総合的な学習でやって図工、美術の時間、音楽の時間取ってしまって、それを学力の時間に入れるなんてこともありえないとは言えませんよ。

やっぱり、教科性がしっかりしていないといけない。表現だけじゃない。表現というのは確かに中核ですが、それだけじゃない。自分が表現することを通して、他人を見て、他の国を他の民族の表現を見て、分かり合う、そして伝え合う。それから、美しいものに感動する、面白い、楽しいという感性的な価値も大事にしていく。

3つの教科性というのを含んだ学習をしていただければありがたいなあと思います。

理科教育を重視しろって今、言われています。「理科が、理数が創造性を育てる。」といっても、アメリカは450人もノーベル賞の受賞者がいて日本は10人もいないんです。先ほど言った、違うものの見方、面白い発想することをしない。決められたこと覚えるだけ、図工、美術はそんな教育しないようにしたいですね。かといって、ただ、自由にやっていたのでは創造性は育たない。新しいものの見方、違う見方、発見、気づきとかをたくさん組み込んでいかないと。

つまり教育というものは、仕掛けを作る仕事なんです。仕掛け。プロセスの中に教師がどうやって仕掛けを作るか。教育っていうのは、何かに気付かせたり、わからせたり、できるようにしたり、教師が上手に仕掛け

を作っていく。仕掛けを作ることがつまり指導計画の作成。指導計画を作ることは、題材名を並べることじゃないんです。そこで、創造性を育てるんだったら、どういう声をかけ、どういうヒントをやったら、創造的な考えをするかな。という仕掛けを作っておくということが、教師の指導の大事なことなんですよね。そういう点では、本大会で研究していた感性、感じるということは、仕掛けの原点です。どうやって感じとらせるか。感性ということをもっと大事にしたいと私は思っています。

芸術教科以外に感性って言葉は入っていないんですよ。創造力や想像力という言葉も図工、美術の教科しか入っていないですよ。他の教科だって育てているんだけど、理科でも感性育ててるんだけど、目標には入っていない。理科の指導要領にどこにも「感性、って言葉、書いてないですよ。感性が入っているのは、中学美術と小学校音楽と中学音楽と高等学校芸術だけです。また創造性、想像力ってというのは、図工と美術にしか入っていないんです。音楽に創造力って入っていないんです。そういう図工、美術にしか入っていない教科の言葉をもっと大事にしてほしい。科学の創造性って、理科の目標内容に「創造、って言葉どこにも入っていないですよ。入っていないことはやらなくてもいいってことなんです。入っていることは、それを目指していることなんです。それにぜひ誇りを持って、そのところの言葉をうんと強調できるような、図工、美術教育をやっていきましょうよ。

そして、それがこういうふうに出ましたよっていう、子どもの表現の中でこういうふうに出ました、とうんと宣伝しましょうよ。仲間内だけで言ってるんじゃなくて。

これからは、文化を発信していくんです。自分を訴えていくんです。子ども達のやった表現を外へ発信していくんです。是非そういうことをやっていきたい。

さらに、文部科学省は芸術文化を発信する国として、文化立国宣言したんです。いろんな条件づくりに私、一生懸命動いております。それこそ、国も動かして、どんどん芸術文化を発信して、日本が文化豊かな国をもう一回取り戻すために頑張っていきたい。そのためには、図工、美術教育、造形教育って絶対に欠かせないんです。

皆さん、卑屈になる必要はありません。1時間だから、減らされたからといって、卑屈になる必要ありません。美術のよさを、文化を発信していく、打って出る時代です。必ず分かる方々が多くなると思います。是非、一緒に頑張っていきましょう。長時間ありがとうございました。どうも失礼しました。

# 美術の3つの教科性

遠藤 友麗

学力だけが教育ではない！

<感情の陶冶、創造的表現、美の感受>

## <芸術（美術、図画工作）の教育内容の2本柱>

- \* 知性と感性は人間の人間たる最高の資質であり、芸術と科学は人類が生み出した最高の創造である。
  - ① 芸術をつくり出す方法を経験し学び取り、新たな価値の創造を試みること（表現創造）
  - ② 過去につくり出し守り伝えられてきた芸術を味わい、それにかかわった人間の生き方や文化、創造知や感性について学び、生きる上での芸術の価値を理解すること（鑑賞）
- \* 美術教育はこれらの柱を基に、児童生徒が夢や目標をもち、自ら課題（主題）を設定し、創意工夫しながらねばり強く課題解決を図り自分の答えを生み出していく生きる力を培う学習を旨とし、その過程を通して造形的表現・創造力の教育、芸術文化の教育、豊かな心の教育、たくましく自己実現を図る態度を形成する教育を担っている。

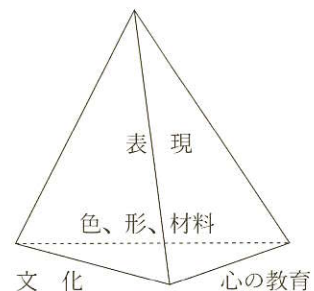
「美術は、目に見えるものや見えない想像や心、感情、イメージ、発想などを、形・色・材（料・質）で可視的・可触的（ビジュアル）なものに表現し実体化する能力を育てる」唯一の教科である。

### <第1のコンセプト> 造形的表現・創造としての教科性

- \* 表現は「その人自身のメッセージの表れ」でなければならない。  
美術で身に付ける表現技能には「描く、つくる（立体、映像）、飾る」という三つの技能がある。技能は表しつくる行為の中から自分なりの技術を身に付けることから始まり、その後次第に他の方法や技術を学び取り、それを自らの感覚・感性によって技能化していき豊かに可能性を広げ、一人一人の個性的な技能となる。
  - ① 表現技能の育成（自分の考えや心などを形色材という造形言語でビジュアルに表す「描く、つくる、飾る」などの基礎的技能的獲得）
  - ② 豊かな表現力の育成（自らの考え、心や感情、発想、情報などを美しく豊かに表現し、それを基にコミュニケーションしていく自己表現力・交流能力）
  - ③ 創造的想像力・発想力の育成（豊かな発想・想像に基づく芸術的・美的創作表現能力、ものづくりやデザインなど新しい発想や価値を創造する課題追究心）
  - ④ 生活の美的創造感覚・能力の育成（平素の生活や環境を形色材で美しく心豊かに創造するための美的なものづくりやデザイン能力の育成、様々なデザイン行動）
  - ⑤ 直観的・全体的把握力の育成（対象やものごとを全体的・直観的に捉える力）。

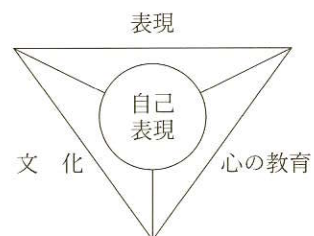
### <第2のコンセプト> 文化・人間理解としての教科性

- \* 「芸術文化は、その国や民族のアイデンティティーと誇りである」  
それぞれの地域、国、民族の芸術文化・人間のメッセージを読み取り共感し合う。
  - ① 美術作品のよさや美しさの感受、作者の心情などの理解
  - ② 地域・国・民族などの伝統文化及び人類が生み出した美や知の遺産の理解・伝承、共感・共生の感得
  - ③ 文化の国際理解、相互理解、コミュニケーション、（感情、情緒、価値、メッセージの共感的理解）



### <第3のコンセプト> 心の教育としての教科性

- ① 豊かな心の基となる感性・情操、知的思考力などを培う教育。
    - ・感動や思いやりなど豊かな感情、感性、情操、美意識、知的思考力などの涵養
  - ② 観察を通じた自然や命、色彩や形、構成の美しさなどへの感動・感受、鑑賞による美に対する豊かな心の涵養
  - ③ 表現による感情の発露と陶冶・昇華
- ・感性とは「価値の感受性（バリュウ・センス）」（価値や心情などを感じる力）
  - ・情操とは「よりよいものに感動し憧れ、それを大切な価値として求め続ける豊かな心の働き」



# パネルディスカッション

テーマ：未来に向けて、自分を「ひらく」子どもの姿とは？

コーディネーター：村瀬 千樫（北海道教育大学教授）

パネラー：岩崎由起夫（大阪教育大学助教授）

：水島 尚喜（聖心女子大学助教授）

：金井 秀男（北海道造形教育連盟顧問）

## ◇司会者から

○村 瀬：話し合いの柱は ①札幌大会についての話

②造形教育に関わる実践やその課題について

③造形教育の今後の方向と教科性、図工美術教育を啓発していくために

の3つと考えている。会場の方からの話も交えて、参加者が学校へ帰ってから「これを実践したい。」という意欲の湧くような話し合いにしていきたい。

（パネラーの紹介、自己紹介の後）

…それでは主題について少し説明したい。昨日の授業公開にもあった通り、この大会は「子供を主役とした造形活動」ということを究極的には求めている。子供一人一人が自分に自信をもって自らの力で成長していくことを願って大会を開いている。このパネルディスカッションはその総括的な意味も持っている。このテーマは、21世紀のこれからが「心と命の世紀」という前提のもと、子供たちが五感を働かせて自分自身の造形活動にじっくりと取り組む、そして生きる喜びにひたる。そしてそこから自分の心と体を成長させていくという姿をイメージしている。「ひらく」と言う言葉の言葉自体にとらわれたくないが、いわゆる「感じて・つくって」という造形活動、或いは大きく言えば図画・美術教育の授業の中で、始めは自分としてのイメージはまだできていなかったが、最後には自分はこれだけよくできたんだというような自信が、或いは夢や願いが実現したという状況を願って、このテーマを作った。現代は、自分ということが意識されない、「どこにいるのか、今いつなのか」ということが不安定な時代と言われるが、私はいわゆる、自分が「いま、ここ、どこに」という存在を確認するという風に解釈して、そういうことがこのテーマの底流にあると思う。そして、こういう風な人間関係に裏付けられた美術教育でありたいと私たちは願っている。それでは、パネリストの先生方にお話をいただきたい。

## ◇水 島 （自己紹介の後）

…一昨日の大学部会でもあったが、今これはどの校種でも同じだと思うが、教員養成に関わって様々な問題点が提出されていて、それについて話し合われた。「全美教」といって全国の私立大学系の先生方の集まりがあるが、この中で教員養成から撤退する大学がかなりある。それから、美術の教員養成課程がありながら、美術教育専任の先生の退職を機会に、講座を廃止してしまうところも出てきている。大変厳しい状況が示されている。又、私が以前在籍していた教育学部（文学部というところの）も大変揺れ動いていた。幅広い人文学部ということで私どもの大学では使っていたが、

その中に教員養成課程もあるわけだが、その中でも「従来の教え方だけで先生を育てることは難しい」ということでここ数年来「人間学習領域」という新しい講座・領域を開設して世間にアピールしているところである。この「人間学習領域」というのは要するに社会学や教育学の先生も交えてやっているのであるが、従来の座学中心、知識伝達型ではなく、学生と一緒に「感じる」ところからはじめて、例えばある社会学の先生は、絵を描いて、それを学生とどう読みとるか社会的に考察してみるとか、ダンスの先生と音楽の先生と私が、宿泊研修の中で、学生達と一緒にマルチメディア作品を作るとか、そういった教師としての資質に関わる教育内容を設定して、今やっているところである。これも、今の大学が、今までの教育の形だけで教員養成並びに教育といったものを捉えきれなくなってきたということ、そのために様々なアプローチがされているということで、生き残りをかけて、大学も厳しい状況をむかえているということである。

札幌大会の印象については、私も全造の大会には参加させてもらっているが、北海道の熱心な取り組み、並びに子供たちの真摯な眼差しが見られ、素晴らしい大会であったと思う。で、テーマについては、「未来にむけて自分をひらく」という辺りでは、解釈学をしても仕方がないが、この「ひらく」ということをどう解釈するかというと、色々な受け止め方ができるが、今まで閉じられた状況があって、その状況をどうしても「ひらかななければならない」という必然性というか危機感から、これ（テーマ）が浮上してきたのではないかと思う。で、昨今の教育の流れというか改訂の方向性という、先ほど述べた「人間学習領域」と同様で、従前の注入主義的、内容中心の教育から、子供たちの持っているもの、資質能力、内的にもっているものを大事にしていこうと、子供たちに教育を返していこうという流れに大きく動いていると思う。ちょっと過去のことを考えると、戦後の美術教育というのがいわば「テーマ主義」というか、例えば「抑圧からの解放」だとか「創造性」という高邁な、けれども子供たちから少し離れたところで動いていたと思うのだけれども、そういった意味でも、今回のテーマ設定は非常に今の教育の流れを押さえていると思う。ただ、一つだけ苦言を呈するとすれば、“五つの扉”というものがあるが、これは子供から立ち上がってきた言葉だとは思いますが、このことで研究の理論構成とか分科会の振り分けとかが成されているのだが、私は古い人間なので「ヘルバルトの5段階」とかを思い出して、「教授法はかくあらねばならない」的なところを感じてしまう。折角いい全体テーマがあるのだから、子供全体をどう見取っていくかという進め方がいいのではと感じた。しかし、とにかく授業論、研究テーマ論ということでは、子供の姿にシフトしようという考え方が明確で、私自身も大変勉強になった。

#### ◇岩 崎 （自己紹介の後）

…私は今、主に夜間の大学というか、現職の先生方を対象として（講座をもって）いるのですが、私たちも夜間の大学を作るにあたっては、（大阪の現状もお分かりと思いますが、）現場で自信を無くしている先生方というか、ちょっと困っている先生方に、改めて学んでいただく場としてつくろうということで申請したら、当時の文部省は「非常にいいことだ」ということで、ところがふたを開けると、やっぱり勉強したい人しか来ない。ですから、教師を変えとか教師が変わらなければというのに、かえて教師に差がついてきているのではないかという気もする。ここに来る前に大阪の教育委員会の人と話をしたんですが、「先生、参ったな。教師を変えなければならない。教師は子供と共に〈今〉を学ぶ存在であるとか、色々なところに書いてある。だから、先生方も今を大事にしましょう。」って。子供よりも教師が現代的な課題にどう向き合うかということが一つの課題であると思う。そうすると、子供たちの造形的活動の何に着目するか。次に回って来たときに話そうと思うが、中教審にもわざわざ子供たちの前にわざわざ「目の前の」という言葉をつけてい

る。昨日も話していたのだが、教師は「ベテラン」と呼ばれたらもう時代遅れになってしまう。やっぱり子供たちは毎年新鮮な形で入ってくるのだから、それに対してどれだけ新鮮な目で見向き合えるかということ。そういう辺りで、ここで考えられている「いま、ここ、わたし」ということで、私は授業とか教師論を話したいと思うが、昨日三角山小でお世話になって高校の分科会に出たとき、高校の先生が「子供たちは輝きたい、認められたい、あっと言わせたいという欲求を持っている。」というのを聞いた。私が感動したのは、普通、高校の分科会に出るとすぐに「芸術性だ」とか（が多い）。ところが昨日は「子供たち、子供たち」だった。

その辺が（札幌で）一貫しているところで、非常にいい部分だなと感じた。中学校や高校になるとすぐ価値観を、いわゆるトップダウンの形で。やはりボトムアップしていこうとすると、いわゆる目の高さの指導、子供の目の高さで何ができるか、まると評価できるか、過程を大事にする指導観を重視するとどんな授業ができるかなどの問題がある。昨日たまたま「ウォータースタジオ」だったかの授業で雨がふったけれど、私たちはつい、「雨バージョン」なんていうのを考えるのだが、子供にとっての生活の連続と考えたら、雨の日も晴れの日も（同じで）、雨が降ったら「みんな、雨降ったけどどうしようか。」って相談するくらいの気持ちで授業してもいいのではないかな。先生は「アァ、困った」って雨のまま授業をやってしまうとか。（その点で）昨日は非常によかった。

雨が降ったら雨の水も使えるというような、環境を状況を取り込んでいけるという技量の、発想を転換していかないと。先生が「今日は雨が降ったから違うことやろうか？」と言うと、子供が「先生、雨でもできるよ。」というような、そういう子供を育てなければいけない。そして、うまくいかないときは、「先生、もう一回させて。」ということが言える状況を作っていかなければならない。

生活科という教科ができたとき、非常に失敗経験より成功経験を大切にということがアピールされた時期があった。けれど、さきほどおっしゃった自信みたいなものはうまくいくことの経験で育つ自信と、うまくいかないことの中で育つ自信もあると思う。昔はよく「教室は失敗するところだ。」なんて書いてあったが、最近では見かけなくなった。学校こそうまくいかない経験をしてもやり直しができたところだったのに、うまくいくことの方法論が非常に確立されすぎて、ちょっとうまくいかないことがあると「自信がない」とか「もう嫌だ」なんてなって、そういうことから「遊び」なんてものが持ち込まれてきた背景もあると思うが、最近は「遊び」も上手にやらなければならない時代になってしまった。造形遊びなんていうのも、もっと這い回ればいいと思う。先ほど水島先生もおっしゃっていたが、もっと「癒し」とか「ゆらぎ」とか、そういう部分のうまくいかない経験をしながらできたときの喜びは、仕組みまれてうまくいったときの喜びとは違うと思う。

で、北海道大会の印象とか総括的な話は大きすぎて最初から話すことは難しいが、去年、石狩に呼んでいただいたときもお話したのだが、やっぱり大事なことは、その授業をぱっと見たとき、何をねらっているんだろうとか、どんな力をつけたいんだということが見えること（が大事ではないか）。子供たちが事を振り返ったときに、特に問題解決型では、子供の問題解決なのだから。そして、自信ということでは成長の手応えというような部分が大事になってくる。そうするとどうしても「交流」とか「振り返り」がキーワードになってくる。子供同士に、どこで交流場面をつくるのか、そして子供たち自身が活動を振り返って、学習前に「こんなことできそうだな。」と思ったことが、学習後、「思っていたこと以上にこんなこともできた。」というようなことがあるのか。例えばアイディアスケッチがそうで、それを描いて、その通りにできたのがいいのか、描いてかつ、作っていきながらこんなこと変えたとか、その過程で工夫がある。そうすると、作品とスケッチを並べると、その子の変容が他の子に伝わる。そういう変容の見取りと言うか、教師が読みとる以上に子供が意識することが大事で、子供たちの自己評価、特に最近よく言われる「自己」という問題が確

立していくのに・・・（と思う）。

テーマにある「いま・ここ・わたし」で、まず「今を大事にしましょう。」とか「居場所をどうしましょう。」とか「子供はかけがえのない存在である。」ということ。今回の中教審にも「子供はかけがえのない存在である」と書いてある。そしたら授業の中で一つ考えていかなければならないのは、先生が子供を伸ばそうと思ったらだめで、子供はもともと伸びるという発想が大切だ。「まるとの子供観」と言われて、生まれたときに「無」から「有」を生むのではなく、もともと持っている力を開いていきましょうということである。そうすると教師の役目はというと、非常に消極的な教師論だが、いかに先生の一言で子供をつぶさないかである。子供はただ伸びるのに、教師の一言で図工・美術が嫌いになるということがあるから、そのあたりを慎重に対応していくということに「支援」の意味が出てくるのではないか。

昨日「ウォータースタジオ」の授業でも、子供がコップに水を入れてドレミファソラシドを作っているのだが、先生が「帰るぞ。」って言っているのになかなか帰らない。「集合！」と言っても粘って「もう少しでドができる。」って。そして次には持って帰れないからコップに印をつけていた。

子供たちがここにきてこだわりが出てきて、非常にいい授業だったなって（感じた）。

子供が伸びるという前提で、私たちはどうかかわればいいかなという辺りで、特にこれから大事になってくるのは、はじめの段階でどれだけ「ひらけるか」だと思う。そのひらいたものが出口までひらきっぱなしがいい。もっとひらいていくといい。

この話は、二巡目以降に話したいと思う。

#### ◇金 井 （自己紹介の後）

…北海道の造形連盟は幼稚園から大学の先生までで組織しているが、実際は幼稚園も少し入ってきているけれど、小・中・高校の先生が中心になって行っていると思う。で不思議なことに小学校の先生が代々委員長を務めてきている。（このところは）他の県と少し違うところではないか。

ここで1965年、「指導の構築」という考え方を立てた。これは今でも変わっていない。「自ら学ぶ」子供をつくるというものは、教師の側から言えば、「自ら学ぶ子供のためにどういう内容を構築したらいいのか。」ということを勉強しようということで、そこから美術教育の構築論というのが始まった。一人一人がその子にあった形で、これが基礎である。基礎のベースになるようなショートプログラムを作り上げながら、自分なりの大きな説を作り、造形活動を作り上げてみよう。それを互いに発表し合ってみよう。そうしながら自主的に本を作って7集くらい配布したことがある。

途中から（教育が）「子供」から「科学」の方へと移ってきて、そして今また「子供」の方へ揺り戻しが来たという風に思う。従って、今、造形のテーマは子供を中心にするという考え方が、その時代もそうだった。そして私たちが（当時）掲げたテーマはこういうことがあった。まず第一に「これでいいんだと言い切れる個性的な、ユニークな子供をつくってみよう」ということで、今の個性的な子供をつくろうと同じである。それから第二に「精一杯物事にぶつかり、わだかまりを持ちながら一つの物を作り上げる子供をつくっていこう」。そして第三に「自分の心を相手に伝え、人と心を交流し合いながら、美しさとは何かを感じ取れる子供をつくっていこう」というテーマだった。そしてそのテーマの上に立って、小学校の低学年ではどんな仕事があるか。高学年や中学校ではどうかということをおみんなで作って、その典型的なものを作ってまた実践で崩して行って、また作って。そうやって7か8集の「指導の構築」というものを出していった。そんな歴史があって今に至っている。

ですが、残念だが、どの県も同じと思うが、北海道も特に札幌は200校余りの小学校があるのだ



が、だんだん会員が老化してきた。(私もその内の一人だが。)若手をどんどん入れようとしたが余り上手くいっていないというのが現状である。私は26歳のときに事務局長をやっていたが、今この連盟で活動している人はそんなに若くはない。そういう人たちでやっているのだが、その一番いいところは「一人でやることには限界がある」ことに気付いているところだと思う。だからみんなで助け合ってやろうと、そういうサークルが出来上がっていることは北海道の誇りにできる場所だと思っている。研究というのは一人じゃできない。みんなの力を借りみんなで進むことだ。

私は美術教育というのは、学校教育の二つの目的というものをもっと取り入れるべきだと思っている。一人一人を大事にするというのは学校教育の一番大事な基本だ。しかし、学校というのは集団で行動するところでもある。もっと積極的に、共同で仕事ができるような素地を造形学習の中で取り入れていくべきだというのが私の考えである。

- 村 瀬 それぞれの先生方、自己紹介だけでなく既に本論に入って、中身の濃いお話しがいただけた。
- ・一つは、「今の教育の流れを押さえなければならない」ということ
  - ・二つ目は子供の姿で、「子供は有能な存在であり、自ら伸びていくんだ」ということ
  - ・三つ目は「新鮮な目を持ち続け、子供への自信の付け方、或いは子供が内的に持っている物を大切にす。そして子供の見方をもう一度考えよう」ということ
  - ・四つ目は「教師がどのような研修を続けていくか。教師の研修、そして子供を見る目、教師が変わらなければ子供も変わらない」ということ。

私も授業を見るとき絶えず思うのだが、子供は意識していなくてもいいが、その授業で何の力をつけさせたいのか、教師自身が何をねらって授業をやっているのかきちんと押さえていかないと、教科性とか教科の必然性は出てこないのではと思う。

「発達」ということでは、語源は「包みを開いて中身をさらけ出す」と言う意味で、個体内に潜在する可能性が発達過程において次々と顕現するというのが本来の意味である。岩崎先生のお話にもあったが、本来持っている物を次々と子供自身の力で出していくというのが、本来の姿ではないかと思う。これが原点を大事にしようということではないかと思う。

ここで一区切りとして、会場からもお話しをいただきたいと思うが。。。。。

#### ○高 橋 (札幌)

今回の研究大会に関して、研究の根幹にかかわる部分で高い評価をありがとうございます。

水島先生のお話の中に、扉を五つに区切ること、細分化するということはどうかというお話があったが、私は安易な分類はよくないという風に受け止めた。(しかし)今回の大会では幼・小・中・高で共同研究していく上では、この分類は大事だったと捉えている。今回もしこの扉がなかったら、それぞれの校種で抱えている問題を、お互いが同じテーマで交流し高めることは難しかったのではないかと考える。今回5人の基調提案も、幼・小・中・高の話し合いの中で生み出した提案であり、それぞれの子供の成長の段階があり、とらえている子供の姿が違う中で、どんな「ひらかせかた」がいいか、授業の仕組みがいいかと話し合ってきて、大変意義深かった。

で、質問なのだが、一番分からなかったのは「遊び」のことだった。「遊びと造形」だった。

私は中学の教師で「遊び」がどれだけの意味合いを持って、子供たちの教育活動の中で役立つのか、どういう風に子供が自分の姿をひらいていくのか分からなかった。それで、小学校の先生方と話しながら、それが単に「遊び心」だとか「ユーモア」だとかではなく、中学生にとっても高校生

でも、大人でもいかに大切かということ振り返り、「遊ぶ」ということが子供の人間としての幅を広げるといふことを感じ取ることができた。

今回「遊びと造形」という扉があったとき、普通は中学の先生はここで授業をしようとは思わないと思うが、共同研究の中の一つとして「遊びと造形」という扉は意味深いものがあったと感じている。

昨日の授業でも椿野先生が、クロッキーの授業に遊びの要素を取り入れ授業構成され、子供も見事に力を開花させていたと思い、今回は私自身が「遊ぶ」といふことの大切さを学んだ。

細分化する、分類するといふことが共同研究で共通の土台に立って進めていく上で大切ではないかといふ問いと、「遊ぶ」といふことを大まじめに考えることの重要性についてお聞きしたい。

○村 瀬 研究の実質的な担当者のお一人からの質問ですが・・・。

○水 島 高橋先生のおっしゃる通りだと思う。

五つで分けてしまうことの実利的なところで考えたときにどうなんだろうか？参加する先生方の意識の中で、五つになると分かりづらくなってしまふのではないかというレベルで申し上げた。

全体で見ていく目と分析的に捉えることがあって、岩崎先生もおっしゃっていたように生きた分析の視点といふものが研究の過程で必要だと思ふが、少し言葉足らずで、五つになってしまうと研究の持っていく方として、大会の開催の仕方としてどうなのかというレベルで申し上げたのだが、(言葉が足りなくて)申し訳ありません。

「遊ぶ」といふことについては、こちらの研究大会では幼・小・中・高と一貫して「遊び」といふ非常に現代的なテーマを取り上げていると思ふが、ややもすると幼稚園の〇〇遊び的な一つの型の中での遊びみたいなものや、非常に散文的な「遊びは人生の潤滑油」といふような捉えとか、色々なレベルがあって、それぞれの段階の先生方の関わり方が違うと思ふ。

ただここでは違ふなりにこの研究大会の意義、要するに縦の系列といふか、様々な発達の段階に関わる先生方が集まって、人間の大切な「遊び」について考える場が設定されている。このこと自体が大事だと思ふ。このような例は少ないのではないか。大変貴重な取り組みであり、今後も続けていただきたい。

○岩 崎 生活科が意識しているのは「体験で終わってはいけない」といふことだと思ふ。その背景には「体験を経験へ」といふことがあったのでは。体験したことが子供たちの意識に残って、必要なときにいつでも使えるようにしようといふのが、今の指導要領だと思ふ。そういう総合性といふのか・・・。

「遊び」の持つ総合性といふものがある。例えば「砂遊び」にも色々なことが入っている。ロバート・フルバムは「人生に必要な知恵は全て幼稚園の砂場で学んだ」といふ。

やっぱりやったことが子供たちの意識に残るには「ゆっくり、たっぷり、最後まで」が大事。今の子供にはこれが非常に少なくなっている。私は、このごろの子供に、大人の居酒屋のような、学校の行き帰りにちょっと遊びに寄れるようなところがあればと思っている。私が子供の頃は「時間を忘れて遊ぶ」といふことがあったが、今の子供には(日常の生活で)少ない。だからせめて学校で先生が関わらないで子供同士が何かできるといふのがもともとの発想ではないか。

ですから私は、何事にも関わられる子供より何かに関われる、こだわられるといふのが大事だと思ふ。「振り返り」といふが、私も学生に一番始めに聞くのが「小学校のときの図工の思い出」なのだが、ほとんどは風景の絵を描いたことしか覚えていない。結局風景を描いたことでどんな力がついてそ

れが何に役立ったのか、その辺りを教材を一つ一つ見直して整理して、教科の柱が出てくるように（しなければならぬのでは）。

何かを忘れるという部分が「遊び」の中であって、そういう経験を学校の中まで持ち込まなければならなくなった現代の事情もあると思う。これに関しては次に話したい。

○金 井 一番よくなかったことは「遊び」という言葉を教育に持ち込んだときに、確固たる現場からの意見がなかったということ。「遊び」という名前で定着させて、頭の上だけの「遊び」というものを、（これを持ち込んだ人たちは）現場に押しつけたのだと思う。現場はそれを正直に受けて、小・中の交流は、幼・小の交流はどうしたらよいか一生懸命考えた。が、結局「遊び」は分からない。父母は「造形遊び」の「遊び」だけを取り上げている。それを説得できる力は先生にはない。何の情報も開示していない。

高橋先生が言っていたように、何か枠を決めなければ一緒にできないのではなく、私は、話をするのに色々なセクションは必要だろうが、それに余りこだわらない方がいいと思う。

○村 瀬 今回の話の中に大事なことが含まれていたと思う。

言葉の吟味。そして対の言葉を考えていくということ。「森を見て木を見ず」とか「全体と部分」の見方、或いは「具象と抽象」というような対の見方を絶えずしていくことの必要性。そして「体験と経験」は違うということ。体験にももちろん色々あるが、とにかく変貌するということが経験と体験の違い。

私も学生に必ず聞くのだが、図工・美術が嫌い、苦手と答えた学生が約4割いる。その理由を調べると、先生の態度や言葉に原因があった。

「そんなことはないよ、美術って楽しいよ。」と常々言っているのだが。

余計な話をしたが、次に進んでよろしいでしょうか？

二番目は「全国各地の造形教育にかかわる実践上の課題」ということで、水島先生の撮られたビデオを見ながら話し合いを進めていきたい。

○水 島 **ビデオを見ながらの授業解説（省略）**

○村 瀬 今回のビデオで、初めて（目に）見える形でご指摘いただけたと思う。  
今のビデオについて何か・・・。

○岩 崎 私は幼稚園が面白いと思った。結局大事なことは小さいうちに繰り返しやること。繰り返しローラーで線を引きながら、だんだん線を決めていくとか、形を見付けていくとか、そういう遊びがあそこにはあった。敢えて（私が思ったことで）言うなら、あれだけの場所があるんなら、ダイナミックに、何かもっと総合的にやれたらよかったのでは。鏡があったが、鏡って大事だと思う。体に関わる活動は自分の変容が見えないから、鏡を置くことには意味があると思う。

○金 井 ※テープ交換のため未収録

○村 瀬 会場の先生方から、今のビデオや昨日の授業について何かあればどうぞ。

○堀 井（東京）

ここ10年間、「造形遊び」や「生活科」とか色々なことが出てきて、今回も授業を観て分科会へ出て思ったのだが、ずっと10年間同じようなことが続けられていて、それで何が変わったかというところ、図画工作科について言えば、例えば「造形遊び」についての考え方は本当に伝わったのだろうか？先ほどの大学生の図画工作についての苦手意識の話があったが、(現実)に苦手意識があると言う。今の学生だったら、そろそろ「造形遊び」や「生活科」を経験してきているはずである。そうしたら、「造形遊び」や「生活科」の成果が出てきてもいいのではないかと？逆に教育の現場で言われているのはその逆のこと(が多い)。都立大の先生が17歳が連続して引き起こした事件や問題が出てきたときに、「17歳だから」ではなく「現在の学習指導要領になったときの子供が17歳になった」と捉えることができると言っていた。図工で言えば「造形遊び」の責任といったものがそろそろきちんとされなければならないと思う。

昨日の遠藤先生の話ではないが、どのように子供を育てていくのか、こんな人間を育てていくために意味があるから、こういうことをやるんだということをきちんと説明できるようにしておかないと、仲間内だけで分かるというようなことはやめていかないと、図工美術は本当に無くなってしまわないかと思う。

○村 瀬 本当にその通りだと思う。人間形成としての図工美術教育として、外に向かって我々がこのような研修を続けて、そして声を大にして「本当に大事なんだ」ということを叫んでいく。教科としての説得力を持つこと。このパネルディスカッションにもそのための意義があるのではないかと。

その他に、(どなたか)よろしいですか？

○高 田 (東京)

子供たちを外に「ひらく」ということだが、ちょっとひっかかかっていて、お伺いしたいことがある。2年前に教員をやめているので一般という資格での参加である。気になるのは「開かれる動きはあるのか」ということである。

5,6年前、東京の杉並にある和泉中学で「和泉ワーク」というものが開かれた。現代アート、学校美術館構想ということで当時は相当話題になった。その後全国各地で随分やられたが現在はぼしょってしまっている。もう一つ、僕は日韓の作家達と一緒にワークショップをやりたいと計画しているが、行政や学校関係へのアプローチが非常に難しい。本当に(図工美術は)外へ、一般へ「開かれて」いるのか。また「開かれる」ということをどのように考えるのか？

それから大学の教員養成について、これも非常に目的がはっきりしているはずだが、実際は一般の大学を出たあとで専門学校に行くというのが普通になりつつある。学校はどういった立場でそれに対応していくのか？

それから校種間(の交流、連携)の問題。一番最初にも出ていた小・中・高の連携についても、図工美術はやりやすいと考えるが、そのことについても話題に出てくるとありがたい。

○村 瀬 「より広く開かれた図工美術教育をどう考えるか」ということが一点。もう一つは「小・中・高の連携をこの大会では密にしてやっているけれども、今後とも連携が大切ではないか」というお話だった。「開かれる」ということの全国的な状況をお話いただくということをお願いしたい。

○水 島 幼稚園から高校までの連携について言えば、学習指導要領の協力者会議においても、例えば小学校の関係者にとっての幼稚園とのつながりの会議とか中学とのつながりの会議というのは、実際のところは全くない。行政の縦割思考があって、やっぱり現場とか実践とかのレベルでつなげていく。

そこが一番論理の上でも実践のパワーの点からも獲得していかなければならないところだと思う。

堀井先生のご意見はとっても大事だと自戒を込めて思う。

先生の話の中に村上氏の話が出てきた。彼自身も自己決定の場が学校教育には必要だという、ちょっと古い論理かもしれないが、そういうこと言っている。これは僕も大事だと思う。その自己決定の場、自分が自分であることを自分の頭においてしっかりきっちり実践する。その意味において（僕は）「造形遊び」という問題がすごく出てきていると思う。形や色の論理だとかそういう造形性の論理も強調していかなければならないが、やはり「自己決定の場」として色や形の実体験とか実世界とか物世界とか、いわゆる彼らの中でのリアルな物の世界で、それらが具体化できる要素が一杯あると思う（他教科と比べて）。逆に言ってしまうと、色や形がどんなに豊かであっても自己決定の場で子供たちが動けないようなものは「造形遊び」ではないと思う。

○岩 崎 私は二つあると思う。一つは、ここのテーマである「自分をひらく」ということ。もう一つは「教科をひらく」ということ。例えば総合的な学習のように、外へ外へと開いていくというところが今はある。本当に図工・美術でしかできないことは何なのか、それが学校で一斉にやることの意味はどんなことだろうか。そこで札幌にお願いしたいことは、（せっかく大会でやったのだから）幼稚園から高校までの一貫したカリキュラムを作るべきではないか。「札幌では17か18才まででこんな力をつけたいんだ。」ということが分かるような。ここの教科の弱いところはその辺が非常に曖昧なところだ。極端な話、教科書があっても使わないとか、そういうことが教科としていいのかという議論がある。私の考えとしては「全国共通教材」とか「地域教材」とかをつくるべきだと思う。そして全国にアピールしていかないと。

合科的な扱いにしても、指導要領においては「それぞれの教科の効果が高まる場合に行う」と書いてある。（図工・美術は）合科とか総合の中に取り込まれてしまうと一番方法論に陥ってしまいがちな教科なので、その辺りもかなり意識しておかないと。

小学校と中学校等の連携に関しては、義務教育としてこんな力というのが何かはっきりしているのは「鑑賞」だけではないか。

この間も聞かれたのだが、「小学校では造形遊びをしたら、中学校でスケッチできる力がつくのか？」って。「やりようですみますよ。」って答えたのだが、実際、力がつくようにしていかなければならない。例えば造形遊びのアイディアスケッチでも、適当ではなく、（わざわざ別に時間をとるのではなく）そこで描く力をつけていかなければならない。そうしてそうすることで国語や算数の学習でも絵がきちんとしてきたと言えるようにしなければならないのではないかな。

もう一つ、今までは作品を作ったら「自分が見る」とか「誰に見られる」という関係でやってきたが、これからはもう一つ「見せる」ということを意識していくことが必要。「見る」「見られる」「見せる」という。例えば「どこに置いたら似合うかな。」とか「どこに置いたら効果があるかな。」みたいな。教室の後ろに「ゴミを捨てるな！」ってポスターが40枚貼ってあって、教室がごみだらけじゃ何にもならない。そのような生活に働きかけるということも、図工・美術の時間でやるかかどうかは別として考えていかなければならないと思う。

○金 井 （みんなは）レッテルを張りかえると新しくなったという錯覚を持っている。文部（科学）省は今「生きる力」を「子供たちが自分で課題を見つけ自分で解決する生きる力」と言っている。その前には「自ら学ぶ力」と言っていた。私にはレッテルを張り替えただけのように思えるのだが。

私は岩崎先生とは意見が違うところが一杯ある。そんなに創造性だとか個性だとかいうことを義

務教育に持ち込まず、もっと基本的に自分たちが子供たちにやれることは何か、(内容を)少なくしてゆとりのある中でやればいい。子供がものを描けるようになるような力、写実的な力なんていうものはいくらでもつけられる。けれど僕らがこれまで言っている写実的な力だとかそういうものをまず否定しなければ。そして、本当は今の「造形遊び」のねらいは何かということ、子供の中に生まれてくる造形に関する内発的な行動をどう掴むかということなんだろうと思う。

北海道の連盟で小学校の先生方はみんな学級の担任で、東京の専科の先生方とは考え方が少し違うかもしれない。各教科とのつながりや学校全体の動き方、学校全体が見えるとよく分かってくると思う。その点は利点であると思う。子供がよく見える、次に自分たちの仕事がよく見える、そして学校がよく見える。そうしないと(図工・美術科も)前に「ひらかれて」いけないと思う。

「ひらく」という言葉は何かインターネットの機器の操作のようで私は余り好きではない。子供たちが、この(図工・美術という)教科では、互いの意見がたくさんあるということが言え、互いの表現がたくさんあるということが言える。そして互いに認め合える。その中から、僕はできることなら、こういう考え方で、こういう表現をみんなで学んでつくっていきこうという、そういう造形活動ができないかと考えている。みんなで、ものをつくっていく喜びや楽しみを味わって、世の中というものが見えてくるような子供たちを育てていきたいと思う。余りにも自己中心的な教科で、それがため各教科との深い連携がとれないところがある。

過ぎ去った自分の昔も振り返って、そここのところをつくづく思う。

○岩 崎 これは難しい問題だ。今は子供の論理である。子供の側から教科を見ていったとき、教科性は確立できるのか。片方で我々は自分たち(教師)の立場というのもあるから、教科は残るという前提で話しているが、子供の学びで言ったら「教科という枠」でやらなくてはいけないのかという問題も出てくる。もう一つ、金井先生もおっしゃった「造形性」とか「心」とかそういう抽象的な部分で「美術教育は心の教育だ」なんて言ったら教科としての美術は消えてしまう。

私はよく言うのだが「美術」を「美」と「術」に分けたとき、「術」の部分はやってきた。だけど「美」の部分が遅れている。学校の先生は「できたか?」「わかったか?」ばかり言って、美術の先生まで「きれい」とか「似合う」とは言わない。そういう感覚や感性に関わる働きかけが、我々余りにも寂しい指導をしているんじゃないか。

○村 瀬 何か教師自身の在り方とか生き方という部分に入ってきたが……。

○矢 木(東京)

委員長なんて紹介されたが、東京で図工を教えているごく普通の教員です。

自分のやっていることで今の話にすごく関係しているかなということをお話したい。それとみなさんにどうお答えいただけるかをお聞きしたい。

「ひらく」という言葉があって、「社会的にひらく」と「子供をひらく」ということの違いを(司会も)話されていたが、考えていくと同じ部分に行き着くと僕自身は考えている。

例えば「造形遊び」。未だ理解が不十分という話があったし、批判もものすごくある。では、その批判に我々、現場がどうやってきたかはやはり考えなければならないと思う。

僕は東京で図工の教師で専科をやっているわけだから、図工・美術教育の一つのアドマン、広告マンだと思っている。それで、校内展というもので、どうやったら近隣やPTAの方が見て喜んでくれるか、今図工をやっていることがどれだけ子供たちにとって必要か、そしてどれだけ楽しいの

か。現実には自分の子供の作品だけ見て帰っていく親が圧倒的に多いが、そうじゃなく1時間でも2時間でもそこで見て、楽しめる。そうすればやっている図工の中の色々なことがやはり人生を豊かにしていくということを、親や地域や、教育委員会も感じます。そういう努力を我々がしないでいることを私はいつも不満に思っている。

我々の学校の校内展覧会は夜の9時までやっている。先生方の勤務時間は終わっているのでPTAの方が協力してくれている。夕方、夕飯が済んでから子供たちが親を連れてきたり、自分の作品のことを話したり、学年でこんなことやっているということなんかを話して、すごくよい雰囲気でお話しながら帰っていく。

それから地域への開放という話では、「図工室の開放をやってくれ。」と区から話があって、「カルチャーセンターみたいなことは一切やりませんが、それでいいなら・・・」と引き受けたらOKが出た。それで僕は年間10日間くらい、それを二期か三期に分けて、子供とやっている図工の授業をほとんどそのまま地域の人に夜やっている。ですから、「造形遊び」みたいなこともやっている。そのことで今、子供たちがやっている図工の授業の内容が人生にとってどれだけ大事か分かってもらえる人を一人でも作る。サポートを作るということが大事だと思う。

理論だけで迫ると失敗するといった例はこれまでにたくさんある。理論ではなく違ったものを与えるということで、わずかですが自分のやってきたことはその一つの例かなとお話した。

もう一つ、これは質問だが、昨日たまたま観たテレビの中で、「戦後50数年の間に、世界的に物事を決めることはすごく行われてきたが、決めたことを実行することは100パーセントだめだった。これからは〈決定する〉ことではなく〈実行する〉ことが必要だ。」という話題が出てきた。例えば「京都議定書」何かがそうだが。そこで、今、教育の内容については決定されているし文言上のことの意義については、大勢として子供中心であるという部分、その他創造性などに関しても非常にいいのだが、じゃあ、行政も含めて、その決定したことを実行する形になっているかをいうと、指定する形にはなっているが、その辺の矛盾したものを我々が現場で、或いは大学の先生方が色々と考え、どのように対応していったらいいのか、お伺いしたい。

○水 島 今までの先生方のお話の中に、岩崎先生の中に「交流・振り返り」とか、金井先生の「アセスメントが大事」とか、いいテーマというのはみんな出ていると。では、それをどう実行するか、どう方法論化するか、どう目に見える形にするか。これからはそういう時代になっていくんだろうと思っている。

昨日の遠藤先生の話の中にも「教科性が大事だ。」という話があった。「子供が好きだ。」だけではもう太刀打ちできないんだというお話があった。確かにそうかもしれないが、見方を変えると全然違うんじゃないかと。

大学部会の中でも話があったが、教員養成の中の美術を教える学生の中にも、「美術が嫌い」という学生はかなり多い。お先真っ暗な状態で思い切った手を打つ必要がある。それは、先ほどの高田先生の話にもあった、色々な外的な動きと同時に、この大会のテーマにあった「自分をひらく」という、子供自身の力、潜在能力のあたりに我々は賭していくしかないんじゃないか（と思う）。

最後に、この夏、宮崎駿の『千と千尋の神隠し』が公開されたが、前作の『もののけ姫』から比べると、（私の家族もそうだが）今回の映画の方が全然面白いって言っている。それは子供たちにとって、『千と千尋』の「自分って何なの」という、一人のちっぽけな女の子が本当に自分で目覚めていく姿、それを本当に子供たちは分かっているんだろうと思う。そういう力があるんだろうと思う。まとまった話にならないが・・・。

○岩 崎 矢木先生のおっしゃる通りで、我々は社会にどう発信していくんだというのがまず（大事）。

先ほど、自己決定とか、もう一つ裏に出てくる価値判断だとか、実行という問題が出てきたときに、子供たちが進んで取り組む造形活動というを考えたとき、そこに取り込まれている要素なんかをもうちょっと徹底的に研究していくことで、それぞれの発達も見てくるだろう。抽象的に（研究の）柱が三つ四つあってではなく、だからどうするんだというところを出していかなければならない。「子供と教科」とか「子供と造形」とかについてももう一度考え直す機会をいただいたという事で（話はこの辺りで終わりたい）。

最後に「子供が自分を忘れるような授業をやりましょう。」ということで、ありがとうございました。

○金 井 私は昭和26年に教員になった。そのときに出た指導要領の総則の7ページが私を作ったんだ。

そこにはまず、「目標を持って子供を育てなければならない。」と書いてあって、その出発点は「児童の現実の世界」であり、伸びていくのは「子供自ら」と言っている。50年前から何も変わっていない。

私はフランスの子供に出会うことがたくさんあって、色々教えられる。その子供たちが言うには、「私の国では、日本のように人間をつくることは余り一生懸命しない。それよりも子供の自由をもっと大事にしている。フランスの教師は今の日本の教師よりもっと優しく愛情に満ちている。また、そのように努力している。」と言っている。

私達に愛情がないというのではない。日本の教師は愛情がたくさんあるのに、その出し方が下手なのだと思う。

「造形遊び」が出てきたのは、新制大学の卒業生が地位が上がって行政の中心になったくらいからだ。一番恐ろしいのは、今の教育界の指導者たちは本当の意味での自由を味わっていないことだと思う。構造改革は教育の中にもいっぱい必要なんだ。

○村 瀬 とにかく「実行の段階」ということは間違いない。

「感動する心というのは養い育てていかなければやがて衰弱してしまう。」というのは小林秀雄の言葉だが、やっぱり感動する授業、感動する生き方というものを、我々自身もそういう生き方をしていきたいものだ。

長時間に渡って本当にありがとうございました。

【お断り】 頁数の都合上、本文は各先生方のお話の要約を掲載する形となりました。ご了承下さい。





# 遊びと造形、もの・材料（環境）と造形

## 【幼稚園分科会】

運営委員……森 美由紀（札幌市立いなづみ幼稚園）  
記録者……斎藤 三佳（札幌市立白楊幼稚園）  
アドバイザー……伊藤 善彬（札幌顧問）

### 話し合いの柱

- 幼児がそれまでの経験を生かし、又は、その経験を引き出し、個々の描いているイメージにより近いものを描いたり、製作したりできるような環境の在り方とは。
- 集団の中で、幼児が自分で活動を選択し、自分なりの試みをしながら、十分遊びにひたって遊ぶことをどうやって保証するか。

## 保育について

- 指導者 なかのしま幼稚園 （年少）横山 美恵 鳥羽 和美  
（年中）関口 真美 小野 旬子  
（年長）藤原 朋美

### ○題材名

- 「へ～んしん!!」（年少）  
「探検に出発だ!!」（年中）  
「ながい、なが～い」（年長）

### ○討議の内容

#### 指導者の主張

〈年少〉

天候が悪く、スモックを着ての活動になったことが残念だったが、幼児は絵の具の感触を全身で楽しむとともに解放感を味わうことができた。また、途中から別の色を出したことで色の変化に気付き、さらに遊びを楽しむことができた。



〈年中〉

恐竜作りを通して、一人一人がイメージしたものを工夫しながら作る姿が見られた。中にはイメージしたものを表現できなかつたり、失敗を恐れてなかなか取り組めない幼児もいたが、教師の援助で取り組むことができた。今後は自分達で作ったものを活用し、ごっこ遊びに広げたい。

## 〈年長〉

豊平川に興味をもったことから、今回の川作りにつながっていった。初めて長い絵筆を提示したが、友達同士で互いに刺激を受け合いながら、長い紙に急な流れや穏やかな流れ等、さまざまな線を工夫して描いていた。又、友達と語り合い楽しさを共有しながら飾り付けをすることができた。

### 参会者からの意見

- ・ 年長の川作りでは広い廊下を使い、幼児がのびのびと楽しんで活動している姿を見ることができた。
- ・ 幼児の生活は、遊びから始まり遊びに終わる。したがって、いかに遊ばせるかが大切だと考える。今回の活動では、導入がよかった。
- ・ 幼児1名を抽出して活動の様子を追ってみたが、幼児の心がうまく教師とつながっていると感じた。また、活動に対して園側の思いが行き届いていた。



### ○討議の概要

- ・ 今回の公開保育では 幼稚園全体をキャンパスにしていた。幼児の発想をいかに高め広げるかを考え、題材をつなげていたのがよかった。ともすれば、単発の活動が多くなりがちだが、幼児に力を付けるためには、つみあげが大切であることが確認された。
- ・ 年長の川作りは、地域に目を向けることから発しており、小学校では生活科につながる内容であった。

幼稚園・小学校・中学校の連携の重要性が、話し合われた。



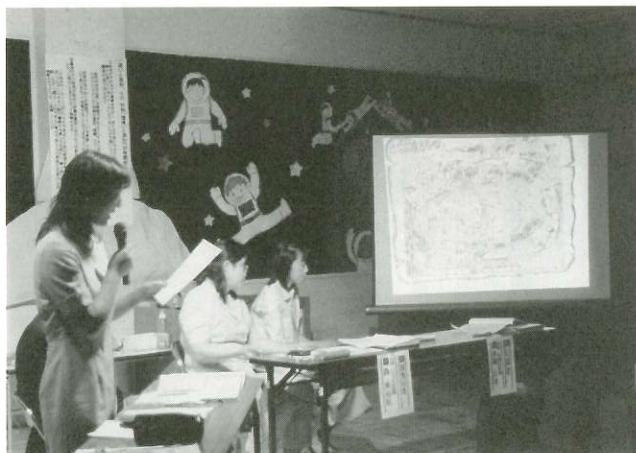
## 提言について

○提言者 大地太陽幼稚園 中本 真美子 平間 直樹  
テーマ 「感性をはぐくむ心をゆさぶる自然環境。そこから始まるドラマ」

### ○討議の内容

#### 提言者の主張

自然は幼児に様々な驚きや感動を与える。幼児期において自然と関わり、その世界にひたる体験が、きれいなものを見てきれいと感じる気持ち、美しいもの・未知なもの・神秘的なものに目を見はる感性を育むと考える。今回は、金槌と釘を使用した森での基地作りと身近な水と土をふんだんに使用したどろんこ遊びの2つの実践を通して、自然という環境を生かした保育の大切さを伝えていきたい。



#### 参会者からの意見

- ・ 園の敷地内で、大量の土粘土がとれるという恵まれた環境を最大限に生かしている。粘土遊びのよさは、失敗してもやり直しがきき、納得できるまで変化させられることである。したがって、幼児の心が十分に育てられると考える。
- ・ 最近の母親は、汚れることを嫌がる傾向が強いが、今回のどろんこ遊びのように衣服が汚れたり体が汚くなるが、その遊びの中から多くのことを学ぶことをおさえ、幼児により遊びをどんどんさせることが大事だと感じた。

### ○討議の概要

- ・ 自然環境を大いに生かし、保育の中に取り入れていくことの大切さが再確認された。提言園のように恵まれた環境が身近にない幼稚園も多々あるので、幼児が興味・関心をもって自然素材に関わるような環境を工夫していく必要があるという意見が出された。
- ・ 造形に使われるものは、素材と言われるが、幼児期にさまざまな素材との出会いをたくさんできるようにし、直接関わっていけるようにしていくことの大切さが話し合われた。

## 話し合いのまとめ

- ◎ 幼児に素材を提示する時に、「ああしなさい。」「こうしなさい。」と指示するのではなく、素材をそれとなく置いておき、幼児が主体的に直接関わられるようにする。また、幼児の行為を認めると共に、気づきができるように、一人一人に寄り添った「指導」をしていく必要がある。
- ◎ 造形遊びは、ざじずぜぞで示される。

ざ…材料・素材（たくさんに）

じ…自主活動

ず…随時グループ

※ 教師がグループを決めるのではなく、同じ発想の幼児同士が自然とグループを作ること。

ぜ…全身活動（ダイナミックな活動）

ぞ…造形活動

- ◎ 好奇心をくすぐり、感性を揺り動かす環境には、かきくけこに心がけては。

か…感性を揺さぶり高めるもの

※ 幼児の感性はもともと鋭いが、ともすれば大人の関わりが幼児の感性を、しばませる。

き…興味を共有できるもの

く…工夫できるもの

け…経験したことが生かせるもの

こ…好奇心を刺激するもの



# 遊 び と 造 形

## 【小中合同分科会】

運 営 委 員……………水野 一英（北海道教育大学附属札幌中学校）

記 録 者……………菅原 良和（旭川市立豊岡小学校）

アドバイザー……………築山 尚明（旭川市立雨紛中学校）

### 話し合いの柱

#### 《教材化・題材構成について》

- 自由な発想を引き出す可能性、自由度のある題材や場所であったか。
- 子供の自由な選択・決定を保障することができていたか。

#### 《授業展開について》

- 試みが連続し、さまざまな表現の可能性が認められる学習展開であったか。
- 過程を重視し、結果ではなく表現することの喜びを広げるかかわりであったか。

## 授業について その1

- 授業者 札幌市立幌南小学校 沼田 玲子  
題材名 「この時、この場で…」

### ○討議の内容

#### 授業者の主張

- ・ 「遊び」は発見の繰り返しであり、新しい発見にともなう高揚感、適度な克服感をもった行為である。
- ・ 授業では自分たちの身の周りのものをとらえて活動のきっかけにしていき、天候のちょっとした変化と場所や時へのこだわりが美しさや面白さを発揮する作品を作っていくとよびかけた。
- ・ 子供たちは自分たちが作っている作品がどんな効果をねらっているかを最後まで秘密にし、完成した時にびっくりさせたいというスリルをもってやっていた。
- ・ 子供たちへは「光を当てた時に、変化が現れるような工夫があるといいね」などアドバイスしたがちょっと厳しいハードルだったかもしれない。



### 支援の在り方や子供の意欲の高め方にかかわって

- ・ 授業の展開の中ではどのような支援のポイントがあったか。
  - ・ 子供の発想の素晴らしさに感心した。どうやって最初に感じた気持ちを5時間も持続させたのか。
- A 子供たちが何をやりたいかという段階では学校の周りを子供と一緒に歩いて「こんなのもいいんじゃない」というように支援してやった
- A 一日いっぱい一緒にいる小学校の担任だからできることであり、子供のアイディアを会話でつないでいくこともできる。

## 授業について その2

○授業者 札幌市立新陵中学校 椿野 衣江  
題材名 「せんであそぶ」

### ○討議の内容

#### 授業者の主張

- ・ 今まで一定の力をつけるという目的でクロッキーを百枚以上経験してきた。
- ・ 遊びはひとつのきっかけで手段であるというおさえもっていて、その遊びを通してもっと違った表現はできないものか考えて授業をすすめていった。
- ・ 絵を描くことに抵抗のある生徒も、筆をつかうことによって「こんな表現もできるんだね。」と喜びや発見があった。
- ・ 授業者が遊び心をもつことによって、何か違った方法を試みさせ、子供たちの可能性の扉を開いてやりたい。
- ・ 今日の授業では子供たちの表情が生き生きとしていたのを感じた。



### 遊びを取り入れたクロッキーにかかわって

- ・ 3年間のクロッキーへの取り組みで道具などの違いは？
- A 水彩画の時は筆を使ったりしているが、4Bの鉛筆が一番のびのびと描けていた。
- ・ 小と中の両方の指導案の中に「かんじて」「ひらく」という言葉があるが「かんじて」が一番大切だと思う。その感じたことをどう表現するかが一番大切だと思う。その手段として「遊び」がある。
  - ・ 中学校になると感情表現が難しくなる。線質が変わることやデフォルメすることで内面から変わっていく。
  - ・ クロッキーで自由な発想が出てきたと思うが、それを小と中の9年間の流れで継続していかなければならないと思う。
- A 前学年の発想が次に継続するので、大切に育てていきたい。

### ○討議のまとめ

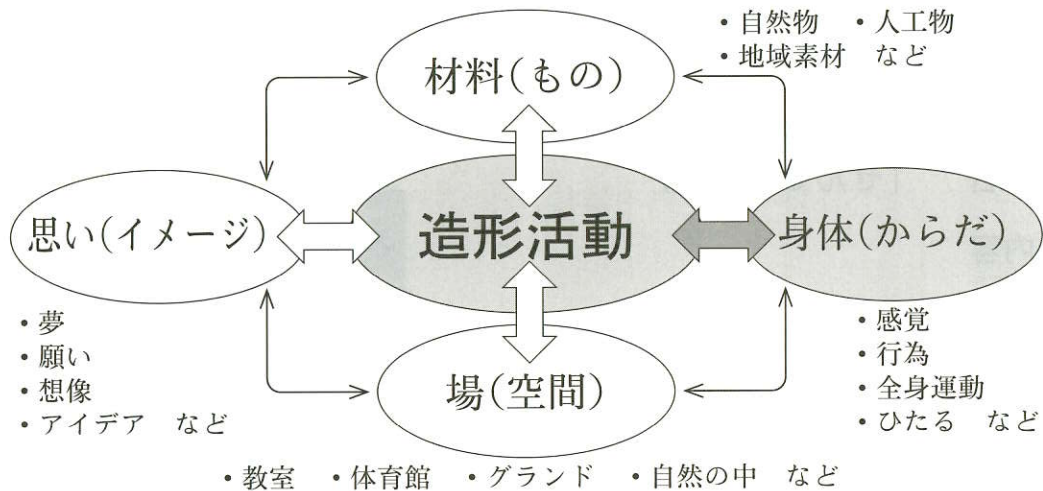
- ・ 遊びをとり入れたクロッキーを今回は行っていったが、アカデミックなものとは区別する必要があると思う。
- ・ 小学校も中学校も、「遊び」があるもののきっかけになり心の開放につながる活動であって欲しいし、それを目指していきたい。

# 提言について

○提言者 旭川市立光陽中学校 川原 潤  
テーマ 「身体を使った造形活動」

## ○討議の内容

### 提言者の主張



- ・ 図工、美術は子供に「生きる力」を育てる上で、ふさわしい教科であると考えている。来年度の学習指導要領の改訂の趣旨を十分理解し、生徒地域の実態に応じた図工、美術のカリキュラム編成を行わなければならない。そして、それに基づいた実践が確実に行われて初めて「生きる力」を育む教育が実現するのではないかと考える。
- ・ 小学校と中学校の「遊び」のおさえとしては小学校では「制約のない中で自由自在に表現することの喜びを味わう。」中学校では、「遊びが目的ではなく、手段、きっかけのある、意図的な遊び。しかし、その中にも心の開放があり、意図的ではあるが表現すること自体にも意義があること」ととらえる。
- ・ 身体を使って表現することの成果として、今までの枠にとらわれない個性的で自由な表現が多く見られたことと、身体を使うことによって、活動の場を「楽しい場」に変えることができ、夢中になる姿、ひたる姿が顕著であった
- ・ 課題としてはメディアの発達により身体を使わない造形活動が表れてきているが、教育現場にどのように生かしていけば良いか、今後の大きな課題である。
- ・ 身体を使った造形活動は感覚・行為・全身運動・ひたるの4つに分けられる。
- ・ 本校の美術科年間指導計画より「目をこらして」という単元での作品を持ってきた。この授業では子供たちがじっくり対象物を見たり触ったりして描く様子がみられた。
- ・ 「ゲルニカ」は美術部が共同製作した。全身をつかって製作する姿がみられたし、共同で製作することは、たくさんの人が同じ時間、同じ場所を共有することであり、一人で作るよりも大きな喜びが生まれることがわかった。美術部で取り組んだいきさつは、以前旭川で「彫刻の森大会」というのがあり、美術部で夏休み中に製作してきたが、今年はそれがなかった。それと、戦争の悲惨さを子供たちに知ってほしかったから。

## 話し合いのまとめ

### 授業・提言について

◇ 沼田先生の授業については・・・

- 色々な場所へ行ったり、多種多様な活動がいっぱいあって子供たちはとても生き生きとして、一人一人の可能性が認められる学習展開であった。
- 外での活動が多く冒険心旺盛なところはよいのだが、大阪の池田小の事件もあったのでT・T方式をとるなどして対応していく必要がある。

◇ 椿野先生の授業については・・・

- 子供たちの力は確実に育っているのを感じた。前半より後半の方が柔らかい線で形も整っていたのがわかったし生徒の表現の喜びも広がっていた。
- ◆ 小学校と中学校はいろいろな違いや、くい違いがあるが、根底にあるのは泥んこ遊びのように、そのものの行為を楽しみ、無邪気に遊んだ気持ちを大切にしていかなければならないのではないか。これを出発点として小と中の連携を深めて「造形遊び」を深めていきたい。



### 教育課程の改訂を前になすべきこと

- 来年の教育課程の改訂では小学校の5・6年生に「造形遊び」が入ったり、中学校では選択教科が増える等の現場の問題、さらに、世論として図工・美術不要論（学校教育として、すべての子供たちに学ばせる教科ではない）等がある。これらの問題に対処していくために私たちが今まで弱かったところ、まずかったところ、さらに勉強不足や連携不足だったところを、こういう大会などを通して結びつきや研究を深めていかなければならない時期である。
- 美術科・図工科の教師としてもっと教科性という立場を強調し指導していくことが、他の教科の先生方にも説得力を持つことができるのではないか。

### 造形遊びと感性について

- 造形遊びはみんなとやる、友だちとやるところが大切で、その行為が子供の内面に広がりや深まりもたせる。さらに、「感性」というのが叫ばれる時代になりこの感性がもっともっと造形遊びの中にも生かされるべきである。

### 小・中・高の一貫性について

- かつて、仙台の全国造形研究大会で幼稚園から小学校へ、小学校から中学校へ、更に高校まで連動した造形要素指導の一覧表が示されたことがあった。

こうした型を参考に「遊び」について考えるのも良いのではないか。





# もの・材料（環境）と造形

## 【小中合同分科会】

運営委員……安田 仁昭（札幌市立西岡北中学校）

記録者……横岸澤英二（函館市立港中学校）

アドバイザー……繪面 和子（函館市立大森小学校）

### 話し合いの柱

もの・材料（環境）と造形「かかわる」姿を生み出すために

#### 《教材化・題材構成について》

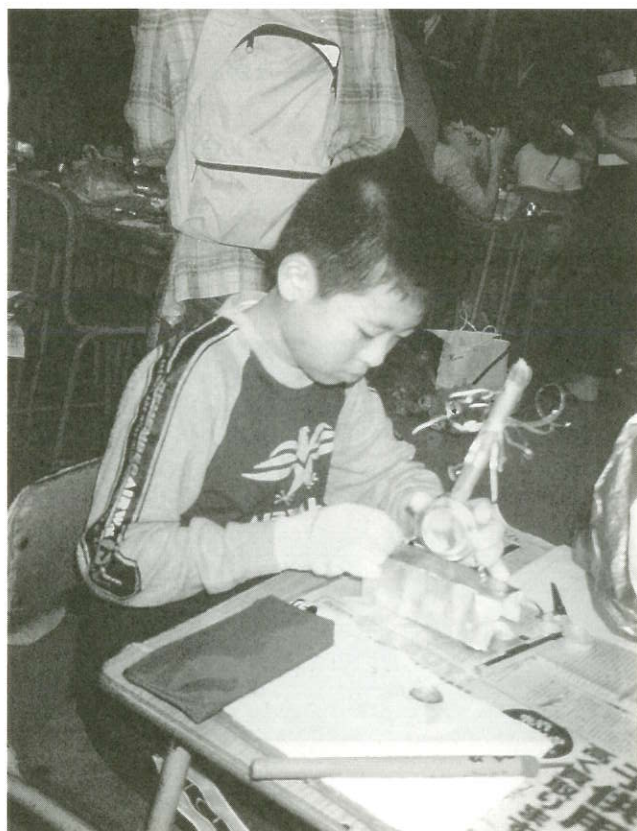
- イメージがふくらむ材料を用いた教材であったか
- 豊かな体験が広がる材料とのかかわりであったか

#### 《授業展開について》

- 生まれ変わった新しい形を発見することができたか
- 材料にかかわることで子供に満足感や自信がみられたか

## 授業について その1

- 授業者 札幌市立山鼻小学校 齋藤 志保
- 題材名 「アルミ星への旅」



### ○ 討議の内容

#### 授業者の主張

#### ① アルミにした理由

今年はじめにもった学年なのでこれまでの材料経験を調べてみた。紙や木の経験はあるがアルミの経験はなかったのでアルミにこだわり他のものとの組み合わせを考えさせながら挑戦させた。アルミと触れ合う時間をとったことでアルミに対して抵抗感がなくなり紙と同じ感覚で作業できるようになった。

#### ② アイディアボックスについて

共感と個の学びを取り入れた。子供たちが発見した“技”を共有し共感できる。お互いの作品を認め合う中で個の学びを高め合えるような授業づくりをめざした。

## ○討議の概要

### イメージがふくらむ材料とは

- ・ 特にラインはひいていない。形のおもしろさからの発想や素材のもつ性質から新たな発見や豊かなイメージの広がりをみることができると考える。
- ・ 授業の展開の中では、アルミ缶を切り開くことで、アルミの美しさにふれたり、遊びの段階で平面から立体へのイメージが広がり、技法の発見がみられた。



### 身近な素材が生まれ変わるためには

- ・ アルミという素材はある程度の抵抗感、加工しやすい面もっており体験を通しイメージをふくらませることができる素材である。
- ・ 接着についてはセロテープが使いやすいが、子供たちに発見させたり、学年の発達段階を考慮しながら、素材に適した接着の方法を教師側で準備しておくことが大切である。
- ・ 作品の大きさについては、作品をどこにどんなふうに飾りたいかテーマをもって取り組ませたので、各自飾る場所をイメージし大きさを工夫していた。
- ・ 子供の心を育てること…「○○を飾って……なごませたいな」をプロセスの中で大事にさせる。

## 授業について その2

○授業者 札幌市立あいの里東中学校 豊田 ゆき  
○題材名 「地域素材を生かす〈アイロンプレスで草花アレンジ〉」

### ○討議の内容

#### 授業者の主張

身近な素材（草花）への発見と素材のかかわりの中から、豊かな「発想」を引き出したと考えた。

地域に生えている草花を集めアイロンプレスで押し花にし、香りや素材の変化を楽しませた。素材にかかわる中でテーマを生かす草花の構成をさせ、和紙に貼らせた。光を通すことで、自然環境から室内環境にも気づかせ素材の新たな魅力を引き出したいと考えた。生徒たちは楽しみながら素材とかわった。さらに新たな発見をし、視野を広げていくことを期待したい。



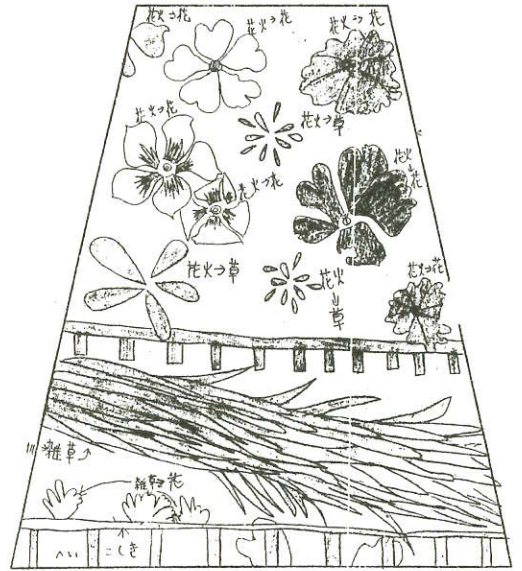
## ○討議の概要

### 素材（草花）について

- ・ 夏から秋の草花を集めての授業、日本的な美しさを発見する題材であったと思う。
- ・ 自然との一体感が感じられイメージがどんどん広がり楽しい授業であった。
- ・ 身近な植物、におい、北海道らしさを感じた。
- ・ 日本的な美（障子・光）の再発見をするような授業だった。
- ・ 光の工夫でさらに素材が生かされ表現の広がりがみられる題材であった。

### 生徒の活動

- ・ 共同制作ということで生徒は自分たちのテーマをどう表現するか、草花の特徴を生かし楽しく授業に取り組んでいた。



## 提言について

○提言者 函館市立旭岡小学校 瀧本 伸幸  
 テーマ 「光のファンタジア」

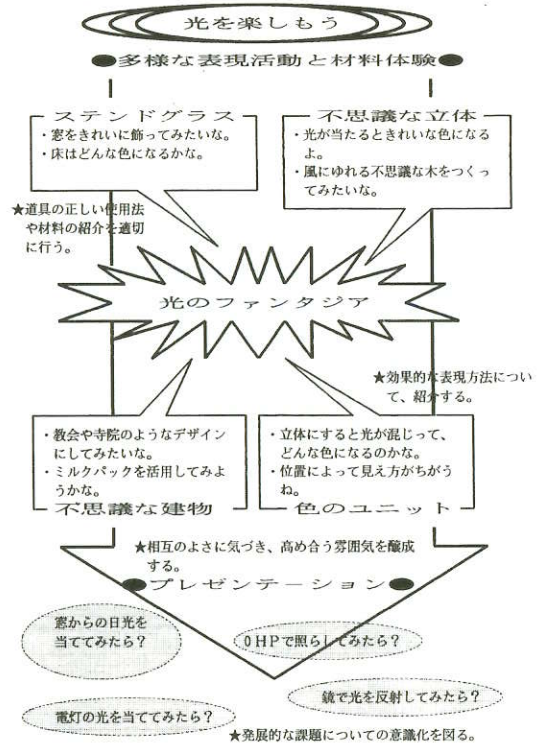
## ○討議の内容

### 提言者の主張

本校は、函館市の北東にある丘陵地帯に位置しトラピスチヌ修道院のスタンドグラスや夜景を日常的に目にする事ができる。

本題材では「光」を活用し、空間を装飾していくこととした。材料として、給食のミルクパックと地域素材としてイタドリ。(タデ科の多年草、高さ2m) イメージ作りの段階ではトラピスチヌ修道院のスタンドグラスなどを参考にさせた。できあがりの美しさより「光が当たったときの様子を大切にすること」と「映った光や影で楽しく遊べるように」と投げかけ支援を行った。「光」や「風」という題材は児童とのかかわりやなじみが薄く、見通しをもてない児童も多かったが、光を当てることで思いもよらぬ素晴らしい影ができ、どの子も成就感を味わうことができた。一つ一つの体験や材料とのかかわりを次の造形活動に結びつけていきたい。

5. 本時の展開



## ○討議の内容

### もの・材料について

- ・ ともすると反応の良い新素材やキット教材に目がいきがちだが、身近にあるもの・材料をもう一度見直し、新たな視点でとらえ直すことでよみがえるのではないだろうか。
- ・ ものは新しくなくても与え方によって子供の興味・関心は高められる。
- ・ 子供自ら工夫していけるようなもの・材料に目を向けるところから造形活動が始まる。



## 話し合いのまとめ

- アルミを素材とした題材はこれまでもあったが、今回の授業では、アルミ缶を壊す(開く)ところからはじめ、ダイナミックさときめ細かさから、子供の心を開放し、つくる喜びを感じさせる授業であった。また、提言にもあったように素材と出会う事で、子供自ら気づく、かかわるなど教師の素材へのこだわりが、豊かな発想や感性を培ったのではないだろうか。
- 身近な素材(草花)を使って、日本的な良さの発見や潤いのある空間を演出させるなど子供たちが活動する中で驚きと発見がある授業だった。身近な素材を通して安らぎを感じさせ生活に生かすことのできる題材であった。
- ものとどうにかかわるのか。かかわりながらどうイメージをふくらませるのか。もう一度、造形素材として見直すことが必要であり、教師の豊かなかかわりが大切となる。
- 5つの扉から、それぞれのステップ、論理性のある授業の構築は素晴らしかった。  
人間形成の礎である美術教育では、今の時代になくてはならない教科であることまた、職人的な教師、専門的な資質が問われていることを確認したい。

# 暮らしと造形

## 【小中合同分科会】

運営委員……大高 雅子（札幌市立平岡緑中学校）

記録者……中澤 孝仁（北海道教育大学大学院）

アドバイザー……内田 暢一（美唄市立中央小学校）

### 話し合いの柱

「うるおう」姿を生み出すために

- 小学生 ～ みんながうるおうことを考えよう（まずは自分から）
- 中学生 ～ 私もみんなもうるおうことを（他者を中心に）

## 授業について

○授業者 札幌市立新陽小学校 湯浅 大吾  
題材名 「くらしメイクアップ」

○授業者 札幌市立北都中学校 西川紫菜子  
題材名 「うるおう心 たのしい瞳」

### ○討議の内容

**授業者の主張** ～本時の授業から～

湯 浅

自分たちの暮らしが、題材の動機付けとなっている。子供たちそれぞれの「明かり」づくりを目指した。色と形のうち、前時では「形」にこだわり、本時では「色」にこだわるようになった。

みんなでお互いの作品を見合ったのははじめてで、感動があった！

西 川

きっかけは「学校が暗い」という子供たちからの意見からだった。

美術科としてどうにかならないか？と考え、装飾を考えてみようというこになった。

担任としては、グループの力が弱いので、その勉強もかねようと考えた。

授業の中では材料も含めて自由にした。子供たちは楽しそうだった。

本日の発表の中では、お互いの内容をすでに知っているため感動が弱く残念だった。材料の選択肢が少なかったためカタログなどで提示すると今度は担任が準備等に追いつかない。時間をかけて考える必要がある。



## 参加者からの意見

- ・ 動機付けが難しいので勉強したい。
- ・ 「暮らしの中に生かせる」造形を勉強したい。
- ・ 自分の暮らしの中へのフィードバックの仕方、授業の中でどのような方向付けを？
- ・ 家庭科と美術、「環境」に関する教材としてとしてタイアップできることは？
- ・ 導入が大変。「うるおう」という言葉の意味を子供にどう教えるか？
- ・ 安全性・耐久性を今後考えていかななくては・・・？
- ・ 養護学校において何が本当の「うるおい」「よい造形」か？
- ・ 総合や学校行事へのフィードバックも考えていきたい。
- ・ 子供たちの身近な生活から「うるおい」を見つける手段として考えたい。



## ○討議の概要

「うるおう」という言葉が難しい？→「美しい・飾ってみたい」という意見をもてることで「生活がうるおう」とした。

### 湯 浅

言葉だけではなく感じさせたい。「まず、材料を集めてみよう」から始めた。

男児のなかには、この題材に取り組んだことで、電気に興味を持つことにつながった子も見られた。

自分で作った明かりを家で使うという子供がいた。  
～暮らしに生かす～という実際の姿が見られたと思う。  
子供が実感できること、様々な材料経験をさせることを重視した。

作品台、和紙などを親子で作る。子供たちにとっては楽しい思い出となった。

### 西 川

入学当初「学校が暗い」という子供の意見から美術科として取り組んだ。

鑑賞会を開く。クラスの中で選ばれた作品を校舎（クラス）に展示する。

行事と行事の間は廊下などが殺風景で、その環境を飾るものを作る。

そこから今後の行事の体験に生かせるのでは？

クラスによって使う素材や雰囲気はなぜか全然違う  
→クラスの個性



## 提言について

○提言者 深川市アートホール館長 渡辺 貞之  
テーマ 「環境をつくる」

人形劇団の活動の中で、「父ちゃんに作ってもらおう。」という言葉がある。

今日では「父ちゃんに作ってもらおう。」になるのではないだろうか？

「物を作る」という価値が今日では無くなってきている。

学校の環境を見渡した時「これは子供が作った環境」ではなく「大人（教師）」が作った環境ではないのか？

子供の生活の大部分を占める「学校」が、このような環境でよいのか？

子供たちに住み良い環境のアンケートをとった。（資料P64記載）  
それをもとにできる限り学校で実践してみた。自分たちで作れる物はなにか？

→ 学校を飾ろう！ （深川小での実践発表）

日常に生かせるように、いつでも手に入る素材を生かして作る。日常の行事（七夕など）とのタイアップもしっかりと

→ 日常に生かす

〈失敗例〉

学級生け花大会 → 子どもの「作品」は、保護者にとっては「ゴミ」？

→ 家庭との連携不足？子どもと大人の違い？ ねらいとネックではないか

### 提言についての意見や質問

- ・ 子供が中心となり、教師、学校が取り組んでいける貴重な例を提言していただいた。
- ・ 一教師の個人プレーではできない。みんなで取り組んでいきたい。
- ・ 親の気持ちと子供の違いの現実を再確認。何とかしていきたい。
- ・ 各学校の美術教師・図工担当が美的環境のマネージメントをすると図工美術の重要性が校内で再確認されるのでは？

### 提言者から

- ・ このままあきらめると図工・美術はつぶれる。
- ・ 職場に仲間を3人作ること。
- ・ そこから広がっていく地味な工作が必要である。
- ・ 他の教室の作品を見に行くなども必要。



## 話し合いのまとめ

我々が教師集団の中で美術に関する興味を引き出していく必要がある。  
行事を通して、美術の必要性のアピールをしている。

### 今後の研究の方向性 ～アドバイザーから

新指導要領が来年から施行される。日本には様々な文化や習慣があるが、子供たちの意欲や葛藤が引きださせられるのは図工・美術では？

また、図工美術と狭くとらえるのではなく、「暮らしのなかの美」「生活と美」というように広くとらえる必要があるのではないか。北と南（来年は沖縄大会）とで美術教育を変えていきましょう。

### 未来を開く力

- 子供たちは日常の中でイメージ化させている。造形活動はそのイメージを具現化できるよい機会である。
- イメージの再構成化として図工美術は重要。
- 素材、教材としては子どもたちにベストマッチしていたのではないか。
- 自分の再考ができていたのか。
- 暮らしの中に大人の価値観が入ってくるとよくないのでは。子どもの生活感を決めつけるのはよくない。子どもが内発的に考えられる教材を考える必要がある。





# 個性と造形

## 【小中合同分科会】

運営委員………櫻田 悟（札幌市立幌西小学校）

記録者………豊田 治子（恵庭市立和光小学校）

アドバイザー………角力山 旭（札幌市立常盤小学校）

### 話し合いの柱

～「むきあう」姿を生み出すために～

#### 《教材化・題材構成について》

- 題材との出会いを通して、しっかりと自分なりの思いやこだわりを持つことができ、活動を通して、思いをふくらませていけるような題材であったか。
- 自分なりのこだわりや思いえがいた表現が保障され、何度も試みることができる教材であったか。

#### 《授業展開について》

- 教師のかかわりは、子供の変容に働きかけることに有効だったか。
- みんなに認められたり、自分でも振り返られるような「むきあう」場を設けていくことが、表現の高まりにつながっていたか。

## 授業について

- 授業者 札幌市立幌南小学校 能登谷治恵  
題材名 「のっけてっくっつけてってって」
- 授業者 札幌市立柏丘中学校 宮崎 亨  
題材名 「自分の知らない自分の発見」

### ○討議の内容

**授業者の主張** [能登谷先生]

#### 《作りたい思いをふくらませるために》

- ・ 使いたい紙を自分でもあらかじめ集めてもらっておく。教師側も多種の紙を用意。  
思い切り紙を使うこと→自分で選んだ方法で作ることができる。
- ・ 紙を触り楽しむ→「つくりたいものをつくる」へ  
その過程で、自分の個性・良さに気づき、自分の思いを広げる。

#### 《教師のかかわり》

- ・ 基礎基本とは、技能ばかりではなく「作りたい」という思いである。それを大切にして、個々の必要に応じて、できないことをできるようにするのが教師の役割。



## 授業者の主張 [宮崎先生]

### 《積み重ねによる成果》

- 物を見る目を引き出す、クロッキーの取り組み→描きたい思いにつながる自信をつける。  
～本来備わっている能力を基に育てる、意欲・自信
- 友達の作品に感想を書く→人の良さを見つけられるようになってきた。
- この授業も、今までの成果を生かし、さらに力を育てる一つの過程である。

### 《自分と「向き合う」》

- 友達からの感想 …………… それぞれがいろいろな思いをきちんと持っている。
- 画材の選択 …………… 今までの表現の成果を生かし、自分なりの表現法を選択できるように。

## 参会者の意見

- 中学生が、自分をみつめそれを人にも認めてもらうという実践はなかなかできるものではない。授業以外でもクラスを越えて学校単位で子供を見ていくことにより、お互いを認め合える人間関係がある集団によって初めて成立するという、生徒指導面のねらいも含んだ取り組みとして、授業者の思いを理解できる。
- 自己の内面をみつめて（内省することで）、個性を認める取り組みとして、とても価値のある授業である。
- 基礎基本の一つである子供の感性を引き出し、個性を育てる授業としてよかった。

## ○討議の内容

### 写実的表現・子供の思い

- 思春期の子供に、美術に関心を持たせるには？
- 今回の実践では、形の他に、色・内面など様々な方向に子供の興味が広がることが考えられたが、今回は形に絞って取り組んだ。写実的表現に自信を持たせる方法としてクロッキーの積み重ねに取り組んだのである。
- いろいろな表現がある中で、写実的描写に焦点を当てていたが、写実的表現に重きを置くことで、芸術家を育てるような授業になってはいないか。
- 子供の価値観の一つではないと思う。  
自分らしさの表現として性格などを結び付ける表現を求めることで、本当の自分の表現を出しているのだろうか。



# 提言について

○提言者 恵庭市立和光小学校 藁島 裕二  
テーマ 「顔のある造形活動」

## ○討議の内容

### 提言者の主張

「顔のある」題材の取り組み  
自分を見つめ、友達同士で向き合うことができるということ

### ・扉をひらく観点として

#### ① 題材の開発

図画工作科に限らず、生活科や学級活動等との関わりの中からも造形活動を結びつける。

#### ② 題材との出会い

より確かなものにするために必要なもののひとつ～教師の支援

#### ③ 基礎基本について

○表現技法の他に、「感じ方・考え方」の重視

～造形活動を通して培われていく心

自己理解し、他者を認め、互いの良さに気づく

⇒達成感

〈実践例〉自分のなりたいものに「変身」する  
作品で、参観日にファッションショー

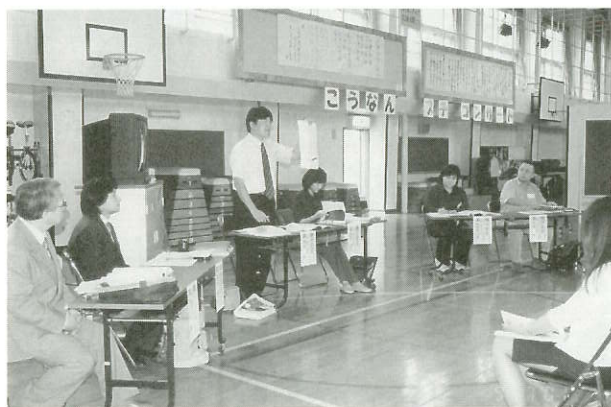
○材料を「選び・決める力」

いろいろな材料や技法経験を積み重ねる過程

では、個性をのぼすという側面に反する面もある

かも。しかし、まず達成感を得るために、1つの技法を教えその方法で表現させることもある。

経験の積み重ねの上に個性も育つと思われる。



### 参会者からの意見

- それぞれの実践のなかで、一人一人の良さを認める場をつくっていることが、すばらしい。まわりの子供たちがそれぞれの良さをみつけられるように育っている。

また、子供の作品を作り上げるにいたる思いを、教師が見つけ認めていくことが必要であると教えられた。

## ○討議の概要

### 「技法」をいかに教えるか？

- 技法指導は、個々の発想の広がるような題材の提示によって、必要となった技法の欲求に応じて指導すべき。
- 中学生では、知性と表現能力が一致したときに自分の作品に満足する。だから、小学校中学年位から技法を教える必要がある。能力が上がることにより、よい個性も発揮されると考える。
- 技法に力を入れすぎると子供が図工ぎらいになることがある。私は技術がないことで「失敗すること」はないと考えている。子供の思いが広がり、それが表れる題材をつくっていくことが大切である。



## 話し合いのまとめ

### • 授業について

#### ◇ 「個性」とは何か

～自己が自己にどのように働きかけているのかが、重要な要素となる。

小学——自分勝手な思いを認めると中学年以降でその扱いが難しくなるが、基本的なしつけがきちんとされていて、その上で個を認める温かみのある授業になっている。

中学——五感による感覚をみがくことにより、個性が生まれる。

この授業では、観察対象の設定が適切であったかが課題。造形的よさ・価値につなげられるかどうか。

#### ◇ 授業は楽しくあるべきといわれるが、大事なことは、何をどのように学んで楽しいといえるのか考えることである。

- 子供の感覚には生まれながらに備わっているものがある。図工美術科では、それをどう引き出し、どう価値づけられるかが重要である。教師が意図的に引き出すことも必要である。
- 図工美術科では、作品のうまいへたばかりではなく、子供に成就感をもたせることが重要である。

# 遊びと造形

## 【小学校分科会】

運営委員……堀口 基一（札幌市立三角山小学校）

記録者……宮武喜美子（網走市立中央小学校）

アドバイザー……石橋 一郎（網走市立東小学校）

### 話し合いの柱

○遊びと造形・・・「ひたる」姿を生み出すために

#### 《教材化・題材構成について》

- (1) その子らしい発想を引き出す、材料や場所であったか。
- (2) 子供の自由な選択・決定を保障することができたか。

#### 《授業展開について》

- (3) 試みが連続し、さまざまな表現の可能性が認められる授業展開であったか。
- (4) 過程を重視し表現することの喜びを広げるかかわりであったか。

## 授業について

○授業者 札幌市立円山小学校 小林 充裕  
題材名 「ウォータースタジオ三角山」

○授業者 札幌市立発寒小学校 八田 博之  
題材名 「ギャラクター」

### ○討議の内容

**授業者の主張**（札幌市立円山小学校 小林 充裕）

「全身を使って思い切りはしゃぐ」という経験が少ない子たちなので、「思い切り浸れる」という点で「水」を選んだ。「水」を生かすため色々な材料を用意したが、自分達で考えるということで6年生にまかせるところも多かった。本時までに3回思い切り遊ばせる機会を持った。1回目は水鉄砲を作ってかけあう姿が見られた。その中から「噴き出す」という発想が出てきた。2回目からは「色」、材料として「絵の具」、「食紅」というのが出てきた。「噴水の仕組み」も生まれた。3回目には本時に見られたものの基本が見られた。びっくりしたのが、透明ホースに食紅などで色をつけたものを入れると、中で色が混ざらないということの子供たちが発見し七色のホースを作り遊んでいたことである。透明シートをうんてい等にかけて、水を流して遊ぶ様子も見られた。太陽の光のもとで水を流し、それを内側から見るとすごくきれいだと言っていた。本時は初めての場所というのが一番の問題点だった。あらかじめビデオで様子は見せたのだが頭の中のイメージだけなので、どこまでできるのかというのが一番の不安であった。あいにくの天気ではあったが、子供たちは自分が濡れるのをおかまいなしで遊び、色々なことをやってくれた。新しい場所というのも刺激になったようである。教師側から「これを作ろう。」とは言わず子供たちにまかせたが、子供たちの中から色々なものが生まれてきた。今日初めて出てきたのが「音」である。あの子たちは2回目までは噴水の仕組みを作っていた。4回の授業の中でも様々な発展が見られ、分化していくのだなということを感じた。

## 授業者の主張 (札幌市立発寒小学校 八田 博之)

「楽しい活動を考える」というのが一番初めにあった。「楽しい活動」というのがどこから生まれるのかということにまず悩んだ。また「最後は楽しむだけではだめだろう。」ということも頭の中に置いて、結果的に「自分が作ったものに満足してみたり、美しいと感じるようなものは出来ないだろうか。」と考え行き着いたのが、今日使用した3つの素材であった。物の特質を使って遊ぶという考え方で、例えばヘリウム風船であれば、なんともいえないふわふわ感、絶妙なバランスをどのようにとって空中に浮かべるかということに、自分自身が真っ先にはまった。「これは楽しいに違いない」と思った。ヘリウム風船は浮力があまりないので、軽くて色のある素材を考え、棒のようなコーンと釣りに使う光をためるゴムを使い、バランスで楽しんで欲しいと思った。それぞれの素材を使い1時間ずつ授業を行ったが、ある程度ものの特質に触れさせると、今度は意図して形にしてしまう子や、最初に形を作ってから遊んでみたいという感じで、遊びの部分から離れてしまって活動していた子もいた。本時では、今までの授業の中では出てこなかった、自分なりの材料の使い方何かを作ろうとしたりと、驚くほどの発想の広がりを見せてくれた。最終的に部屋を暗くし、今まであった世界の中から、一瞬非現実的な世界に浸らせてあげることでより一層満足感を味わえるのではないかと考えている。暗闇でボーッと光るものは、人間の本能で、何でもなくても感動してしまうような気持ちを味わえると思う。本時も最後に暗くする時間を設定して子供たちは満足して帰ってくれたと思う。



## 提言について

### ○提言者 女満別町立大成小学校 里見 貴史

#### 提言者の主張

「遊びと造形」の授業は、授業を終えた後に反省点が多く、「遊びっぱなし・作りっぱなしだったのではないか？」と不完全燃焼に感じることが多い。今回は素材作り、材料作りにごっこ遊び的に取り組み、出来たものを使ってさらに授業が展開できないだろうか考えた。また、造形遊びの付加価値として時間をかけて抵抗感のあるものをと、材料作りとして「綿を作ろう」「色綿を作ろう」という実践をした。

自分自身で色々なものを染めてみた結果、一番面白かったのが綿、脱脂綿、ガーゼであった。自分の指先を色々な色に染めながらつまんだり紡いだり、集中しての作業がとても楽しかったので、そこから授業にしようと考えた。「色綿工場だ」と木造の体育館にブルーシートを敷いて、できあがったものを一掴み見せ、材料用具集めから始めさせた。3～6年の12名での取り組みの中で、子供たちから「高学年と中学



年がペアになってチームを作る。」という声もあがり、工場が設立された。始まると子供たちは嬉々として取り組んでいた。手をいろいろな色に染めながら絞ったり揉んだりしながら、染め上げ、それを体育館中に広げていく。そうやって、子たちと一緒に指先を使ってできた色をもとに「寒いなと思う色を手にしてごらん。」「あったかいと思う色を手にしてごらん。」と、色の学習をして色綿工場を終わらせた。こ

の材料を使い何ができると考えた際、3年間かけて身近な自然をスケッチにまとめたものがあったので、その中で出会った動物や植物を、ステージの飾りにしてみようということで取り組んだ。子供たちは「暖かい色のものと寒い色のものとに分けて作ろう。」というようにあれこれやりとりをしながら作っていた。

年度が変わり、卒業式の飾りを作った後、あまった色綿を使って、3、4年生はぬいぐるみを作った。(授業は3、4年生の担任が行った。)子供たちが授業終了後もぬいぐるみを使ってごっこ遊びをしていたのが大変印象的であった。自分が担任をしている5、6年生は、あと1年で閉校のため、この教室ともお別れなので少しでも思い出に残るものということで、今まで図工で学習してきたことを生かし地球儀作りをした。目先のところではなく、もっと大きくて広い世界に飛び立って欲しいという願いを込め、地球儀作りに取り組んだ。最終的な完成を参観日に合わせて点灯式を行った。子供たちは夢の発表を行い、色綿を使った一通りの授業を終わらせた。「身近な脱脂綿、アクリル絵の具を使った、手を使った造形遊び。」と、「出来上がった色で、色の学習や色の遊びが出来る。」ということで発表させていただき、大変嬉しく思う。

### 参加者からの意見

- ・ 「活動に取り組んでいく楽しさを大切にしているのかな。」と受けとめたが、最終的に授業の終わりにはその楽しさというのはどうなっていくのか。楽しい、浸ると言うこともいいが、最終的にはどのように活動を終えるのか。先生が体験させかけたことは何なのかというところが見えてこなかった。また、遊びということから考え、教師側がゴールを設定しないとするならば、活動の過程で教師はいかにあるべきかという点について伺いたい。
- ・ (授業者の八田先生から) …自分なりの気持ちを形や色にこめることができることでの楽しさ、喜びを感じさせてあげたいと考えている。遊んでその後に自分の作ったものが光ったり、色の取り合わせがきれいだなという思いが生まれてくれば、これから先、図工という教科に対して子供たち一人ひとりが意欲的に取り組んでくれるのではないかとこのところがねらいであった。1時間の中で「一人ひとりの力のこういうところを伸ばしてあげたい。」ということのを頭に置きながら授業をしているつもりである。
- ・ (授業者の小林先生から) …子供たちに「何に気をつけたらいいか。」と問いかけたところ、「物を作ること、きれい、楽しい、心地よいという部分に気をつけたらいいのではないか。」という意見が出された。そういうことを通して、もう一度水の美しさや特性に気付いてくれたらいいと思った。遊びという以上、ゴールは子供たちに任せてもある程度はいいのではないかと考えた(全て任せたわけではない)。子供の(ゴール)設定は、その子によって違いとても難しい。そうすると支援というものが大事だということを感じた。最後は、自分たちがやったことを低学年に披露させてコミュニケーションがとれればと考えている。今回噴水を作った子供たちは「不透明な絵の具だと最後まで色が残っている。」と本質を見抜いて使いこなしていた。その他にも様々な発見が見られた。自分の思ったことに対して向かえるという面でも、高学年ならではのだなあと感じた。
- ・ 発想から構想へ、そして表現への移り変わり、作りながら考え、考えながら作るという人間の営みのような動きがある。本時は、その流れが良く見えて良かった。
- ・ 美しさを味わう、形や色という造形的な中で、水は入れ物によって形が変わることや動きなどを味わうというねらいがあったからこの材料だったと思う。子供たちもそういう材料を味わっていたと思う。環境を上手く使っていて、高学年としても良かった。子供どうしの関わりという点でも、試しがあって、またその次があってとう点で広がりのある活動であった。
- ・ 俯瞰的に物を見ることができると子供たちの授業の様子を見ることができ勉強になった。高学年の遊びを見せていただき参考になった。



## ○討議の概要

- ・ 「何かのため」、「物に…」と解釈を求めると遊びが遊びでなくなってしまうのではないか。
- ・ もっと「遊び」というものをとことん突き詰めていかななくてはならない。
- ・ 14年度の指導要領では「楽しい造形活動（造形遊び）」となっている。遊びという言葉が持っている自由さと公教育との間との折り合いがうまくつかないからである。「楽しい」→「造形活動を達成した喜び」への高まり→「子供の中で連続発展的に自らそこへ向かっていく」というところに「遊び」という問題を取り上げていく価値がでてくる。遊びの本質ではなく、遊びの機能を造形活動の中にかに取り入れていくかということである。
- ・ 遊びの要素、遊び性、その行為にひたる、ものや場所に関わりながら表現・意図が生まれてくる、思考を繰り返す、作り、作り変えていくような連続していく表現活動というものが表現の喜びを味わうためには大切である。
- ・ 子供たちが安心して自由な発想で創造的にできる活動の場を提供すること、共感してあげることが大切。教師自身ももっと感性を磨いて勉強していかななくては。
- ・ 教師にとっての評価は目標に照らして自分の授業の成果を確認し、指導の改善を図り目標を実現することである。もう一つは子供が自らの学習の過程を振り返ることである。
- ・ 評価をしていく上で手がかりになってくるのは「4つの観点」である。
- ・ 一見遊んでいるだけのように見えても子供たちはその中で、子供なりの評価、自己形成的評価をしている。
- ・ 大事なのは「子供がどう変わったか」という部分。遊びは発想を豊かにする、土台を作るという意味では非常に大切だが、遊びだけで終わらず、どのように発展させていくかという理念、目的ははっきりしておくべき。基礎基本では、低学年のうちから、その時々で段階的に育てていく必要がある。

## 話し合いのまとめ

小林先生の授業では、遊びの中から出てくるあらゆる色・発想というのが見事に出てきていた。それを培い、どのように発展していくかということも、今後真剣に考えていかなければならない。子供の発想をどう高めていくか、授業の展開について今後議論していく必要がある。また、子供同士が心と心、言葉以外のことでコミュニケーションをかわしながら一体感を持って一つの遊びに浸っていく過程が多く見られた。このような場面を作ることが、受容的な雰囲気を作る、他人を理解する雰囲気を作っていく、創造的な空気を作っていくのだという流れを見ることができた。話し合いの中では、手先が不器用になったということや、想像力をつけなくてはならないということも出てきた。それらも大切なことではあるが、一つの授業を通す中のコミュニケーションの中で、人間と人間が一体感を保ち続ける訓練も重要であると考えられる。

八田先生のキャラクターでは、基礎的な体験を積み重ねることが大切だということを感じることができた。物と自分との間で、「考えながら作る。」、「作りながら考える。」、「試行錯誤を練り直す。」、「無言の対話を繰り返しながら一つの形を作っていく。」という物と物との関係、人と人との関係、そういう中で創造していくという過程が二つの授業の中から見えた。評価・支援・授業の発展性、また「遊び」の定義の部分については課題が残ったと思う。人間が一つの目的、コミュニケーションを交わしながら一つのものを楽しむという行為は絶対にあるべきものだと思うし、それが造形教育のコミュニケーションの原点になっているように思う。



# コミュニケーションと造形

## 【小学校分科会】

運営委員……毛利 聡（札幌市立藻岩南小学校）  
記録者……富樫 信博（札幌市立真駒内南小学校）  
アドバイザー……伊藤 武司（札幌市立屯田西小学校）

### 話し合いの柱

～「わかちあう姿を生み出すために」～

#### 《教材化・題材構成について》

- たくさんの情報を生かし、工夫することでより豊かな造形活動になっていたか。
- 総合的な学習との関連は、より意欲的な造形活動につながっていたか。

#### 《授業展開について》

- 児童同士の交流場面がその後の高まりへとつながっていたか。
- 自分の表現を振り返る自己評価が授業で生かされたか。

## 授業について

- 授業者 札幌市立三角山小学校  
藤森 久美
- 題材名 「ぼくのわたしの  
ウルトラか～かし」



### ○ 討議の内容

#### 授業者から

きっかけ → 学年園の稲を守ろう。実行委員（対策検討／かかし2号）

迫力に欠ける・1個では少ない・もっといやがる工夫

#### 《ウルトラか～かし》

～強く・長く・美しく～

ひとりひとりの願いを大切にしたい

授業づくりにいかす

ウルトラへの着目  
→ いろいろな形・材料がある

T. T.（かかしづくりのスペシャリスト）  
毛利先生／大先輩：もへじろう登場

《子供に考えさせたり、ヒントを与えたりしながら作業を進める。》

## 参会者からの意見

- ・カカシは徐々にできていくすがすがしさがあった。
- ・暗くしてみる～瞬間“一気にワクワク”する効果がある。
- ・子供と一緒にやってきた感動がみえてきた。
- ・共有する「場」「思い」「瞬間」で交流→違うところが個性  
(同じより違うが大切)
- ・わかちあい→ひとりひとりのちがう思い～違うときはどうするのか。  
→みんな同じ

## 自然な交流

- 刺激
- 模倣



- 手伝う
- アドバイス



## 話し合いのまとめ

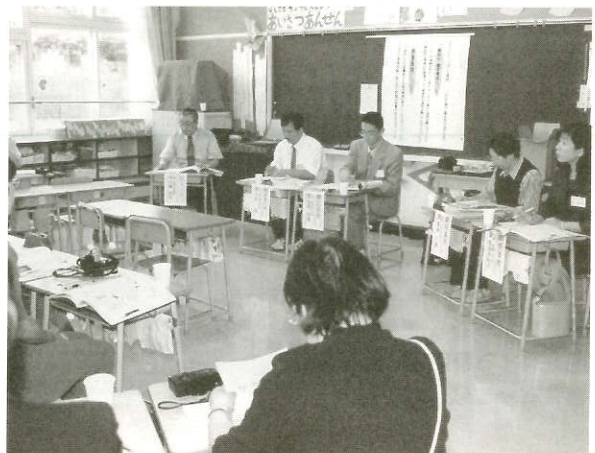
- ◎ 「みんなちがって、みんないい。」これを実践できるのか。(造形教育)
- ◎ 今いる子供をどう変えるか？  
生きていることが造形→創造性である。
- ◎ 「思い」とは、自分との対話、そしてどう相手に伝えるのかである。
- ◎ 造形のはじまり(一番大切なもの)は、感じ取り方である。
- ◎ これでいいというものはない。造形教育に終わりはない。

## わかちあい、 一体感ができる交流を!!

- 感動体験を  
一緒に



- 暗くなる
- 火がつく一瞬
- 作品に入り込む一瞬



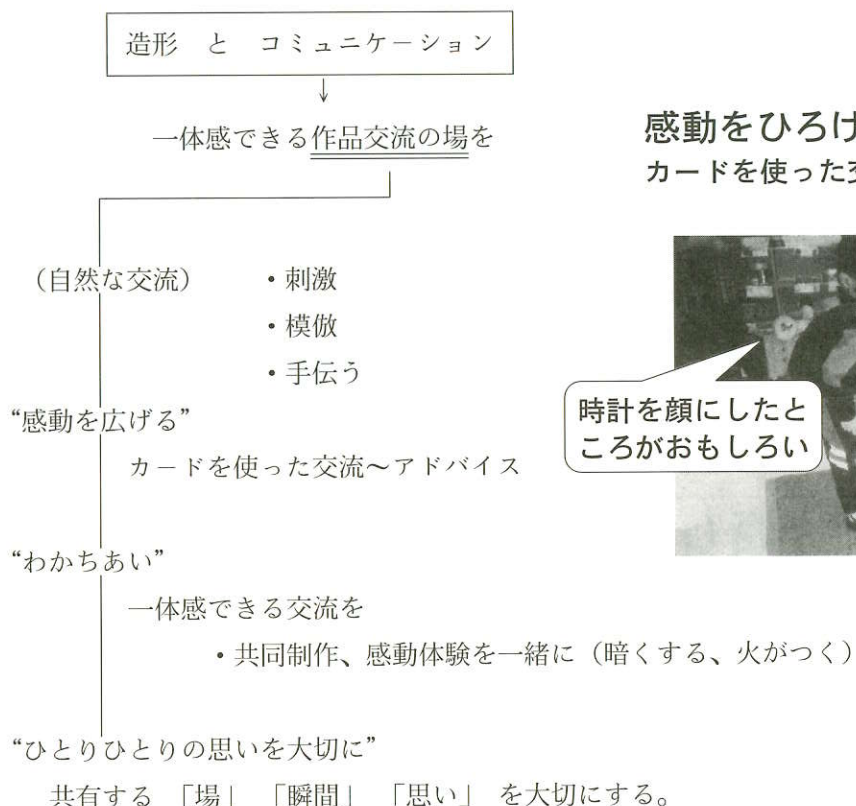
# 提言について

○提言者 札幌市立桑園小学校 福島 由紀子  
テーマ 「わかちあい、一体感ができる作品交流を」

## ○討議の内容

### 提言者の主張

自分の思いを表現する → 感動 → わかちあう  
《造形活動》 《コミュニケーション》



感動をひろげる  
カードを使った交流

めがねをかけて  
いるみたい  
なところが  
まなちゃんに  
似ているね。



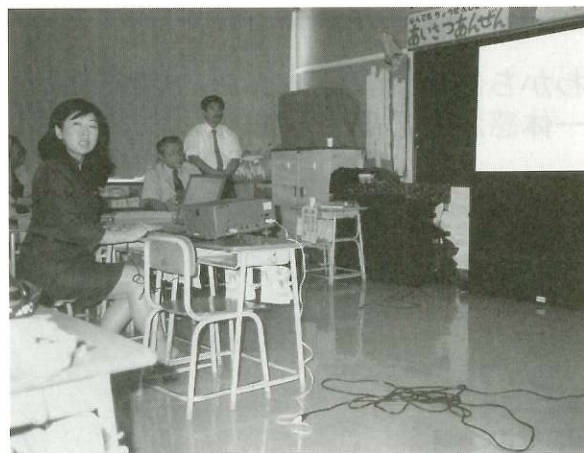
時計を顔にしたところが面白い

## コミュニケーションと造形

■一人ひとりの思いを大切に



■共有する場  
■共有する瞬間  
■共有する思い



## 参会者からの意見

- ・ コミュニケーションの中に鑑賞の能力が働いている。
- ・ 必要最低限で会話をして交流していた。
- ・ ウルトラ（強く、長く、美しく）を交流でクリアーしていた。

## ○討議の概要

- ・ 自己評価は？・・・途中の評価→まよい～コミュニケーションと自己評価  
最後の評価→カード／全体の間でも評価
- ・ 毎時間毎時間「できたか、できないか」の評価を
- ・ ひとりひとりが評価項目をもってやったのではないか。
- ・ 図工の評価・・・一瞬「あ～よかった。」「キレイ～」になる雰囲気
- ・ 評価をして、もっと図工が好きになるように
- ・ 図工の評価は、はっきりしたことが言えないのが弱さ  
～評価した以上は説明責任できねば（カードなどの証拠）
- ・ 好きになる評価～よりたしかなものを  
～発達段階の違いが目に見えないと納得しない
- ・ 大切にしていかないと・・・ここは、きちんと作ってほしいという願いをもってすすめる。  
子供も、このねらいを意識して作る。そして、子供の評価、先生の評価を。



# コミュニケーションと造形

## 【中学校分科会】

運営委員……石川 早苗（札幌市立手稲中学校）

記録者……小野 泰裕（札幌市立藻岩中学校）

アドバイザー……三輪 望（札幌市立新陵中学校）

### 話し合いの柱

#### ○ コミュニケーションの主体〈わたし〉

インターネットに代表されるように現代の科学技術の発達はめざましく、まさに「情報化社会」である。しかし、何かを伝えようとするなら、発信する側とそれを受けようとする側の心のつながりがある。あってこそ本当のコミュニケーションが成立するはず。あくまでも科学技術は手段であり、コミュニケーションの主体は伝える〈わたし〉の心と、受け取る側の〈わたし〉の心である。

#### ○ 造形表現は共通言語

国際的視野においても、造形表現を通して心を共有するオコミュニケーションには壁は感じられない。共通言語としての造形活動がある。

#### ○ 感動のキャッチボール

造形活動を通し、発信者の〈わたし〉と受信者の〈わたし〉による感動の分かち合いが行われ、それが互いの理解につながり認め合うことにもなるであろう。

感動する心、思いを受け取る心、その分かち合いこそがコミュニケーションの根本ではないだろうか。

## 授業について

○授業者 札幌市立大倉山小学校 佐藤 真史

札幌市立宮の森中学校 高橋久美子

題材名 『ようこそ先輩 ～アニメでコミュニケーション～』

### ○討議の内容

#### 授業者の主張

これからの表現の基礎・基本のひとつは、デジタル技術を活用した映像表現に代表される時間と空間の表現である。今回はエッセジャーという作家紹介のCMづくりを通じて、伝える喜びや共同でつくる喜びを分かち合うことをめざし、活動の展開を考えた。

#### 授業者の感想

- ・ 今回の題材では、ストーリー性を少し出そうとした。ムービーはとにかく面白い。自分（指導者）が心底



「面白い」と思った題材であれば、子供たちも楽しんで学習活動ができるのではないだろうか。その後からコミュニケーションはついてくるものだろうと思う。 —佐藤



・ 学習の基本姿勢がよく出来ている生徒たちである。能動的に学習に取り組む姿勢がある。若干の心配もあったが、互いの心を開いて佐藤先生の気持ちを理解し、協力し合っているものにしようという気持ちを感じられた。5時間程本校（宮の森中）にて授業を行った。エッセターの面白さ、変化する面白さに感動し、一人一人の意識をもち授業に参加したと思う。

班の中での役割を互いがもち、  
・エッセターの作品からのコミュニケーション  
・生徒同士のコミュニケーション  
・佐藤先生とのコミュニケーション  
がそれぞれ行われた。 —高橋

### 参加者からの意見、感想

「パソコンを活用した学習で、それぞれが頭を使い、みんなで話し合い（コミュニケーション）ながら進んでいた。一人の限界も他の人のよさを取り入れることで乗り越えられ、自分のアイディアをさらにいいものにしていくことができる。短いながらも質の高い授業を見せていただいた。」など、自己紹介の段階から多くの感想や意見が発表された。大きくまとめると、

#### ① 教材・題材について

粘土を中学生の生徒作品づくりに活用したのには感動した。／映像を扱ったのはすばらしいと思う。／生徒のパソコン慣れに感心した。手直しして次の構想に発展させるにも良い。／動画が面白い。／アニメを取り上げたことは子供に興味関心があり、楽しみの中から高めていくことができる。／佐藤先生の授業の工夫と教材への研究に感動した。 など

#### ② 学習形態について

班活動がよくなされていた。／グループ学習を通じて個人の力を高めていくことになると思うが、評価はどのように行うのか？／商業づくりを通し、班内での分担をもち協力して活動した学習が良かった。さらに、他に発信できるところが良い。／班活動を通じてのコミュニケーションで個々の力の高まりが期待できる。 など

#### ③ 生徒の意欲について

生徒たちの声が澄んでいてとてもきれいだった。／生徒の前向きな姿勢に感心させられた。／温かみを感じる授業ですばらしかった。 など

#### ④ 造形と総合的な学習について

美術科発信の総合的な学習ができるのではないだろうか。小学校段階でのコンピュータ学習も大切だと感じた。／自らの力を自らが高めていく力がこれからは大切になる。 など

### ○討議の概要

#### ① 動機づけの大切さ

- ・ 本当におもしろいもの、楽しいものを与えるのが大切。
- ・ 2枚の連続する絵があれば、その間に動きが生まれ、心も動く。

#### ② 班活動（グループ学習）

- ・ コミュニケーションのとり方の計画的な学習……総合的な学習での取り扱いで積み重ね。

（学級内友人のいいところ探し……相手のよさを引き出す／班のいいところ・校内のいいところ探検……班での話し合い／希望のリストアップ……少数派の尊重、相手への質問／・寄り合いをつけることの学

び、何をしなければならないのかまず行動すること)

・学んだことの生活化

他からの知識 ⇄ コミュニケーション ⇄ 自分  
⇒ 総合的な学習 (生きる力へ)

・評 価

グループ学習における評価は必ずしも点数化できるものではないが生徒の動きをとらえ、質的評価に心がけなければならない。



## 提言について

- 提 言 者 札幌市立札幌北中学校 中川原信生  
札幌市立東栄中学校 白崎 博  
テ ー マ 「ホームページ作りと心のふれあい」

○討議の内容

**提言者の主張**

現代の社会において、コミュニケーションを阻害する要因は一層増大している現実があるのではないか。その中で美術活動は心や生活の根底を築くものとして大切な学習として位置づけされなければならないものである。自己の心の表現を作品化して他に情報を発信する。その相互行為によって、造形としてのコミュニケーションが成り立ち、文化としての発展に寄与してきた。

いま、世界の情報のネット化を考えると、この孤立する機械の前で、無機質化しそうな自己の表現を避け、心あるコミュニケーションを表現するために、美術科にコンピュータが入ってきた意義を強く感じる。 —中川原

**実践発表による提言**

いま、情報を得ようとすれば家庭に居ながらにして全世界を相手にできる環境が当たり前のようになろうとしている。そんな周囲の変化の中で、中学校の今こそコンピュータを通して伝えたいこと、美術の一教師として真剣に考えたいところでもある。

- ・コンピュータを活用し、創造力を高めたい。
- ・コンピュータは人が使うもの。人が正しい判断をしないと、人に害を与える存在になる。機械に振り回されず、使う心を育てたい。(機械と人との関係は、一歩間違えると人と人との関係を崩し、人が見えなくなる)

人間性を確実に変えていくものが機械だとしたら、その意味をしっかりと教え正しく使う側の人であってほしいという思いを込めて、「使いこなす」という目的だけではなく、「自分の思いを表現する道具」として「人と人とのコミュニケーション」に関わる機械としてとりあげてみたい。～「ホームページを作る」題材で実践を紹介。 総合的な学習との関連で考察～ —白崎

## ○参会者からの意見および討議

- 東京や関西ではコンピュータはいつごろから導入されたのか。／二人に1台は以前からだが、一人1台になったのは最近のこと。／ソフトをどうするかが問題だと思う。生徒の数だけ入れることは困難な状況。／ただ（無料）のソフトをいかに手に入れるかが課題だ。
- 画像、映像処理ならOffice 2000でできる。／規格にのっとったソフトがあれば共有できるのに。／コンピュータも過渡期なのだろうか？／学校に入っているコンピュータにもソフトを入れるのが自由になればいいのだが。
- コンピュータの活用によって、画面を通して自分の内面との葛藤が生まれる。さらに他人からのヒントが得られ、また教えてやれる。そこに人と人のコミュニケーションが生まれるのではないか。／コンピュータの意義、機械の意義をしっかりとつ必要があろう。そのためにも教師の教材研究は必須の条件になるだろう。 など



## 話し合いのまとめ

アドバイザー（札幌市立新陵中学校 三輪 望）

生徒の心を開き、互いにつなぎ合い感動の共有ができることを目指したいものである。教育の究極の目標は、個の確立であり、共生である。他者との心をつなぎ、生きる能力の育成が大きな課題となる。感性を磨くためには、「楽しさ」が大前提であらねばならないし、美術教育の課題と使命もそこにあるのではないだろうか。各先生方の今後一層の活躍をお願いしたい。



# 個性と造形

## 【中学校分科会】

運営委員……寺田 実（札幌市立柏中学校）  
記録者……小出 倫生（北広島市立東部中学校）  
アドバイザー……吉田 英夫（千歳市立青葉中学校）

### 話し合いの柱

「むきあう」姿を生み出すために

#### 《教材化・題材構成について》

- 題材との出会いを通して、しっかりと自分なりの思いやこだわりを持つことができたか。
- 他者とのかかわりの中で、自分らしさを認識できる題材であったか。

#### 《授業展開について》

- 教師のかかわりは、子供の変容に働きかけることに有効であったか。
- みんなに認められたり、自分でも振り返られるような「むきあう」場を設けていくことが、表現や鑑賞の高まりにつながっていたか。

## 授業について

○授業者 札幌市立山鼻中学校 小澤 香子  
題材名 「わくわく彫刻パンフレット」

### ○討議の内容

#### 授業をふりかえって

- ・ 日常の活動では、調べたり書いたりすることが好きな子が多く、自分なりに考えたことを深めていくことが足りない。そこで第一印象・五感・体全体で受け取ったこと大切にしていこう、という考えのもとに今日の授業があった。
- ・ パンフレットにしたのは、レポートではなくヴィジュアル的に工夫を加えることで、思いを詰め込む道具として持たせたかったからである。予想以上にしっかりとつくってくれた。
- ・ 子供にとっては、やりにくさを感じずに取り組んでいた。
- ・ 事前にこの彫刻美術館を訪れた子供が三人おり、その三人以外が今日初めて本物を見た。
- ・ 7～8割がコンピュータを持つ家なので、インターネットで「本郷新」を各自が掘り下げている。
- ・ 調査内容の発表もあったが、感じたことや印象をつかんで発表してくれていた。
- ・ 各題材において必ず1時間、鑑賞の時間を設けている。人の前で説明することには慣れている。
- ・ 子供は予想以上にがんばっていた。
- ・ 今後はイサム・ノグチやブランクーシを鑑賞させたい。



## 参会者からの意見

- ・ 教師のアドバイスやフォローが良く、グループで話し合ってから、鑑賞に行くという流れが新しかった。最後に班で交流したとき、生徒の発言に「おおっ」という声が上がった。
- ・ 授業のあとに、発表で言い逃していたことを、先生に伝えにきた生徒もいた。
- ・ 学校を離れて本物を見せる場で、生き生きと活動していた。
- ・ 「ボタン」のやわらかさ、空間を感じさせていたのがよかった。
- ・ 外国の作品の鑑賞は今後どう扱うのか？いろいろな作家を見るのもよいが、ひとりを見るのもよい。
- ・ 先に別館に入っていた子供たちの言葉「グリグリの子ネズミみたい」というような、その子ならではの感想が聞かれてよかった。
- ・ 「五感をつかう」という発想に立って今回の授業があったのだが、室内の展示作品は触れてはダメなものだったので残念な部分であった。見て発見できることと、触れて発見できることがあり、触れさせることがより高まりにつながっていく。
- ・ 自分のために作っているという点で、作品づくりは行き詰まっていたのでは。アイヌの人は「自分が怒る人を決めないと作品を作り出さない」という。人のために作るものは、目の見えない人でも見ることができるものだ。（見て発見できることと触れて発見できることに関わって）
- ・ 野外彫刻で触った感じを確かめていた子供もおり、許された条件のなかで手触り感は大切にされていたのでは。
- ・ 有用感を授業のなかに作り出していくというのが大切な要素である。
- ・ ある生徒の疑問があった時、「誰か調べている人」という質問をすることによって、別な子が発表できた、という場面があった。それを見ていた子が、「あそこまで調べていたのか」とか「もっとやらなくては」という気持ちを引き起こすことにつながる。
- ・ せっかく生徒がいろいろと発表をしていたのだが、教師が「～という感じがします」ということをいった。そう思うってしまう生徒がいるので、オープンエンド的に終わらせた方がよい。



## 提言について

○提言者 北広島市立大曲中学校 山崎 正明  
テーマ 「義務教育最後の授業『自分という人間の存在証明』」

○提言者 札幌市立真駒内曙中学校 平野まなみ  
テーマ 「《わたし》と『むきあう』授業めざして」

### ○討議の内容

#### 提言者より

- ・ 最近は自己を表現しないのが生きる道になっている。人付き合いの難しさの中で中学生は疲れており、自己を表現しない生徒が増えている。
- ・ 悪くなる中学校では、歌わぬ、描かぬ、走らぬ。これからは、歌い、描き、走る子である。自分を表現できる最先端の教科が美術である。
- ・ 個性は変容していくものであり、中学生はまだ未完成の時期である。



#### 意見交流

- ・ 技法指導は、人間存在証明のあとにやってはいけない。ここでは、追求心を確認するために取り組んだ。「自分とは何か漠然としていないか？」
- ・ 新教育課程を考える上で大変まとまった提言で、参考になった。
- ・ 時数が減り、45分授業が50分になった時、どうしかけていくのが課題。
- ・ 1年生の授業の最後に「2年生になったら2時間が1時間になる。制作時間がこれほど減るぞ」ということをしっかり伝え認識させる。
- ・ 変形した長方形の作品—休み時間や放課後に、苦手な子供と相談しながら取り組ませた。材料や作品の配置を工夫し、準備作業のスムーズ化をはかっている。  
この形については、違う感覚の形を意識させたかっただけで、どんな形でもよかったが、生徒の実態的に同じ形になっていった。



## 話し合いのまとめ

- 理想を生かした本物を鑑賞する素晴らしい授業でお互いに高まりがあった。生徒の疑問に対し、情報を的確に与えていた。21世紀型の授業を示してくれた。
- これからの美術はいろいろな要素を含んだ内容（スルー・ザ・カリキュラム）を考えていくことも大切である。
- 「手軽にコンパクトなものを」に走ってしまいがちだが、パンフを作るという「デザイン」もいいし「鑑賞」もいい。
- 「原の丈」の十字架～他の生徒にふることで「天草の乱」まで出てきた。社会科まで広がるスルー・ザ・カリキュラムであった。
- やる気のある子供だと「いい授業」になる。いい言葉があらわれる。「嵐の中の母子像」の感想には思わず涙ぐんだ。
- 「～だからいい」というのがなく、「ひたっていたい」といった言葉が子供たちから導き出されており、本物の鑑賞をやっていることに感心した。
- 「なぜ彫刻」なのかということに対し、鑑賞をやり、次に量の体験をさせ、鑑賞でさらに気付いていく。スパイラルに育てていく。



# 個性と造形

## 【高校部会】

運営委員……石川 雅 昭（東海大四高等学校）

記録者……鉢呂 彰敏（札幌平岸高等学校） 齋藤 周（札幌開成高等学校）

アドバイザー……近藤 暢男（札幌新川高等学校）

### 話し合いの柱

1. 題材設定について
  - ・抽象彫刻とは（見えないものが見えてくる）
  - ・素材とのふれあい
  - ・イメージの膨らみ
2. 授業についての意見、感想
  - ・生徒の動きはどうだったか
  - ・工夫、発見はあったか
3. 教材の発展性

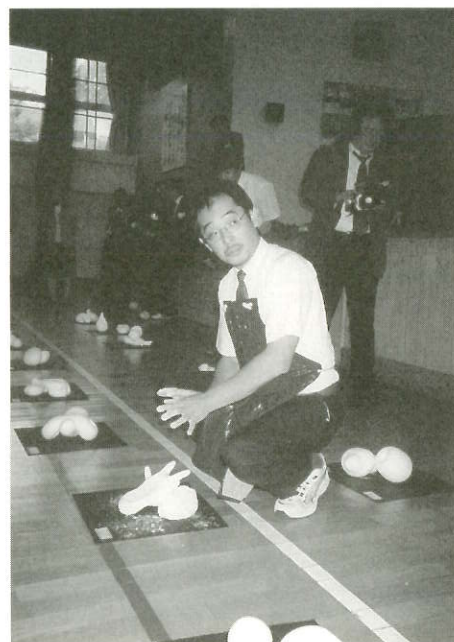
## 授業について

- 指導者 札幌丘珠高等学校 本田 勝哉  
授業協力者 石川雅昭（東海大四）澤田範明（札幌清田）本庄隆志（札幌南陵）  
松井茂樹（札幌月寒）坂東宏哉（札幌手稲）
- 生徒 丘珠高校 8名 南陵高校 2名 月寒高校 2名 清田高校 7名  
手稲高校 4名 平岸高校 8名 以上31名
- 題材名 「抽象彫刻～見えないものが見えてくる」

### ○討議の内容

#### 授業者の感想

今回の授業は市内各高校の美術部員が集まった特別学級であるため、指導案の段階から全員で検討していった。石膏という素材を使い、単体から複合への作品制作のため、1つ目をすでに制作し、生徒の顔も知っていたことが、スムーズに展開できた要因だろう。また、生徒自身も2回目ということもあり、石膏の材質を理解しており、活動も慣れた様子であった。反省点としては導入、及びまとめの段階で、その場にふさわしい言葉かけができていたかどうか。また批評の時、発展させて生徒同士が話し合える時間があればよかったのではないかという感想を持った。しかし単体を2つ組み合わせる作品を設置するにあたって、生徒の中から「寄り添う」とか「生まれる」等の言葉がでたことは良かったことだと思う。



## 参加者からの意見

質問 1 回目の時の様子はどんなものだったのか？

A 前回、生徒の活動の中で失敗し、つまずきがあった場面としては、ゴム手袋をゴムに引っかけて割った生徒がいたことです。また、考えが浮かばずに、制作が遅れる生徒もいました。また袋が割れて石膏が飛び散ったりして服を汚してしまう事もありました。服に付いた場合は、すぐにふき取らずにそのまま固化させてはがす事も徹底しました。

意見 私はカービングで25～26時間かけて抽象彫刻をしているが、発想の展開として面白いと思った。また単体から組み合わされた所に作品の完成を持ってきたところがとても良かった。また、あの形はとても綺麗なため木では不可能なぶん、発展としてさらにそれを彫らせていくというのも面白いと思う。

A 生徒は抽象の概念を理解した上で、抽象を造り上げるのはなかなか難しいので今回のように偶然の中から生まれてくる抽象はすんなり受け入れやすいだろう。今回の授業協力者の中に実際に授業で行っている先生がいらっしゃいますが、その授業では、この後、水を入れたバケツの中で削らせたあと磨かせているということです。

## アドバイザーから

私的な感想として石膏をいじって30年になるが形の成形にゴム手を使うというのは新鮮であった。これからまだまだ発展性、可能性がある素材であり授業であった。生徒たちの様子を見ても固まって来る時間、形が崩れないようにじっと抑えている姿など、たとえ失敗したとしても感動がある。

石膏は素材としてはもろい、汚れるなど敬遠されがちではあるが、これをエスキースにして木彫にしたりシリコンで型どりするなど発展させられるのではないか。いずれにしても「抽象」というものがどんなものなのか、生徒はなかなか答えられないものである。その導入としてはとても良かったのではないのだろうか。大都市では美術館などたくさんチャンスはあるが、地方ではなかなか少ないものである。しかしできるだけ実物をみせてあげたいし、そういうチャンスがあれば、是非生かして欲しい。



## ○討議の概要

- ・個性と造形の考え方や授業についての話し合いであった。
- ・自己理解・自己発展が自己実現につながる
- ・意図された偶然、偶然からのイメージを大切にしたい。
- ・教材として、まだまだ発展性があり、可能性のある素材での授業であった

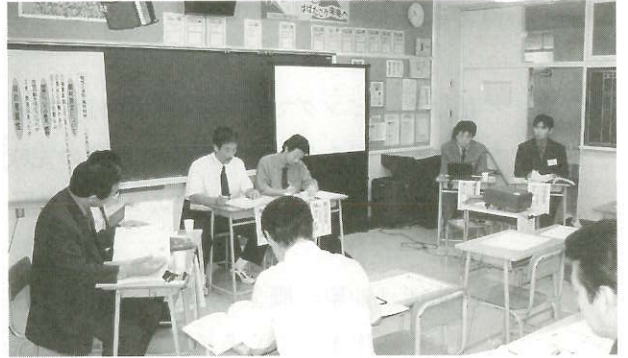
## 提言について

- 提言者 北海道札幌新川高等学校 吉岡 隆  
テーマ 「さっぽろ雪まつりで造形交流活動の実践」

### ○討議の内容

#### 提言者の主張

雪まつりでの、造形交流活動の実践では本校の美術部員たちが毎年「さっぽろ雪まつりの市民雪像」を共同制作してきました。数年前よりインターネットのホームページでその様子を紹介し、全国の児童、生徒と電子メールで雪像のアイデアやテーマをパソコン上の電子会議室で意見交換しています。また、共通するアイデアやテーマについてより深く話し合いをするためにテレビ会議システムを使ったプレゼンテーション交流を横浜、福井、沖縄の生徒たちと行いました。こうして話し合われたアイデアをもとに市民雪像の講習会に本校の生徒たちが参加し、雪像制作指導員からアドバイスをうけて最終的な粘土模型を完成させました。また、交流した全国の児童、生徒たちとも、大通公園での雪像共同制作を行うことができました。今回は放送局で撮ったビデオを見ていただきたい。



#### 参加者からの意見

質問 沖縄から来ていたが、その費用はどうしているのか？

A 基本的には自分の学校でかかる分だけで、相手の学校にはそれぞれ負担してもらうことになります。

- 提言者 北海道音威子府高等学校 平田 昌也（工芸科）  
テーマ 北海道音威子府高等学校の工芸教育について

### ○討議の内容

#### 提言者の主張

提言というよりは学校紹介をさせていただきたいと思います。本校はかつて定時制課程の普通高等学校であり、地域の教育機関として機能していました。しかし、人口の減少や全日制高校への志望者の増大から入学者の現象を招き、一時は募集停止寸前の状況を迎えました。この状況を打開するため、昭和59年全日制に転換するとともに、地域の資源である木材に注目し、「木材工芸」を取り入れた特色ある教育課程を編成した新しい学校として再スタートし17年間を経過しました。現在では全道、全国から応募者が増え、北海道唯一の全日制課程・工芸科の私立高等学校として注目を集めています。また昨年創立50周年を機に校訓「HEART AND CREATION、創造・自主・飛翔」を制定し、「ものづくり」を通して、生徒の創造力を育て、個性を伸ばさせる教育実践を重ねています。是非本校の施設、設備や生徒の作品を見に来てください。

### 参会者からの意見

- ・ うらやましいと思うのは学校全体として地域の文化の発信者になっていることである
- ・ 造形もそうだが、地域を含めたコーディネーターとして役割もこれからの我々の課題ではないだろうか。
- ・ 評価法の工夫についてもはなされましたが、評価は評定ではないので、このような活動の中では、なにを得たかであるため当然通常と違ってよいと思いました。

## 話し合いのまとめ

現代の子供たちはものやお金はすぐ手に入る今、「では何をするか」という自分探しをしているのではないだろうか。ものや情報があふれる中で価値基準が多様化し、またそれぞれがそれぞれの価値基準を持っており、その方向を向いていると思う。しかし基本的に変わらないことは自分自身輝きたい、認めてもらいたい、あっといわせたいと思っていることではないだろうか。教師の仕事はそれを引っ張り上げてやることである。子供の視点で声を聞いて、新しいもの、取り入れられるものは、どんどん取り入れていってほしい。それが我々のこれからもやらなければならないことではないだろうか。





# 『〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸にして造形の未来を創る』

全国大会北海道大会研究局長

北海道造形教育連盟研究部 川島正夫

## 1. 『〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸にして造形の未来を創る』

### (1) 「心豊かに未来に生きる造形教育」

北海道造形教育連盟は、「心豊かに未来に生きる造形教育」を研究主題として研究を進めてきました。この研究主題には「造形教育を通して、自分の生き方を問い続け、さらに自分自身の変化に喜びを感じながら、豊かな心を育み、未来を切り拓いていこうとする人間を育てていきたい。」という思いが込められています。

「豊かな心」は、人やもの・自然などかかわりを持ちながら、様々な体験や問題を解決していく過程の中で生まれるものと考えます。そのためには、生きるエネルギーとしての「夢」が必要です。子供は、人や自然とふれあい、かかわりあいながら「夢」をもち、「夢」をかなえていく力を蓄えていくのです。さらに、「夢」は豊かな「想像」を生み、豊かな「生」を創造するのです。

しかし、時代をそのまま映し出す現代の子供たちは、「夢」を持つことを避けるように心を閉ざし始めているのではないのでしょうか。「夢」は想像することと無縁ではないと考えます。想像する楽しさを忘れ、考えや問いを持つことを避け、ただ浮遊するように存在するとしたら、もはや人間としての尊厳もなくしてしまったも同然ではないのでしょうか。

そこで、私たちは、空白や闇を埋める力としての「想像力」の回復のためにも、「手」で物をつくることを見直していかなければならないと考えました。「手」で物をつくるということは、単に手の巧緻性を高めるためのものではありません。「想像力」も鍛えられるのです。

これは、「手で考える」ことであり、同時に手で考える時間が保障されることなのです。

このような時間こそが、「人間として生きる感性を育てる時間」といえるものではないのでしょうか。足元の小さな花に目をやる「時間」や「空間」は、人間そのものが持つ感性であり、そこに感動や心の豊かさが存在するのではないのでしょうか。

それでは、未来に生きるということはどういうことなのでしょう。それは、身の回りにある様々なことに感じ、自分の手でものをつくり、そのつくり出す過程の中で、自分を見つめ、新たな自分を確かめながら、自分自身の手で未来をひらいていくということと考えます。それは、とりもなおさず、造形教育の未来を創ることであります。ですから、私たちは、子供の〈いま〉を大切に、未来を考えていきたいと思えます。

このような考え方から、私たちは、北海道造形教育連盟の研究主題を「心豊かに未来に生きる造形活動」といたしました。そして、私たちは、北海道造形教育連盟の研究主題をより具現化した形として、本全国大会の研究主題を「〈いま〉〈ここ〉〈わたし〉を基軸にして造形の未来を創る」と設定し、研究を進めてきました。

## (2) 『いまここわたし』を基軸にして造形の未来を創る』

現代、〈わたし〉という存在はとても不確かなものとなっていてしまっています。そして、その〈わたし〉というものは、『記憶』により形づくられています。〈わたし〉が「感じた」ことが『記憶』という形で〈わたし〉を形づくっているのです。ですから、自分自身で「感じる」ことを重視した教育が必要と考えます。インターネットなどに代表される「仮想の体験」ではなく、直接会う、直に見る、手で触るという「直接の体験」こそが大切にされなくてはならないのです。主体的にかかわり、実感の伴った「体験」を通すことで、初めて「経験」として身につけ、次に生きる「知恵」や「力」が育まれるのではないのでしょうか。

私たちは次のように考えました。人やもの、自然などとの直接の体験、豊かなかかわりこそ〈いまここわたし〉であり、その中で新たな〈わたし〉、つまり自分を見出していくことが、私たちが目指す造形活動と考えたのです。私たちは、この〈いまここわたし〉と基軸にしなが、子供の、造形の未来を見据えた授業を構築していきたいと考えました。

## 3. 研究主題の具現化～研究主題と5つの扉～

### (1) 研究主題の具現化に向けて

私たちの目指す未来に向かって生きる豊かな〈わたし〉づくりを、実際の授業で実現するためには、もう少し具体化されたイメージしやすい授業像が必要になります。そこで、『感じてつくる』ことで〈わたし〉を『ひらく』造形活動という授業像を設定しました。

研究主題と関連させて、〈いま『感じてほしいこと』、〈ここ』で『つくってほしいこと』、〈わたし』に『ひらいてほしいこと』を授業構築の柱とすることで、私たちが目指す造形活動の具体化を目指してきました。それを、「造形BOX」として表にまとめてきました。

もう少し具体的に述べますと、『感じてほしいこと』とは造形活動で大切にしたい心ということになりますし、『つくってほしいこと』とは大切にしたい表現ということになります。そして『ひらいてほしいこと』が従来の言葉でいう題材の目標や美的価値ということになります。さらに私たちは、この『ひらく』という考え方の中に、今までとは違う世界に降り立った〈わたし〉の表現による夢や願いが実現された状態、という意味ももたせました。これは「有能感」「可能性の広がり」さらに「自尊感情」というように言い換えることができるかもしれません。私たちは、子供が『ひらく』ことによって内面が豊かになり、自分づくりや未来づくりに向かっていってほしいと願っています。

### (2) 合言葉は『ひらく』～我々の授業観～

『ひらく』ということの子供の側からしますと“高まりの自覚”というように考えることができます。小学校高学年より上の子供では“自己評価”という形であられることが可能でしょう。また小学校低学年より下の子供では“浸る”“没頭する”などの姿で現れると考えました。

子供が『ひらく』姿の現われこそ、造形活動を子供に提供する価値そのものです。同時に、子供が「過去」から「現在」への高まりを自覚する中で有能感や自己の可能性の広がりを自覚するものであり、「未来」を紡ぎ出していく土台となるものなのです。

ですから、『ひらく』という考え方を授業構築や授業評価の観点の中で重要視してきました。私たちは、「子供の『ひらく』姿が見られたか？」を合言葉に研究を進めてきたのです。

勿論、子供が見つけたわれわれの想定していなかった造形的価値を含めて認めていく、ということは言うまでもありません。

### (3) 《5つの扉》とは？

私たちは、子供の『ひらく』姿を生むために、より具体的な造形活動の観点となり、その後の研究協議の切り口となるような《5つの扉》を設定してきました。実際の研究で、「遊びと造形」「もの・材料（環境）と造形」「暮らしと造形」「コミュニケーションと造形」「個性と造形」という《5つの扉》を開くことで、子供の『ひらく』姿を見つめてきたのです。

この《5つの扉》には各々キーワードを設定し、子供の『ひらく』姿に向かう具体的子供の姿を検証してきました。

- 「遊びと造形」 ～【ひ た る】(自分の世界にたっぷりとひたっているか)  
「もの・材料（環境）と造形」～【か かわ る】(繰り返しものにかかわり、つくり続ける姿が見られたか)  
「暮らしと造形」 ～【う る お う】(自分の生活をより豊かにしていこうとする姿が見られたか)  
「コミュニケーションと造形」～【わかちあう】(互いに理解し合い、心を伝え合う姿が見られたか)  
「個性と造形」 ～【む き あ う】(主体的に問題解決に向かうことから、新しい〈わたし〉に気づく姿が見られたか) です。

これらのキーワードが表す子供の姿を生むことで、私たちが目指す「今までとは地が世界に降り立った〈わたし〉の表現による夢や願いが実現された状態」～つまり「未来に向かって生きるより豊かな〈わたし〉づくり」が実現されると考えたのです。

ですから、これらのキーワードが表す子供の姿は、授業で期待する子供の姿であり、授業評価のポイントとして実践研究を進めてきました。

## 4. おわりに

以上、大会における北海道の主張を述べてきました。

第46回「全道造形教育研究大会札幌大会」の成果を受け、札幌市造形教育連盟「新5カ年計画」を発足させたことから今回の全国大会への道は始まりました。一年次を「ふりかえり探る年」、二年次以降を「方向づける年（主題の決定）」「発展する年（研究内容のまとめ、修正）」「確かめ合う年（プレ大会の開催）」、そして今年度の「発表・整理する年（全国大会の開催）」と、札幌市造形教育連盟の研究部による授業を中心とした研究が積み重ねられてきました。

そして、今年度の大会に至るまで、数多くの研究部会、扉責任者を中心とした「扉会議」、「2月会」などの授業研究、高等学校部会による「プレ大会」、遠くオホーツクの先生方も参加して下さった「分科会リハーサル」などを経て、大会を迎えることができました。

また、大会当日は、全国各地より1000人を越える先生方の参加をいただき、たくさんの貴重なご意見をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

アドバイザー、提言者、記録者と、全道各支部の方々の力をお借りした、文字通りの“全道大会”でありました。美術科、図画工作科の存続の危機が叫ばれる今、北海道から〈自分づくりの造形活動〉を発信できたことは大変意味深かったと考えます。

全国から参会していただいた方々のご意見をもとに、今回の大会の成果と課題を見つめなおし、さらに研究を深化発展させていくことが大切であると考えています。

【研究主題】

<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る

# 未来に生きる<わたし>づくり

実感

記憶

<わたし>

より自分らしい表現  
夢 願い

有能感

可能性の広がり

ひらく

ひたる

「遊びと造形」

かかわる

「もの・材料(環境)と造形」

うるおう

「暮らしと造形」

わかちあう

「コミュニケーションと造形」

むきあう

「個性と造形」

感じて つくって

<いま>

今の自分  
もっているよさ

であい ふれあい

<ここ>

環境  
場所 材料 人

【授業テーマ】

感じて つくって ひらく 造形活動

# ワークショップ

<札幌芸術の森> 2001. 9. 8

## 『自然とつながる 仲間とつながる』

### 1 ねらい

北方の新しい芸術、文化の創造を目指す「札幌芸術の森」は、その名にふさわしい豊かな自然環境の中にある。この素晴らしい環境の中、この地域で採れる札幌軟石と枝木を使いアートホール前広場を緑のキャンパスに見立て、常盤の小中学生が思い思いに広げ、つなげることによって作品を、そして2時間の中で充実感あふれる活動を目指したものである。

石と木の枝、この素材は普段何気なく見ているものである。でも、そこに人の意志をそそぎ込むことによって、作品という生命が宿り、見る人にまた新たな感動が伝わっていくことを期待している。



### 2 概要

□場 所 札幌芸術の森アートホール前広場

□参加者 札幌市立常盤小学校、札幌市立常盤中学校の児童生徒45名

□材 料 札幌軟石、枝木、間伐材、縄、ひも

常盤の子供たちは、芸術の森とはもともと関係が深い。野外学習、写生のスケッチ、芸術鑑賞会などと親しんでいる。参加の子供たちは希望を募って集まってきたので意欲は高かった。

基本的に押さえたことは、研究テーマの扉「感じて」「つくって」「ひらく」をこのワークショップの活動に取り入れてきたことである。

### 3 活動

#### わかちあう

自然とつながる、仲間とつながることを目指してきたワークショップである。芸術の森で初めて出会うグループの仲間たちであった。今、緑のキャンパスの芝生という場で「どんなことをやってみたい」と小学生に尋ねる中学生のリーダー。「ライオンを石でつくってみたい」と答える小学生。アートホール前広場のいたるところで頭をつきあわせて作戦会議をする姿



が見られた。具体的なイメージを形にするグループ、素材を並べて試しの活動からスターとするグループと  
いろいろであった。どのグループとも「ここはどうする」「この方が面白いとおもうよ」と中学生のリーダ  
ーシップが発揮されていた。大きな石や間伐材を協力して運ぶ姿やそれぞれのお気に入りの場所に合う作品の  
イメージを話し合いながら自然に交流していた。

### かかわる

周囲の山々に囲まれた豊かな自然の  
アートホール前広場で目の前に置  
かれた材料。

ふぞろいの札幌軟石大きな間伐材・白樺の枝・ひもや  
ロープ。どのグループも素材の特徴を理解し加工してい  
った。具体的にはイメージに合わせて石を削ったり、枝を  
切ったりして用具を必要に応じて活用した。また、構想  
したことを材料の形からヒントを得て、より発想を広げ  
て楽しい作品にしようと活動していった。緑のキャンバ  
ス上では、どの子供たちも真剣に素材と向かい合い、ど  
のグループも試行錯誤の連続であった。



### ひたる

子供たちは五感を働かせ、並べる美しさ、積み上げる楽しさ、つなぐ面白さが緑のキャン  
パス一面に広がる。石を積み上げてライオンを中心にするイメージを広げたグルー  
プ。軟石厚みのちがいがからでる音を工夫し、つないで楽器を考えたグループ。軟石の形の違いの面白さから  
放射状に美しく配置を工夫したグループ。軟石と間伐材とを組み合わせ大地の力強さ表現したグループ。

子供たちの制作活動を見ているといろいろな発想がわき起こってくるみたいであった。「こうやってみた  
い」「こうすると面白いかも」というグループの仲間の気持ちを汲み上げ、さらに没頭して生き生きと活動  
する姿が素晴らしいと感じた。

## 4 ふりかえり

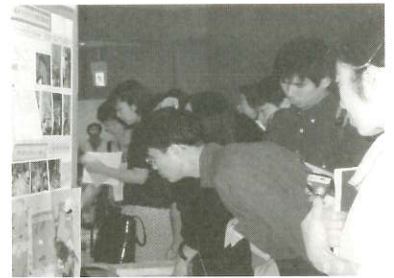
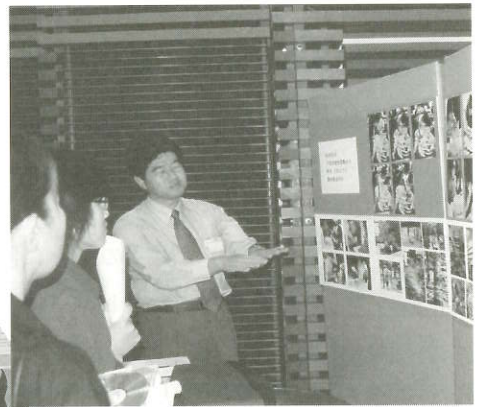
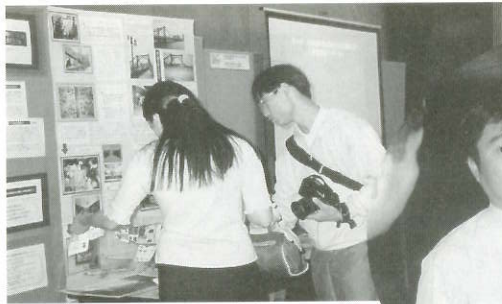
初めて出会った仲間と素材であったが、子供たちは全身を使い活動にひたっていた。

楽しく意欲的に活動するためには、「させられている」という意識からでなく、自らの意志で「～しよう」と  
と目的を持つものでなければならない。このワークショップでは場所・素材・用具などを事前に決められてい



たが、「このような表現をしたい」という目的意識を持つことにより、素材・表現方法・用具などを自分たちなりに選択し、自己決定できた。そのことで制作活動の中に、さらに新しい考えや試みなどが発揮されていた。「いま ここで わたし」のテーマの具体化の一つとして、充実感や達成感自己の可能性の広がりを感じてきた。また、このワークショップの素晴らしい自然環境、常盤の仲間・素材によって、子供たちの感性がより磨かれたと考える。

# 実践バザール in 芸術の森



## ◇ 実践バザールにご協力いただいた先生及び団体 ◇

- |                        |           |
|------------------------|-----------|
| ○愛知県 愛知大学教育学部附属小学校     | 木村 早苗 先生  |
| ○青森県 久栗坂小学校            | 本田 千代子 先生 |
| ○大阪府 大阪教育大学教育学部附属平野小学校 | 西尾 正寛 先生  |
| ○大阪府 大阪教育大学教育学部附属平野小学校 | 山田 芳明 先生  |
| ○岐阜県 鏡島小学校             | 古田 啓一 先生  |
| ○滋賀県 守山小学校             | 大西 健之 先生  |
| ○滋賀県 水口小学校             | 黄瀬 重義 先生  |
| ○東京都 日本橋小学校            | 竹内 ともこ 先生 |
| ○東京都 江原小学校             | 佐藤 ひろみ 先生 |
| ○福岡県 城島小学校             | 畑 正純 先生   |
| ○台湾中華民国 児童美術教育学会       | 萬 榮瑞 先生ほか |
| ○北海道 北海道教育大学附属旭川中学校    | 西岡 裕英 先生  |
| ○札幌市 中学校美術部作品展         |           |
| (札幌市 北海道教育大学附属札幌小学校    | 野切 卓 先生)  |

# 参加されたみなさんの声から

## 「エネルギーをありがとう。」

秋田県 秋田市秋田北中学校  
中川 恵

北海道の先生方のエネルギー、感性に感動しました。その力が、子ども達の学ぶ力、感じ取る力、創造する力、自己表現、自己実現していく力となっているのでしょう。

すばらしい授業、提案等ありがとうございました。

エネルギーをいただきました。そして、生徒さん達に拍手!!来て よかった!!



## 「感じ、つくり、ひらくこと」

愛媛県 肱川町 肱川町立肱川中学校 大盛 通

私は免許外で美術を担当しており、これからの作品づくりの参考にと会に参加させていただきました。参加して、改めて強く感じたことは、今まで、私は、よい（ととのった）作品を仕上げるのが第一であると考えてきたのですが、それが間違いだったということです。自分らしさを表現する大切さ。そこから自分を見つめ、新しい自分を発見するという考えのもと、北海道の先生方が大変よく努力され、勉強していることがわかりました。

先にも述べたように私の授業では「感じ、つくり、ひらく」の中で、とにかく「つくる」ことが重視されていたように思います。これから、もっと先を見通した活動である「ひらく」ことに重点をおき、「自分らしさ」を発見させる活動を展開したいと感じています。北海道の先生方には、準備・実践などでお世話になりました。ありがとうございました。



## 「成果を確信！」

東京都 世田谷区駒留中学校  
中村みどり

「ようこそ先輩」の授業を見せていただきました。生徒の喜びを見て成果を確信しました。授業の教材の切り口に勉強になることがたくさんありました。

「コミュニケーションと造形」の分科会では「コミュニケーションに関わること」「パソコン機

器を使うこと」以外にも総合的な学習についてもお話があり、とても参考になりました。学校にもどって生かしたいと思います。



## 「有意義だった3日間」

北見市 置戸中学校 松本真理子

これからの美術教育の方向性や問題点が少し見えたような気がしました。専門家の先生や現場で活躍されている方々の意見を聞くことができ大変勉強になりました。私にとって有意義な3日間となりました。大会の運営にたずさわった先生方および関係者の方々、どうもありがとうございました。



## 「うらやましい環境」

東京都 台東区立台東小学校

飯村 幸子

幌南小学校授業での中学生の素直な感想や態度がとても印象的でした。分科会は体育館を2つに分けたのは聞き取りにくく集中しにくい部分があってもったいなかったです。

芸術の森でのパネルディスカッションは、それぞれの自分の言葉が表われていて、こちらも納得

するものでした。ワークショップで木と石という素材のためか、大人の助太刀が不可欠で、子どもの思いを実現するための大人の支えが多すぎたのではと思いましたが、それでも広い場所で自然の木と石を使っての造形は気持ちのよいもので、環境のうらやましさを思ったものです。

## 「美術は楽しく表現」札幌市立宮の丘中学校 築地 政樹

中1のコンピューターを使った授業。生徒の顔が生き生きとしていた。見ている方も楽しかったです。高校の彫刻の授業。高校生らしさが表現されていました。袋が破れてしまった生徒も楽しそうでした。美術は楽しく表現活動することが条件ですね。



## 「北海道大会ご苦労様。」

新潟県 上越市八千穂中学校 小関 育也

全国規模の大会運営、大変であったと思います。窓口となった旅行業者との連絡もスムーズであり、安心して札幌は来ることができました。ホテルも行動しやすいように中心街にとっていただき感謝します。



研究については、流れが明確になっていて、わかりやすいと思いました。しかし、全体発表では言葉が先行している感を受けました。せっかくの内容をわかりやすくするための確かな実践をもっと知らせてくれると更によかったと思いました。

また、全道造形教育研究大会の毎年開催に敬意を表しますとともに、51回目の終了を心からお祝い申し上げます。長年の実践の積み上げが底力を作っているのですね。参考にしたいと思います。ありがとうございました。



## 「感動！」

室蘭市 室蘭東高等学校

水本 夕佳

何よりも、楽しそう。  
さわってびっくり  
感触から、イメージもわく。  
むずかしい事も 必要ですが、  
こういった感動も  
忘れてはいけないと思いました。

## 「階段式授業公開」

旭川市 春光台中学校 庄子 展弘

数多い授業会場の中、幌南小学校での参加になりました。階段式授業公開のため、いろいろな授業を参観することができ、参考になるべきことも多かったです。できれば、同じ中学校の授業を階段式にしてもらえれば、もっとよく見られたかなと思いました。分科会については、場所もないのですが、体育館に2分科会ということで聞こえずらかったり、隣の分科会の声が聞こえたり、内容が良く把握できない点もあったのが残念です。

しかし、全体を通して、3日間とも今後の自分の実践に向けて、振り返ってみるべきこと、考えさせられることも多く、有意義な時間になりました。校内の作品掲示も多く参考になりました。準備・運営ご苦労様でした。また、大変ありがとうございました。

## 「北海道まで来れて、よかったなあ。」

東京都昭島市 玉川小学校 中田 宏美

幌南小学校にて研修しました。玄関ドアの明るくダイナミックなモザイク画に迎えられて、楽しい授業を見せていただきとてもうれしく、北海道まで勉強に来れてよかったなあと思いました。

分科会は「もの・材料（環境）と造形」に参加しました。アルミ缶を使った授業で、当日までに①アルミ缶を開いて、いろいろに細工してみる（ためす）②小作品を作ってみる。③本時へ……の様に段階を追って指導しているのが、とてもいいと思いました。音楽でいえば発声練習のような準備が図工でも必要だと私も思っています。

3日目、芸術の森でもワークショップ、小中学生合同で木と石の素材から何が生まれるか、とても楽しみでした。子どもたちは緑の芝生の中でのびのびと活動し、最後には、石・小枝・縄、などをうまく使って、ストーンサークルや、登呂遺跡などを連想させる、ユニークな造形ができていました。

人間は自然の中から、衣食住のいろいろなものを作り出してきました。セット教材ではなく、素材を生かし、作る意味（＝作ってどうする？作る喜びは？）をよく考えた造形活動を、今回の研修を生かして、めざして行きたいと思います。

心残りは、6年生の「ここで、今、何を」の取り組みの最後の作品が見られなくて（片付けられていて）とても残念でしたが、もし、「研究授業の作品集」ができましたら、ほしいと思いますのでご連絡いただきたく思います。

運営委員の皆様のご親切、心にしみました。本当にありがとうございました。

組

織

大会長 芝木 秀昭 札幌市立幌南小学校長 北海道造形教育連盟委員長

運営委員長	窪田 恵子 札幌市三角山小長				
運営委員	江川 佳徳 札幌市中長 繪面 和子 函館市大森小長 及川 輝夫 旭川市東鷹栖中長	斉藤 池田町池田中長 吉田 英夫 千歳市青葉中長	隆博 英夫	池田町池田中長 千歳市青葉中長	長 中長
運営委員	桑田 正博 恵庭市恵明中頭 佐藤 正幸 南幌町南幌中長 竹生 元 小樽市忍路中央小 坂野 潤治 美瑛町宇莫別小長 川原 潤 旭川市光陽中 織田 達史 留萌市緑丘小長 石原 佑一 八雲町八雲中長 藤川 潔 函館市鱒川小中長 田中 俊一 今金町今金中長	長谷川英二 室蘭市北辰中長 北村 哲朗 室蘭市武揚小 佐藤 公毅 苫小牧市凌雲中 下坂 正之 広尾町豊似中長 山口 雅子 帯広市明和小 中島 郁子 釧路市光陽小長 花田 光正 佐呂間町栄小長 煤賀 克文 根室市共和小長	英二 哲朗 公毅 正之 雅子 郁子 光正 克文	室蘭市北辰中長 室蘭市武揚小 苫小牧市凌雲中 広尾町豊似中長 帯広市明和小 釧路市光陽小長 佐呂間町栄小長 根室市共和小長	中長 小 中長 中長 小長 小長 小長 小長
監査	若竹 隆郎 熊石町雲石小長	内田 暢一 美瑛市中央小長			
運営顧問	高橋 栄吉 道造連 六代委員長 遠藤 久男 道造連 八代 森市誠次郎 道造連 九代 森川 昭夫 道造連 十代 松嶋 輝男 道造連 十一代	金井 秀男 道造連 十三代委員長 鹿嶋 健 道造連 十四代 船谷 昭弘 道造連 十五代 白井 剛毅 道造連 十六代 吉田 俊雄 道造連 十七代			

実行委員会

実行委員長	藤井 正治 札幌市上野幌東小長				
実行委員	芝木 捷子 札幌なかのしま幼長 佐藤 靖 札幌市栄南小頭 三輪 望 札幌市新豊中長				
事務局長	櫻田 豊 札幌市北園小				
事務次長	板木 武 札幌市もみじ台南小長 角力山 旭 札幌市常磐中長 石川 雅昭 札幌東海第四高	篠原 寛 札幌市福井野小 合田 典史 札幌市前田北中 田中 潤 札幌市屯田中央中 伊藤 尚 札幌市米里中			
総務局長	益村 豊 札幌市真駒内緑小				
諸議部長	谷山 圭子 札幌市白楊小				
レセプション部長	今谷 孝 札幌市平和小				
接待部長	氏家 珠実 札幌市西小				
局員	斎藤 三佳 札幌市白楊幼 高井 修子 札幌市中央小 永向 智子 札幌市八軒西小 阿部 俊樹 札幌市手稲中央小	縮内 徹 札幌市月寒中 池嶋 憲彦 札幌市稲穂中 橋詰 博 札幌市南が丘中			
局顧問	赤石 芳郎 札幌市すみかわ南幼長 伊藤 武司 札幌市屯田西小長 廣瀬 恵子 札幌市苗穂小頭	小泉 信嗣 札幌市宮の丘中頭 寺嶋 文憲 札幌市真栄中頭			
会計局長	富田 泰 札幌市八軒小長				
経理部長	今 裕子 札幌市豊水小頭				
受付部長	植木 則子 札幌市平岸小				
庶務部長	古谷 壽朗 札幌市屯田西小				
局員	細川 依子 札幌市丘珠幼 池田 悦子 札幌市円山小 山室ゆかり 札幌市西岡南小 久保ふじ子 札幌市札苗緑小	岩田 守代 札幌市明園小 奈良岡 学 札幌市苗北小 向 敏光 札幌市真栄中			
局顧問	富所 玲 札幌市南小				
事務局					
事務局	稲實 順 札幌市創成小				
会場部長	土井 善範 札幌市伏見小				
展示部長	白井 真澄 札幌市西宮の沢小				
輸送部長	安木 尚博 札幌市幌南小				
渉外部長	元茂 章子 札幌市澄川南小				
局員	小野 正二 札幌市伏古北小 熊谷 悦代 札幌市八軒北小 松本 和彦 札幌市元町小	山本 景子 札幌市新陽小 葛西 美 札幌市山鼻南小 伊藤 正敏 札幌市西白石小			

提言者	福島由紀子 藁島龍本 瀧本信博 菅原長和 毛利聡 堀口基一 岡澤邦彦 椿野衣江 小澤香子 西川紫菜子 白崎博 平野まなみ 山崎正明 小野泰裕 小出倫生 石川早苗 大高雅子 水野一英 澤田範明 松井茂樹 本岡勝哉 吉岡隆 齋藤周 石川雅昭 石谷正美 坂田恭彬 伊藤善彬 内藤暢一郎 石橋尚明 築山英夫	札幌市桑園小 札幌市和光小 函館市旭岡小 札幌市真駒内南小 札幌市和光小 旭川市豊岡小 札幌市藻岩南小 札幌市三角山小 札幌市前田中 札幌市新陵中 札幌市山鼻中 札幌市北都中 札幌市東栄中 札幌市真駒内曙中 北広島市大曲中 札幌市藻岩中 北広島東部中 札幌市手稲中 札幌市平岡緑中 教育大札幌附属中 札幌市清田高 札幌月寒高 札幌丘珠高 札幌市新川高 札幌市開成高 札幌市東海大第四高 札幌市もみじ台南中頭 札幌市藻野南小 顧問 奈井江町奈井江小長 網走市東小頭 旭川市雨粉中長 千歳市青葉中長	渡辺貞之 里見貴史 中澤孝仁 宮武喜美子 櫻田梧 豊田ゆき 宮崎亨 中川原信生 川原潤 横岸澤英二 安田仁昭 寺田実 本庄隆志 坂東宏哉 平田昌也 鉢呂彰敏 小林万咲彦 伊藤武司 繪面和子 角力山旭 三輪望 近藤暢男	空知美研 女満別町大成小 滝川市東小 網走市中央小 札幌市幌西小 札幌市あいの里東中 札幌市柏丘中 札幌市札幌北中 旭川市光陽中 函館市港中 札幌市西岡北中 札幌市柏中 札幌南陵高 札幌手稲高 音威子府村音威子府高 札幌市平岸高 札幌市石山南小 札幌市屯田西小長 函館市大森小長 札幌市常磐中長 札幌市新陵中長 札幌市新川高頭
提言者	福島由紀子 藁島龍本 瀧本信博 菅原長和 毛利聡 堀口基一 岡澤邦彦 椿野衣江 小澤香子 西川紫菜子 白崎博 平野まなみ 山崎正明 小野泰裕 小出倫生 石川早苗 大高雅子 水野一英 澤田範明 松井茂樹 本岡勝哉 吉岡隆 齋藤周 石川雅昭 石谷正美 坂田恭彬 伊藤善彬 内藤暢一郎 石橋尚明 築山英夫	札幌市桑園小 札幌市和光小 函館市旭岡小 札幌市真駒内南小 札幌市和光小 旭川市豊岡小 札幌市藻岩南小 札幌市三角山小 札幌市前田中 札幌市新陵中 札幌市山鼻中 札幌市北都中 札幌市東栄中 札幌市真駒内曙中 北広島市大曲中 札幌市藻岩中 北広島東部中 札幌市手稲中 札幌市平岡緑中 教育大札幌附属中 札幌市清田高 札幌月寒高 札幌丘珠高 札幌市新川高 札幌市開成高 札幌市東海大第四高 札幌市もみじ台南中頭 札幌市藻野南小 顧問 奈井江町奈井江小長 網走市東小頭 旭川市雨粉中長 千歳市青葉中長	渡辺貞之 里見貴史 中澤孝仁 宮武喜美子 櫻田梧 豊田ゆき 宮崎亨 中川原信生 川原潤 横岸澤英二 安田仁昭 寺田実 本庄隆志 坂東宏哉 平田昌也 鉢呂彰敏 小林万咲彦 伊藤武司 繪面和子 角力山旭 三輪望 近藤暢男	空知美研 女満別町大成小 滝川市東小 網走市中央小 札幌市幌西小 札幌市あいの里東中 札幌市柏丘中 札幌市札幌北中 旭川市光陽中 函館市港中 札幌市西岡北中 札幌市柏中 札幌南陵高 札幌手稲高 音威子府村音威子府高 札幌市平岸高 札幌市石山南小 札幌市屯田西小長 函館市大森小長 札幌市常磐中長 札幌市新陵中長 札幌市新川高頭
提言者	福島由紀子 藁島龍本 瀧本信博 菅原長和 毛利聡 堀口基一 岡澤邦彦 椿野衣江 小澤香子 西川紫菜子 白崎博 平野まなみ 山崎正明 小野泰裕 小出倫生 石川早苗 大高雅子 水野一英 澤田範明 松井茂樹 本岡勝哉 吉岡隆 齋藤周 石川雅昭 石谷正美 坂田恭彬 伊藤善彬 内藤暢一郎 石橋尚明 築山英夫	札幌市桑園小 札幌市和光小 函館市旭岡小 札幌市真駒内南小 札幌市和光小 旭川市豊岡小 札幌市藻岩南小 札幌市三角山小 札幌市前田中 札幌市新陵中 札幌市山鼻中 札幌市北都中 札幌市東栄中 札幌市真駒内曙中 北広島市大曲中 札幌市藻岩中 北広島東部中 札幌市手稲中 札幌市平岡緑中 教育大札幌附属中 札幌市清田高 札幌月寒高 札幌丘珠高 札幌市新川高 札幌市開成高 札幌市東海大第四高 札幌市もみじ台南中頭 札幌市藻野南小 顧問 奈井江町奈井江小長 網走市東小頭 旭川市雨粉中長 千歳市青葉中長	渡辺貞之 里見貴史 中澤孝仁 宮武喜美子 櫻田梧 豊田ゆき 宮崎亨 中川原信生 川原潤 横岸澤英二 安田仁昭 寺田実 本庄隆志 坂東宏哉 平田昌也 鉢呂彰敏 小林万咲彦 伊藤武司 繪面和子 角力山旭 三輪望 近藤暢男	空知美研 女満別町大成小 滝川市東小 網走市中央小 札幌市幌西小 札幌市あいの里東中 札幌市柏丘中 札幌市札幌北中 旭川市光陽中 函館市港中 札幌市西岡北中 札幌市柏中 札幌南陵高 札幌手稲高 音威子府村音威子府高 札幌市平岸高 札幌市石山南小 札幌市屯田西小長 函館市大森小長 札幌市常磐中長 札幌市新陵中長 札幌市新川高頭

会場校職員

芝木長頭	芝木南頭	阿知良任論	谷田中葉	小野香子	茂泉並	関口真美	鳥羽和美	マサ捷子	かおる敦子	優加啓恵	慶子美香	三香旬子	希子真美	和和美
理事	園長	主任	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員
芝木長頭	芝木南頭	阿知良任論	谷田中葉	小野香子	茂泉並	関口真美	鳥羽和美	マサ捷子	かおる敦子	優加啓恵	慶子美香	三香旬子	希子真美	和和美
理事	園長	主任	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員	教員

大村寿栄子	憲一武彦	池田哲三	三井上恭子	梅野隆信	澤波珠希	堀田平松	南かおる	花田正雄	土肥宏充	加藤正幸	東尚典	小泉誠	小林知広	水吐千穂子	石川純子	浅井律子	中山龍雄	平井歩	富田賢司	結城健介	阿部時彦	中居正光	田口和男	東雅子	原田政美	宗像宏子	富波修	
札幌市東園小	札幌市藻野小	札幌市月寒小	札幌市大通小	札幌市澄川南小	札幌市共栄小	札幌市前田中央小	札幌市北野小	札幌市南月寒小	札幌市南月寒小	札幌市清田南小	札幌市新川中央小	札幌市大谷地東小	札幌市東光小	札幌市手稲北小	札幌市光陽小	札幌市南白石小	札幌市三里塚小	札幌市手稲西中	札幌市厚別北中	札幌市美香保中	札幌市中央中	札幌市月寒東小	札幌市白石小	札幌市開成小	札幌市澄川南小	札幌市新琴似北小	札幌市八軒小	札幌市旭小
大村寿栄子	憲一武彦	池田哲三	三井上恭子	梅野隆信	澤波珠希	堀田平松	南かおる	花田正雄	土肥宏充	加藤正幸	東尚典	小泉誠	小林知広	水吐千穂子	石川純子	浅井律子	中山龍雄	平井歩	富田賢司	結城健介	阿部時彦	中居正光	田口和男	東雅子	原田政美	宗像宏子	富波修	
札幌市東園小	札幌市藻野小	札幌市月寒小	札幌市大通小	札幌市澄川南小	札幌市共栄小	札幌市前田中央小	札幌市北野小	札幌市南月寒小	札幌市南月寒小	札幌市清田南小	札幌市新川中央小	札幌市大谷地東小	札幌市東光小	札幌市手稲北小	札幌市光陽小	札幌市南白石小	札幌市三里塚小	札幌市手稲西中	札幌市厚別北中	札幌市美香保中	札幌市中央中	札幌市月寒東小	札幌市白石小	札幌市開成小	札幌市澄川南小	札幌市新琴似北小	札幌市八軒小	札幌市旭小

窪田山内	廣瀬若杉	堀口基一	松本美樹子	庄司慎一	青正	佐藤広也	野呂満由美子	藤森久美	相高秀彦	大山健一	香代京子	西村稻川	養護教諭	事務職員	米養職員	調理員	用務員	校務助手
札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校
窪田山内	廣瀬若杉	堀口基一	松本美樹子	庄司慎一	青正	佐藤広也	野呂満由美子	藤森久美	相高秀彦	大山健一	香代京子	西村稻川	養護教諭	事務職員	米養職員	調理員	用務員	校務助手
札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校	札幌市立三角山小学校

## ◆ あとがきにかえて ◆

ここ札幌にも、雪解けとともに近づく春の気配が感じられる季節がやってきました。昨年9月、初秋の北海道で開催されました研究大会から、早半年が過ぎようとしています。

第54回全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌は「風よ大地よ夢よ～北からはじまる造形の未来」を大会テーマに、「<いま><ここ><わたし>を基軸にして造形の未来を創る」を研究主題とした、21世紀の造形教育の未来像を探る研究大会でした。幼稚園、小学校、中学校、高等学校と校種の枠を越え、5つの扉に基づいて構成された10の分科会と12の提言、そして17の授業を公開し、参加された方から多くの貴重なご意見、ご示唆をいただきました。

全国各地からお集まりいただいた造形教育に携わる多くの先生方の熱意に支えられ、成功裡に大会を終了できましたことを大変嬉しく思います。

既に次回開催県では、大会の諸準備にお忙しいことと思いますが、集録の発刊が遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。

最後になりましたが、本集録の発刊にあたり、原稿の執筆や資料の提供ににご協力いただいた多くの皆様に心よりお礼申し上げます。

### 第54回 全国造形教育研究大会北海道大会 in 札幌 大会集録

発行 全国造形教育連盟  
北海道造形教育連盟

発行代表者 北海道造形連盟委員長 芝木 秀昭  
全国造形教育研究大会実行委員長 藤井 正治  
研究局長 川島 正夫  
事務局長 桜田 豊  
広報局長 土肥 宏充

発行日 平成14年3月

印刷 コミナミ印刷株式会社

